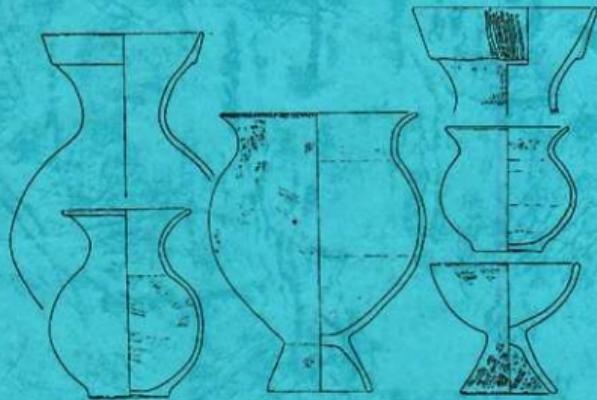


平野遺跡

発掘調査報告書



1993.3

山梨県教育委員会

山梨県林務部

序

本書は、1991年度に山梨県埋蔵文化財センターが実施しました、南巨摩郡増穂町最勝寺字平野に所在する平野遺跡の発掘調査報告書であります。今回の調査は山梨県林務部が計画しました森林総合研究所の建設に先立ち実施したもので、80,000m²の予定地全体を試掘調査して遺跡範囲を確認し、そのうち25,000m²を本格的に発掘調査いたしました。

調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居址25軒と土坑3基、中世末の掘立柱建物址1軒、溝1条、土坑1基などを検出しました。特に住居址群は弥生時代後期末にほぼ限定される集落址で、峠西地域では33軒の住居址が調査された柳形町の六科丘遺跡に次ぐ規模の集落です。また、この時期の遺跡の調査面積では県内でも他に例のないものです。集落は、中央の古い浅谷を境に南北2群に分かれます。また、住居址は多いもので3回の建て替えが見られるものがあり、切り合い関係を持つものもあることから、何軒かの単位で何時期かにわたっての居住が考えられます。さらに、住居址は焼失したものが多い点や、完形土器のまとまった出土状態など、この時期の集落を研究するのに貴重な資料が得られました。これらの成果が今後の研究の一助となれば幸甚です。

末筆ながら、調査に当たってご助力いただきました関係機関各位、並びに直接調査に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

1993年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例　　言

- 1 本書は、山梨県南巨摩郡増穂町最勝寺字平野に所在する平野（ヒラノ）遺跡の調査報告書である。
- 2 本調査は、山梨県林務部の依頼を受けて、山梨県教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査および整理作業は、山梨県埋蔵文化財センターが行った。
- 4 本書の執筆および編集は保坂康夫が行った。
- 5 本書にかかる出土品および図面、写真は、山梨県埋蔵文化財センターが保管している。
- 6 整理作業参加者は以下の通りである。
金井京子、長田てる美、伊藤正彦、西名博恵、名取洋子、伊藤順子、平重蔵、内藤由紀子、塙島富美子、斎藤律子、石原はづ子、高坂博子

目 次

序

例言

第1章 発掘調査の経過

| | |
|----------------|---|
| 第1節 発掘調査に至る経過 | 1 |
| 第2節 調査の組織 | 1 |
| 第3節 発掘調査の経過と方法 | 3 |

第2章 遺跡の立地と環境

| | |
|----------------|---|
| 第1節 遺跡の概要 | 4 |
| 第2節 周辺の遺跡 | 7 |
| 第3節 遺跡周辺の地形と立地 | 9 |

第3章 遺構と遺物

| | |
|--------------------------|-----|
| 第1節 縄文時代の遺物 | 9 |
| 第2節 弥生時代中期の遺物 | 10 |
| 第3節 弥生時代後期の遺構と遺物 | 10 |
| 第4節 中世の遺構と遺物 | 103 |
| 第5節 13号住居址床面下土壤の炭化種子水洗選別 | 108 |

第4章 結語

| | |
|-----------------------|-----|
| 第1節 弥生時代後期後半の土器群について | 115 |
| 第2節 弥生時代後期後半の住居址群の区分 | 120 |
| 第3節 弥生時代後期後半の焼失住居と集落像 | 121 |

挿図目次

| | | |
|------|-----------------------------|----|
| 第1図 | 平野遺跡試掘坑配置図 | 2 |
| 第2図 | 平野遺跡遺構分布図 | 5 |
| 第3図 | 遺跡の位置と周辺の遺跡 | 6 |
| 第4図 | 平野遺跡発掘調査地域と周辺の地形 | 8 |
| 第5図 | 縄文時代土器 | 9 |
| 第6図 | 弥生時代中期土器 | 10 |
| 第7図 | 1号住居址 | 12 |
| 第8図 | 1号住居址遺物出土状況 | 13 |
| 第9図 | 1号住居址出土土器 | 14 |
| 第10図 | 2・3号住居址 | 16 |
| 第11図 | 2・3号住居址遺物出土状況 | 17 |
| 第12図 | 2号住居址出土土器 | 18 |
| 第13図 | 3号住居址出土土器 | 18 |
| 第14図 | 4号住居址 | 20 |
| 第15図 | 4号住居址出土土器 | 21 |
| 第16図 | 5号住居址 | 22 |
| 第17図 | 5号住居址焼土、木炭、遺物分布図 | 23 |
| 第18図 | 5号住居址出土土器 | 24 |
| 第19図 | 6号住居址 | 26 |
| 第20図 | 7号住居址 | 28 |
| 第21図 | 7号住居址出土土器 | 29 |
| 第22図 | 8号住居址 | 31 |
| 第23図 | 8号住居址遺物出土状況 | 32 |
| 第24図 | 8号住居址出土土器 | 33 |
| 第25図 | 9号住居址 | 35 |
| 第26図 | 9号住居址木炭・焼土出土状況と遺物出土状況 | 36 |
| 第27図 | 9号住居址出土土器 | 37 |
| 第28図 | 10号住居址 | 39 |
| 第29図 | 12号住居址 | 40 |
| 第30図 | 10・12号住居址焼土、木炭および床面上に遺物の分布 | 41 |
| 第31図 | 10・12号住居址覆土中遺物出土状況 | 42 |
| 第32図 | 10号住居址出土土器 | 43 |
| 第33図 | 12号住居址出土土器 | 43 |
| 第34図 | 11号住居址 | 45 |
| 第35図 | 11号住居址覆土中遺物出土状況 | 46 |
| 第36図 | 11号住居址断面図 | 47 |
| 第37図 | 11号住居址出土土器 | 47 |
| 第38図 | 13号住居址 | 49 |
| 第39図 | 13号住居址床面上に遺物出土状況と焼土、木炭片層の分布 | 50 |
| 第40図 | 13号住居址出土土器(1) | 52 |
| 第41図 | 13号住居址出土土器(2) | 53 |
| 第42図 | 13号住居址出土土器(3) | 54 |
| 第43図 | 14・15・16号住居址 | 57 |
| 第44図 | 14・15・16号住居址遺物出土状況 | 58 |
| 第45図 | 14号住居址出土土器 | 58 |
| 第46図 | 15号住居址出土土器 | 59 |
| 第47図 | 16号住居址出土土器 | 59 |
| 第48図 | 17号住居址 | 61 |
| 第49図 | 17号住居址出土土器 | 62 |
| 第50図 | 18号住居址 | 63 |
| 第51図 | 18号住居址断面図および土層断面図 | 64 |
| 第52図 | 18号住居址遺物出土状況 | 65 |

| | | |
|------|----------------------|-----|
| 第53図 | 18号住居址出土土器 | 66 |
| 第54図 | 19号住居址 | 67 |
| 第55図 | 19号住居址出土土器 | 68 |
| 第56図 | 20号住居址 | 70 |
| 第57図 | 20号住居址出土土器 | 71 |
| 第58図 | 21号住居址 | 73 |
| 第59図 | 21号住居址遺物出土状況と土層断面 | 74 |
| 第60図 | 21号住居址出土土器(1) | 75 |
| 第61図 | 21号住居址出土土器(2) | 76 |
| 第62図 | 22号住居址 | 77 |
| 第63図 | 22号住居址焼土・木炭層と遺物出土状況 | 78 |
| 第64図 | 23号住居址 | 79 |
| 第65図 | 23号住居址焼土・木炭層 | 80 |
| 第66図 | 23号住居址出土土器 | 80 |
| 第67図 | 24号住居址 | 82 |
| 第68図 | 24号住居址出土土器 | 83 |
| 第69図 | 25号住居址 | 84 |
| 第70図 | 1・2号土坑 | 85 |
| 第71図 | 1号土坑出土土器 | 85 |
| 第72図 | 2号土坑出土土器 | 85 |
| 第73図 | 3号土坑 | 86 |
| 第74図 | 3号土坑出土土器(1) | 87 |
| 第75図 | 3号土坑出土土器(2) | 88 |
| 第76図 | 埋没浅谷と土器出土地域 | 90 |
| 第77図 | 北側埋没浅谷とクション図 | 91 |
| 第78図 | 北側埋没浅谷土器出土状況 | 92 |
| 第79図 | 南側埋没浅谷土器出土状況 | 93 |
| 第80図 | 北側埋没浅谷出土土器 | 94 |
| 第81図 | 南側埋没浅谷出土土器 | 94 |
| 第82図 | 弥生時代後期の筋鉢車 | 95 |
| 第83図 | 弥生時代後期の石器(1) | 96 |
| 第84図 | 弥生時代後期の石器(2) | 97 |
| 第85図 | 弥生時代後期の石器(3) | 98 |
| 第86図 | 弥生時代後期の石器(4) | 99 |
| 第87図 | 弥生時代後期の石器(5) | 100 |
| 第88図 | 弥生時代後期の石器(6) | 101 |
| 第89図 | 1号掘立柱建物址 | 104 |
| 第90図 | 1号掘立柱建物址断面図 | 105 |
| 第91図 | 1号掘立柱建物址出土土器 | 106 |
| 第92図 | 1号溝 | 107 |
| 第93図 | 4号土坑 | 107 |
| 第94図 | 出土古錢 | 108 |
| 第95図 | その他の中・近世遺物 | 108 |
| 第96図 | 13号住居址の炭化米分布状況 | 113 |
| 第97図 | 平野遺跡の壺、台付壺の型式とその他の器種 | 116 |
| 第98図 | 平野遺跡の弥生時代後期住居址群区分図 | 121 |

挿表目次

| | | |
|-----|-------------------|-----|
| 第1表 | 22号住居址出土石錐計測表 | 101 |
| 第2表 | 種実遺体同定結果 | 112 |
| 第3表 | 各遺構の土器型式組成 | 117 |
| 第4表 | 各住居址の有文土器と無文土器の重量 | 119 |
| 第5表 | 住居焼失に関わる属性表 | 119 |

図版目次

図版 1

平野遺跡遠景、南地区南部、南地区西部、南地区から北地区西部を望む、北地区から北側埋没浅谷と南地区を望む、北地区西半部、発掘調査風景

図版 2

1号住居址、2号住居址、3号住居址、4号住居址、4号住居址周溝内木炭片出土状況、4号住居址周溝内壺出土状況、5号住居址、5号住居址木炭片焼土等出土状況

図版 3

5号住居址台付甕出土状況、5号住居址壺出土状況、6号住居址、7号住居址、7号住居址遺物等出土状況、7号住居址壺口縁部出土状況、8号住居址、9号住居址

図版 4

9号住居址木炭片等出土状況、9号住居址炭化材出土状況、9号住居址炭化材出土状況（拡大）、10・12号住居址、10・12号住居址焼土・木炭出土状況、10号住居址土器出土状況、10号住居址磨石出土状況、11号住居址

図版 5

13号住居址、13号住居址遺物出土状況、13号住居址土器出土状況、13号住居址高環出土状況、13号住居址壺出土状況、13号住居址周溝内土器出土状況、13号住居址土壤サンプリング風景

図版 6

14・15・16号住居址、17号住居址、17号住居址柱穴内壺出土状況、19号住居址、19号住居址台付甕出土状況、18号住居址、21号住居址、21号住居址遺物出土状況

図版 7

21号住居址土器出土状況、21号住居址壺出土状況、22号住居址、22号住居址木炭片出土状況、22号住居址炭化材出土状況、22号住居址石錘（北群、南群）出土状況

図版 8

23号住居址、23号住居址焼土出土状況、24号住居址、25号住居址、1号土坑、2号土坑、3号土坑、3号土坑上面遺物出土状況

図版 9

3号土坑土器出土状況、北側埋没浅谷E-F線土層断面、北側埋没浅谷G-H線土層断面、南側埋没浅谷、1号掘立柱建物址と20号住居址、1号溝、4号土坑

図版10

13号住居址出土壺、3号土坑出土壺、21号住居址出土壺、4号住居址出土壺

図版11

13号住居址出土壺、北側埋没浅谷出土壺、7号住居址出土壺、17号住居址出土壺、5号住居址出土壺

図版12

21号住居址出土壺、13号住居址出土高環、19号住居址出土広口壺、21号住居址出土広口壺

図版13

13号住居址出土広口壺、18号住居址出土鉢、19号住居址出土台付甕、土製紡錘車、磨製石庭丁、打製石斧、剥片

図版14

砾石、磨石、石英礫、13号住居址土壤水洗選別種実遺体

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経過

平野遺跡のある地域は、桑畠が広がり、畑地灌漑用水によるスプリンクラーの利用など先進的な養蚕地帯である。この地域に、山梨県林務部により森林総合研究所が建設されることとなった。予定地域は80000m²と広大であるが、その中に平野遺跡の一部が入るため、山梨県教育委員会の文化課と林務部との間で協議、調整に入った。まず、予定地内での遺跡の広がりを把握するため、試掘溝を設定しての範囲確認調査を行うこととした。

この試掘調査は、1991年3月5日から3月26日にかけて、山梨県埋蔵文化財センターが行った。まず、幅約50cm、長さ5m程度試掘溝を359カ所設定し、人力にて掘り下げ、遺物、遺構の有無を確認した。また、遺物の確認された地域では、その広がりをより正確に把握するため重機により幅約2m、長さ20~40m程度の試掘溝を19カ所掘り下げた。その結果、調査対象地域の北側で、17カ所の試掘溝から遺物、遺構を確認した（第1図）。こうした遺物・遺構の出土状況や地形から判断して、試掘調査対象地域の北側約26000m²が遺跡の範囲とした。

この結果を受け、県林務部の林業指導課と県教育委員会の文化課とで協議し、1991年度中に本調査を行うこととした。本調査は、1991年9月2日から1992年1月23日にかけて、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。その結果、弥生時代後期の住居址25軒、同時期の土坑3基、中世末の掘立柱建物址1軒、同時期の溝1条、土坑1基などを検出した。

第2節 調査の組織

範囲確認試掘調査

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 今福利恵、森原廣明

調査作業員 佐藤春雄、望月政秋、芦沢勝藏、大森富太郎、大森朝市、保坂栄三、秋山薰治、芦沢 弘、芦沢留市、芦沢ちどり、芦沢初江、芦沢よし子、芦沢ひろ江、芦沢三恵子、芦沢みゆき、大森みさ子、芦沢よし子、芦沢八千子、芦沢幸子。

発掘調査

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 保坂康夫、平山優

調査作業員 芦沢光雄、芦沢三恵子、芦沢幸子、芦沢ちどり、折居さく、河住照雄、鷺田進、秋山とみ、芦沢八千子、芦沢ひろ江、秋山満洲朗、秋山薰治、岩井ツネ、芦沢初江、芦沢留市、芦沢たけ子、塚田多美子、内藤春枝、折居さく、



第1図 平野遺跡試掘坑配置図 (1/4000)

篠田公隆、佐藤春雄、深沢善兼、黒田美江子、名取幾子、佐藤真知子、
芦沢勝蔵、大森富太郎、深沢朋治郎、深沢照明、折居伸一、芦沢よし子、
芦沢あき子、齊藤利男、齊藤直江、渡辺きよ、佐藤勲、大森朝市、大森みさ子、
小清水清隆、望月政子、立川なつじ、井上文一、渡辺貞子、大村昭三、
石井開造、西山錦、松井俊雄、芦沢みゆき、佐塙金作、佐塙トヨ、
鈴木うた子、秋山富平、大森喜美子。

調査協力機関 増穂町教育委員会

第3節 発掘調査の経過と方法

発掘調査では、対象となった26000m²全体を重機により表土剥ぎを行い、遺構確認を行った。試掘調査時の所見では、表土である耕作土層直下で遺構確認面となること、耕作土層が20~30cmとかなり薄いこと、また、現地は段状の畑地で車両の進入が困難な所が多いといった点を考慮し、表土の搬出は行われず、現地の畑単位で表土をまとめて排土することとした。排土は、畑の境界に置いたが、遺構が確認された場合、遺構のない部分を運んで排土した。

現地の地山は、礫を混えた黄褐色粘土質土壤で、黒褐色の遺構覆土とは比較的の区別が明瞭である。したがって、重機による表土剥ぎ作業の段階でほとんどの遺構の所在が把握できた。重機による表土剥ぎ作業の後、人力により遺構確認作業を行った。ジョレンによる確認面の精査作業であるが、地山も含め、当地の土壤が粘土質であるため、乾燥させると硬化して削りづらく確認作業が困難となる。人力による精査作業の面積確保のため、重機による表土剥ぎ作業をかなり先行させたが、その地城は硬化してしまい、後の作業にかなり苦労した。

重機による表土剥ぎ作業は、1991年8月15日から行った。人力による発掘作業は、同年9月2日より開始した。夏の炎熱のため土壤の乾燥が著しいため、散水作業を行いながら調査を進めた。調査は、12月25日までにおおかたの作業は終了し、1992年の1月23日に実測作業等、全ての調査作業を終了した。

発掘作業では、出土遺物については、光波測距儀と小型コンピューターによる遺構調査システム「サイト」(コンピュータ・システム(株))を用いて全点記録を目指したが、調査の後半では、時間の関係でそれがはたせなかった遺構がある。それらについても、覆土中の遺物について一括扱いとしたが、床面上出土遺物については微細図を作成し記録した。遺構についても、光波測距儀と小型コンピューターによる実測作業を行ったが、一部で平板実測した住居址もある。また、遺物微細図についても、「サイト」の中のデジタイザーシステムを用いて、35mmカメラにより撮影したキャビネサイズ写真から図化したものがある。

本遺跡の住居址の多くは、木炭や焼土を多く伴う、いわゆる焼失住居であった。炭化材の形態が判明するものは極力図化し、また一部は取り上げたが、ほとんど形態が不明のものである。また、13号住居址では、炭化種子の検出のため、床面を50cm耕目で区切り、約2cm厚で土壤を採取し、水洗選別した。かなりの量の炭化種子が得られ、その同定をパリノ・サーヴェイ(株)に委託した。その成果については、第4章で詳述する。

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の概要

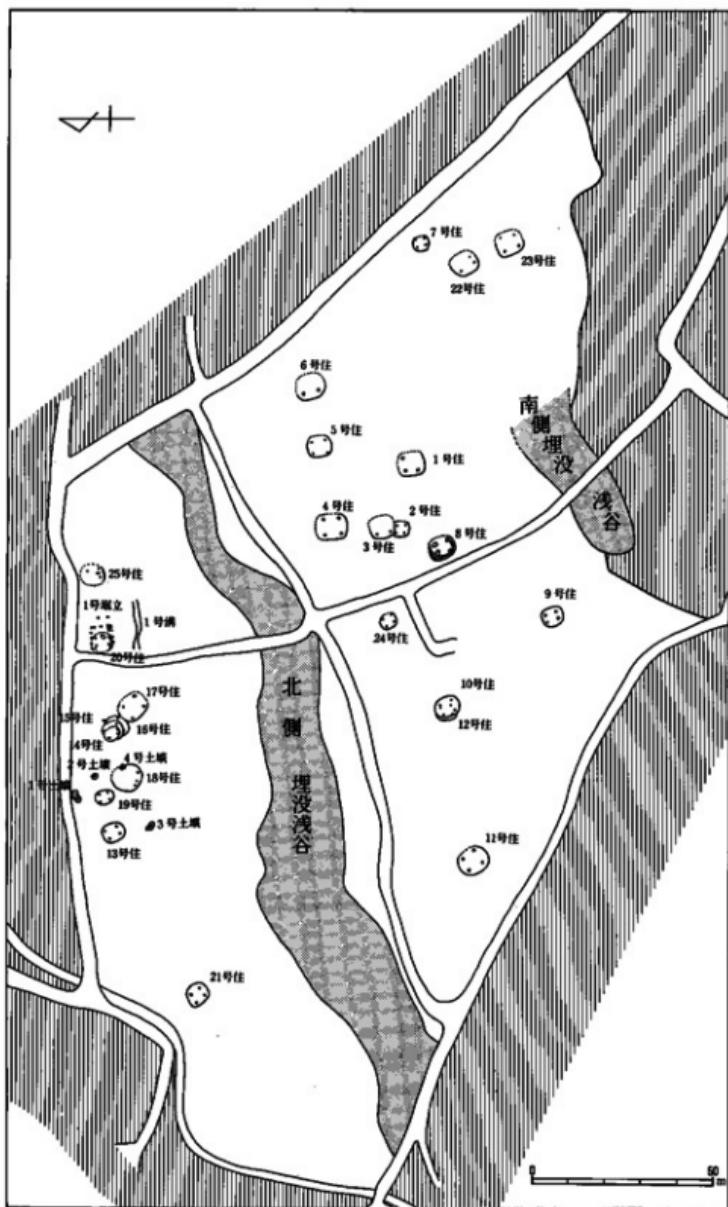
平野遺跡は、山梨県南巨摩郡増穂町最勝寺字平野に存在する。増穂町は、甲府盆地の南西部で、盆地内の雨水を集めた河川が合流し、富士川となる地点にある。本遺跡は、南アルプスの東斜面が甲府盆地に接した部分にあたる。山地の崖錐性の緩斜面上に立地する。標高315mから350mである。本遺跡からは、釜無川を越え、甲府盆地が一望できる眺望の地である。

本調査を行った地域の北端に竹の沢という小河川があるが、平野遺跡はこの小河川の両岸に広がっている。本調査地域の東側では地形が急峻になっており、また、検出した遺構の分布状況からして、これらの遺構の広がりはより北方へ広がるものと思われる。竹の沢と本調査地域との間にはかなり平坦な土地が広がり、この地域に遺構が分布しているものと考えられるが、竹の沢を渡った北岸側での遺構の広がりは、竹の沢がかなり深い沢であるので、別の単位を形成していたものと思われる。

今回の調査で検出された遺構・遺物は、縄文時代晩期の土器、弥生時代中期の土器が若干みられ、また、中世末頃の掘立柱建物址1棟、同期の溝1条、土坑1基が検出できたが、大半の遺構・遺物は弥生時代後期末のものである。住居址25軒、土坑3基が検出され、ほぼ單一時期の集落と思われる。調査地域の中央に現在は機能していない埋没浅谷がみられ、これによって遺構が南北の2群に分けられている(第2図)。南端部にも埋没浅谷があるが北側のものほど大規模ではない。北側、南側いずれの埋没浅谷にも弥生時代後期の遺物が局所的に分布している。それぞれの出土遺物や出土状況については後述する。なお、北側埋没浅谷より北側を北地区、南側を南地区と呼ぶ。

遺構の検出状況をみると、ほとんどの住居址が東半部が攪乱されて消失している。また、調査地域東半部の、地形傾斜の下方にある住居址は、壁がほとんど残存せず、周溝でその存在を確認できる程度のものがある。そうした住居址の遺物はかなり失われているものと思われるが、周溝内や床面直上でかろうじて残存しているものがいくつかみられた。また、西半部の比較的残りのよい住居址では、覆土中からも細かな土器片などがかなり出土しており、住居址周辺にも土器片の分布がみられるものがある。しかし、遺物の出土は、前述の埋没浅谷以外は、住居址など遺内から出土する場合がほとんどであった。

弥生時代後期の住居址は、大半がいわゆる焼失住居址であった。焼土や炭化木材、焼けた壁面や床面がみられた。また、完形土器が床面に散乱した状態の住居址がみられた。しかし、いずれの住居址の柱穴にも木炭がつまつた状態のものはみられず、検出にかなり苦労する状況であった。こうした状況から、出火の原因が失火など不慮の事故や第3者による故意の放火なのか、十分状況を把握して検討する必要がある。



第2図 平野遺跡遺構分布図 (1/1400)



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/2500)

- | | | |
|-------------|----------------|-------------|
| 1. 平野遺跡 | 10. 大塚古墳 | 19. 春米北山遺跡 |
| 2. 最勝寺西の入遺跡 | 11. 馬門古墳 | 20. 狐塚古墳 |
| 3. 春米中尾田遺跡 | 12. 青柳遺跡 | 21. 塚穴古墳 |
| 4. 大久保広見遺跡 | 13. 大門遺跡 | 22. 二十三夜塚古墳 |
| 5. 最勝寺大堀田遺跡 | 14. 長沢長池遺跡 | 23. 法華塚古墳 |
| 6. 鎌塚古墳 | 15. 長沢平池遺跡 | 24. 権現堂遺跡 |
| 7. 塚穴古墳 | 16. 長沢新町安清の池遺跡 | |
| 8. 無名古墳(2) | 17. 小林竹重遺跡 | |
| 9. 無名古墳(1) | 18. 春米上平遺跡 | |

第2節 周辺の遺跡

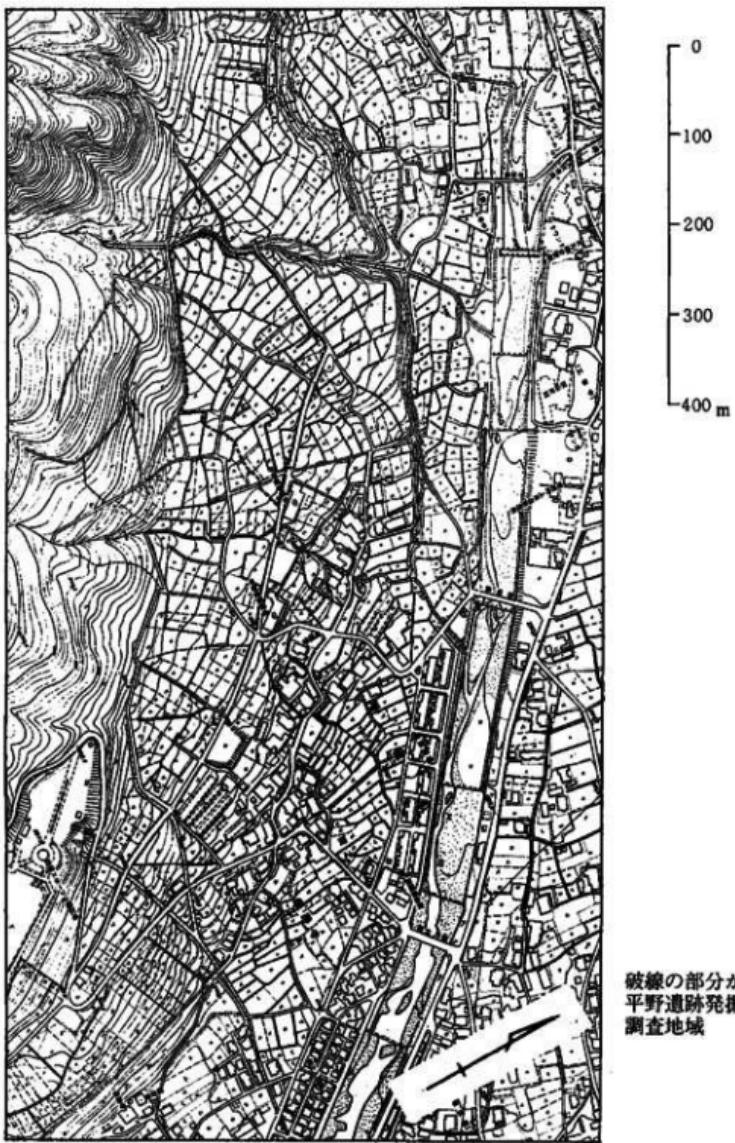
第3図に増穂町内の遺跡分布を示した。遺跡は、立地する地形によって大きく2群に分ける。山地と甲府盆地との境界線に沿って発達している崖錐性の緩斜面上に立地する一群と、扇状地端部に立地する一群がある。時代別にみてみると、先土器時代の遺跡は本地域にはみられず、縄文時代から遺跡が立地する。平野遺跡をはじめ、最勝寺西ノ入(2)、春米中尾田(3)、最勝寺大堀田(5)、春米上平(18)、春米北山(19)の各遺跡で中期を中心とする遺物が採集されている。これらは、いずれも崖錐性の緩斜面上に立地する遺跡群である。なお、近隣では、北方にある市ノ瀬台地(櫛形町)上で、六科丘遺跡や長田口遺跡などからナイフ形石器などが採集されている。また、縄文時代では、釜無川右岸の峠西地域(白根町以南、増穂町以北の地域とする)では、曾根遺跡(櫛形町)で出土している撚糸文土器が最古と思われる。また、〆木遺跡(櫛形町)では、中期の集落が発掘調査されている。

弥生時代では、上記の縄文時代土器が採集された遺跡の他、古墳以外の全ての全ての遺跡で弥生時代土器が採集されている。この段階で扇状地端部の遺跡群が出現する。峠西地域全体でみた場合では同様で、若草町や甲西町の扇状地端部の地域に弥生時代以降に遺跡が立地するようになる。発掘調査された遺跡では、弥生時代後期中葉に当たる住吉遺跡(甲西町)、後期後半の集落址である六科丘遺跡、長田口遺跡(両者とも櫛形町)が知られている。前者は扇状地端部に立地するが、後二者は台地上に立地する。盆地内全体でも、弥生時代後期後半で最近調査された遺跡は、上野遺跡(三珠町)、米倉山B遺跡、東山北遺跡(両者とも中道町)など、盆地との境界部にあたる台地肩部にほぼ単純時期の集落としてみられるものが知られてきた。こうした立地が、この時期の時代背景を反映している可能性も考えてみる必要があろう。

古墳時代では、弥生時代の大半の遺跡で遺物の採集が記載されているが、時期については不明である。古墳については、五世紀代のものの存在が推定されている。増穂町内では、法華塚古墳(23)で彷製鏡二面の他勾玉などの出土が知られている。峠西地域では、唯一の前方後円墳の物見塚古墳、六科丘古墳、上ノ東古墳(いずれも櫛形町)が知られている。

後期古墳では、馬門古墳(11)で直刀4本、鐵鎌などが出土し、孤塚古墳で直刀片の出土が知られているが、耕作などでかなり崩壊しており、石室など不明な状況である。その分布をみると、増穂町最勝寺の上殿原周辺、同町春米付近。峠西地域全体では、甲西町塚原付近などに古墳が集中的に分布している。古墳時代後半期の有力集団が少なくとも3集団はこの地域に存在していたものと思われる。しかし、集落址の発掘調査での把握は現状ではなされていない状況にある。

奈良時代以降の遺跡についても、〆木遺跡(櫛形町)や新居道下遺跡(若草町)などで奈良平安時代の集落が発掘されたり、權現堂遺跡(24)で古代末の泥塔供養に関する遺跡が調査されているものの、調査例数はそれほど多くないのが現状である。増穂町内では、今のところ明確にされていないが、峠西地区で最近分布調査された地域の状況をみると、古代・中世の遺跡は非常に多く把握されている。權現堂遺跡の存在が示すように、この地域を根城とした勢力がこ



第4図 平野遺跡発掘調査地域と周辺の地形 (1/6500)

の時代に存在しているはずであり、詳細分布調査の実施などによって今後、遺跡が多く把握されることが予想される。

第3節 遺跡周辺の地形と立地

第4図に遺跡周辺の地形図を示した。遺跡は、崖錐性の緩斜面に立地するが、その前面に戸川が南流している。戸川周辺には、氾濫原となる低平地が広がり、現在は水田として利用されている。戸川の東方には扇状地が広がっている。戸川から、遺跡の方向へ進むと、若干の低平地を越えて、戸川の形成したと思われる崖線に当たる。この崖線は、遺跡の全面から北上し、戸川の扇状地の扇頂に至る。比高は10~15m程度である。崖線は、遺跡の南東方、緩斜面の下半部に位置する西の入の集落付近ではみられなくなる。このあたりは、戸川の氾濫原に小高い緩斜面が張り出した状況であり、背後の山地から戸川に流れ込む芦沢川などが形成した小扇状地の可能性がある。しかし、その小扇状地上には、縄文時代や弥生時代の遺物を出す最勝寺西の入遺跡が乗っており、縄文時代以前に形成された比較的古い地形と思われる。

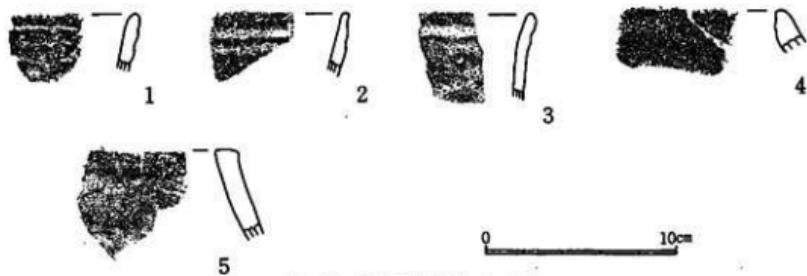
遺跡前面の崖線を避け、西の入の集落を通って遺跡に登ると、まず、先述の小扇状地を進み、傾斜がさらに急な地形をすぎて、平野遺跡の緩斜面に至る。この比較的急な斜面は西の入集落の背後から最勝寺裏の方向に角度をさらに急にしながら連続している。

このように、遺跡の立地面は、周囲を崖線や急斜面に囲まれた、より高い面にあり、なおかつ、そうした面のうち最も広く平坦な土地を占地できる地域に遺跡が占居しているようである。

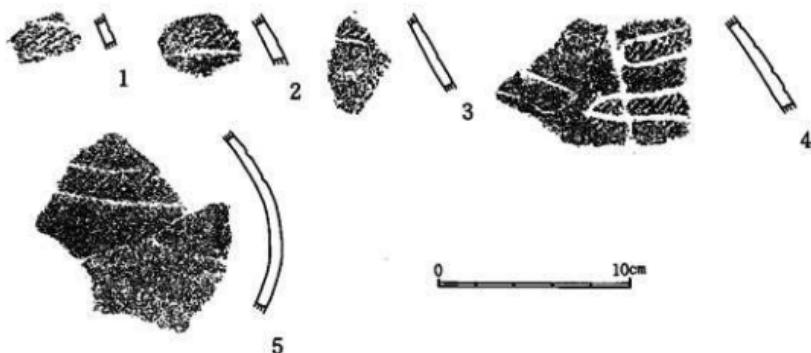
第3章 遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺物

縄文時代については、遺構は検出されなかった。また、遺物についても、1号住居址の覆土中から出土した土器片のみである。第5図に口縁部の拓本を示した。1は、口縁部直下に幅広で浅い沈線が、口縁に平行して三条施文されたもので、口縁は丸い。外面黒赤褐色、内面赤褐色で、胎土に白色粒子を多く含む。2は、口縁直下に幅広で浅い沈線が、口縁に平行して二条施文されたもので、口縁は丸い。内外面とも赤褐色で、白色粒子を多く含む。3は、口縁直下



第5図 縄文時代土器 (1/3)



第6図 弥生時代中期土器 (1/3)

に一条の幅広で浅い沈線が施文され、その直下に低い隆帯がみられ、いずれも口縁と平行する。内面には、やはり口縁直下に浅い沈線が口縁と平行に施文されている。1、2と違い口縁が内湾ぎみである。内外面とも暗褐色で、白色粒子を多量に含む胎土である。1～3は、いずれも口縁部が外傾する深鉢形土器である。

一方、4、5は口縁が内傾する深鉢形土器である。4は、無文で口縁が丸い。黒赤褐色で、あまり砂粒の目立たない胎土である。また、器壁が1cmと厚い。5は、無文で口縁が平坦である。内外面とも褐色で、砂粒の目立たない胎土である。器壁も1cmと厚い。

この他、無文の胴部破片が19片、底部破片が1片、1号住居址覆土中から出土している。

これらの縄文土器は、縄文時代晩期後半の水式の土器群と思われる。

第2節 弥生時代中期の遺物

弥生時代中期の土器が南側埋没渓谷から出土している。出土したのは、同一個体の胴部破片5片である。出土状態は、第3節の埋没渓谷の項で示したが、第79図に示したとおり、これらは一ヵ所に集中して出土した。

第6図に示した土器で、沈線によって細長い区画を作り、その中に縄文を施文している。4の破片をみると、細長い区画は平行して二段施文され、部分的に区切られている。おそらく、壺の胴部破片と思われる。色調は内外面とも暗赤褐色で、胎土に多量の白色粒子が入る。

これらの土器片は、文様構成から、弥生時代中期中葉の須和田式併行のものと思われる。

第3節 弥生時代後期の遺構と遺物

本遺跡の遺構・遺物の主体は弥生時代後期である。ここでは、各遺構の特徴、遺物の出土状態と出土土器について、遺構別に記述する。土器以外の土製品である紡錘車と石器については出土量が非常に少ないので、後にまとめて記述することとする。

1号住居址

遺構（第7図） 1号住居址は、南地区のほぼ中央に位置する。北壁部を簡易上水道の敷設によって壊されており、また、斜面下方側の東壁についても耕作等の擾乱を受けて消失している。住居址の形態をみると、残存する西壁や南壁が中央部でかなり直線的であり、隅丸長方形に近い形態を示している。また、南北方向にやや長い形態である。残存する部分では、長軸方向が6.5mであるが実際はもう1m程度長かったと思われる。短軸も6.5m程度と推定できる。なお、中央やや南側に東西にみられる溝は、畑地灌漑用水の管敷設による擾乱溝である。

柱穴は3本検出できた。直径60~70cm、深さ40cm程度である。地山に近い土壤で、若干黒みが強い程度の違いしかない土壤が覆土となっていたため、検出に苦労した。なお、南東部の柱穴は畑地灌漑用水の擾乱溝によって消失していると思われる。柱穴内よりの出土遺物はほとんどみられなかった。なお、主軸の方向を西半部の柱穴上場の中心を結んだ線で示すと、W-5°-Nである。

炉址と思われる焼土の広がりが住居址中央やや北よりで確認できた。床面が焼けた状態のものと思われ、枕石などや掘り込みなどもみられず、単なる地床炉であったと思われる。残存する焼土の範囲は、1m×40cmの長楕円で、長軸が北西—南東方向であった。

床面は地山面を利用しているらしく、十分に検出できなかった。遺構断面図のA-B線や、C-D線にみると、東側部分はかなり擾乱されているらしく、地山面が東側に傾斜している。

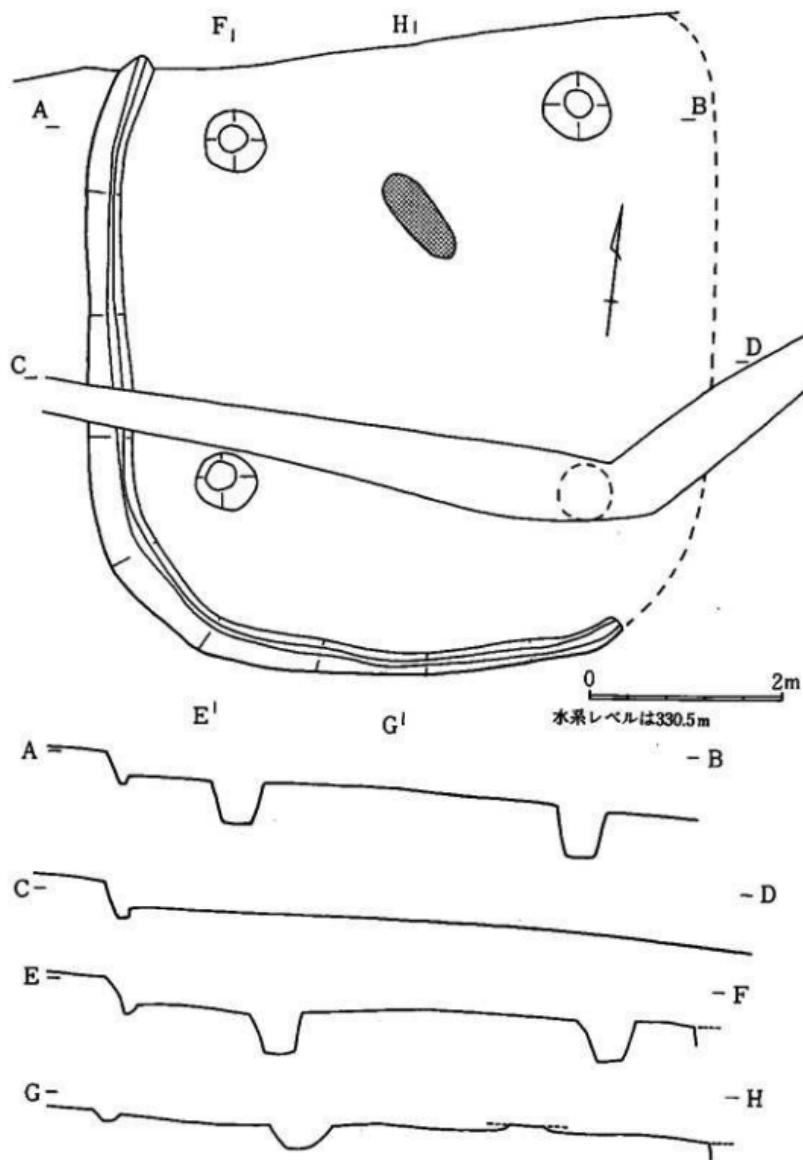
周溝は西壁および南壁直下にみられた。床面より10cm程度の深さであった。南壁直下の周溝は、東に行くに従って浅くなり、南東隅で消失するが、全周していたかは不明である。

遺物出土状況（第8図） 1号住居址の出土遺物としては土器があるが、他に木炭片が覆土中にかなりの量みられた。木材の形態を残すものではなくほとんど細片であったが、部分的に集中する所もあった。周溝内の木炭片の分布はあまりみられなかった。

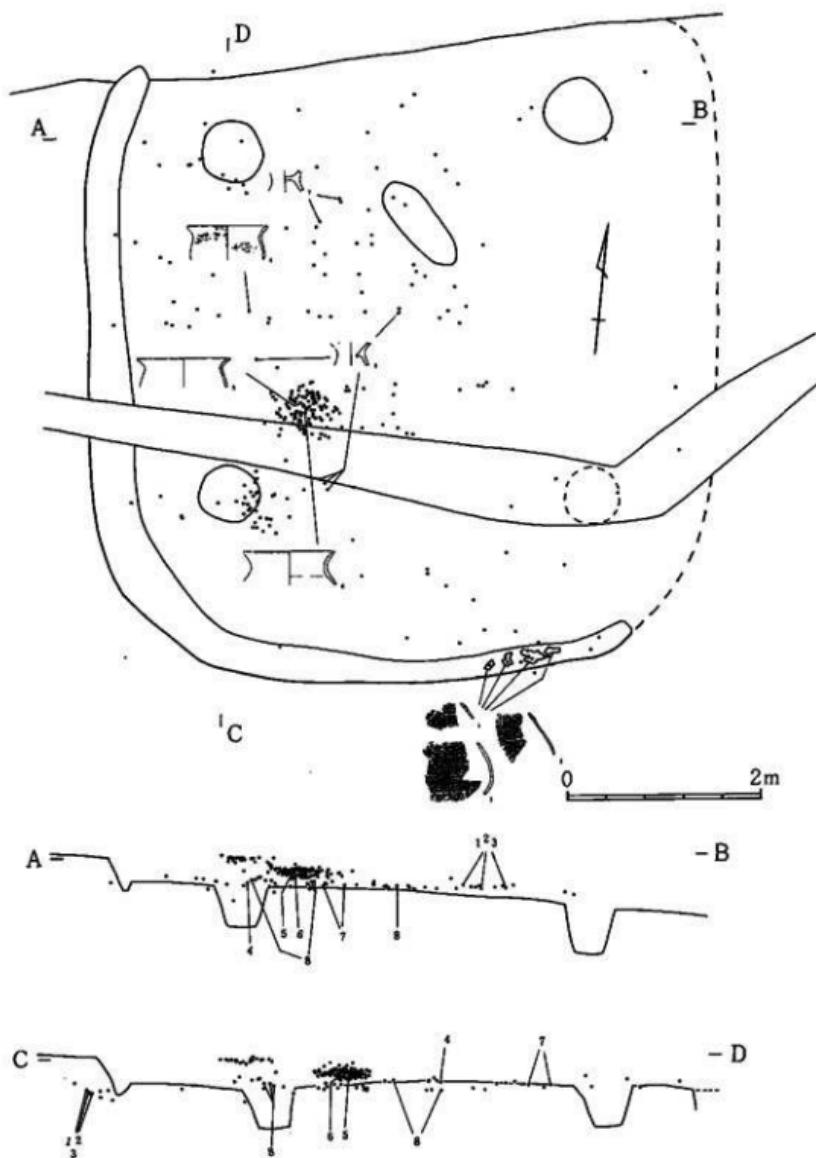
土器は、覆土中から小片が多く出土した。一部に極度に土器片の集中する部分がみられた。この部分に木炭片も多く集中していた。土器片集中のレベルより木炭片集中のレベルの方が低く、床面に近い位置であった。床面上から出土した土器もあるが、完形やそれに近いような土器はみられなかった。なお、周溝内より壺の同一個体の胴部破片がまとまって出土した。

出土土器（第9図） 1~3は、周溝内より出土した壺の胴部破片である。いずれも同一個体である。表面の風化が著しく明確な文様の存否は不明であるが、細い粘土紐が縦に一条貼付されている。破損した位置からして二条以上あることも考えうる。貼付された位置は肩部から頸部の付け根にかけての位置と思われる。また、残存する部分から、2単位以上はあるものと思われる。非常に薄い器壁で2~4mmである。内外面とも明赤褐色を呈し、白色粒子を多く含む胎土である。

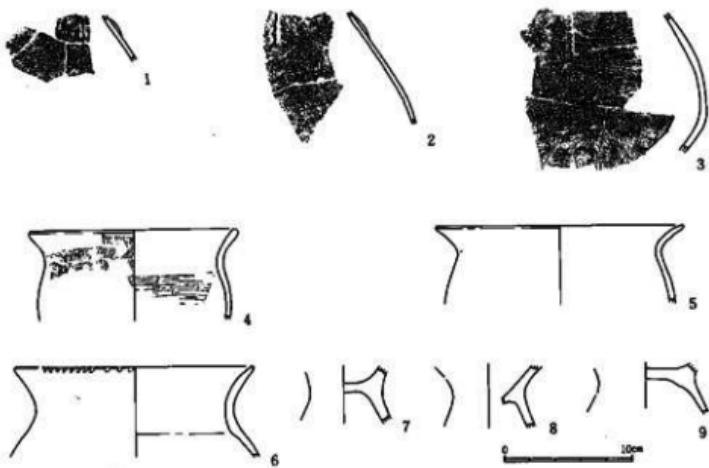
4は、壺の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は単純口縁で、端部がやや平坦である。また、直線的で外面が若干肥厚する。外面に縦方向のハケメ、内面胴部に横方向のハケメがみられる。外面黒褐色、内面暗褐色で、白色粒子を多く含む胎土である。5は、壺の口縁



第7図 1号住居址



第8図 1号住居址遺物出土状況 (1/60)



第9図 1号住居址出土土器 (1/4)

部から胴部にかけての破片である。単純口縁で、端部は尖りぎみである。また、やや内湾ぎみで比較的強く外傾している。内外面とも褐色で、白色粒子、赤色粒子、花崗岩岩片などを含む。

6は、壺の口縁部から肩部にかけての破片である。口縁端部にキザミ目に入る。口縁部は比較的長く内湾している。肩部が比較的強く張る形態と思われる。内外面とも赤褐色で、白色粒子や赤色粒子、花崗岩岩片などを含む。

7～9は、台付壺の台部破片である。7は、2片が接合したもので、内外面とも褐色を呈し、白色粒子、赤色粒子、岩片などを含む。8は、5片が接合したもので、内面黒褐色、外面赤褐色、台部内面が赤褐色である。白色粒子を含む。9は内外面とも明褐色で、赤色粒子、白色粒子、岩片などを含む。他の二者に比べて台部の接合部の径が大きく7.5cmある。

これらの土器のうち、5、6は覆土中出土、9は出土位置不明、1～3が周溝内出土、他は床面直上出土である。

2号住居址

遺構（第10図） 2号住居址は、南地区のほぼ中央に位置する。1号住居址の北西方13mほどにあり、3号住居址に北部を切られている。また、東部は畠の段造成と石垣によって削り取られている。また、壁は全周ほとんど消失している状態でプランを周溝で確認している。しかし、周溝も東壁部にみられない。残存部分で形態をみると、西辺中央部が2mほど直線であるが、南辺は弧を描いており、小判型を呈していたものと思われる。残存部で南北軸が4.1mであるが、復原すると5m程度と思われる。東西軸は東壁が消失しているので不明であるが、4m程度と推定される。なお、西側一部を畠地灌漑用水で擾乱されている。主軸方向を1号住居址同様の方法で示すと、W-2°-Nである。

柱穴は、4本検出された。直径40cm前後で、深さ30cm程度である。柱穴の覆土は、地山の

土壤が若干黒味を持つ程度で、検出にかなり苦労した。また、柱穴内よりの遺物の出土はみられなかった。

炉址の所在は確認できなかった。

周溝は明瞭で、幅30cm程度、床面からの深さ10~15cmである。北西隅で幅10cm程度と狭くなっている。

遺物出土状況（第11図） 耕作等で覆土はほとんど消失しており、出土遺物は床面上のものがほとんどである。北西部に多く分布しているが、他の部分は覆土の擾乱により消失している可能性がある。特に北西部の柱穴の南側から、大型の土器片がまとまって出土した。

土器以外の遺物はなく、木炭片も大型のものはあまりみられなかった。

出土土器（第12図） 1は、壺の胴部から底部にかけての部分である。胴部は屈曲がみられず、球形に近い形態と思われる。文様や調整痕はみられないが、内面に輪積み痕をうっらと認めることが出来る。底部は台状に突出している。底部外面についても木葉痕等認められない。内外面とも暗赤褐色で、白色粒子や赤色粒子、岩片を多く含む。胴部の器壁厚が5~7mmと比較的厚い。

2は、台付壺の口縁部から胴部下半の大形破片である。口縁部は直線的で、頸部でくの字に外傾し、端部は尖形である。胴部はやや細長く、最大径は、胴部中央からやや肩部よりにあり、口径よりも小さい。胴部に斜方向のハケメがみられる。内外面とも白褐色と、本遺跡では他に例のない色調である。また、赤色小粒子が目立ち、白色粒子などがありみられない特異な胎土である。3は2と同じ個体の台付壺底部付近の破片である。外面全体に斜方向から縱方向のハケメがみられる。外面底部側は、二次焼成を受けて赤色化している。

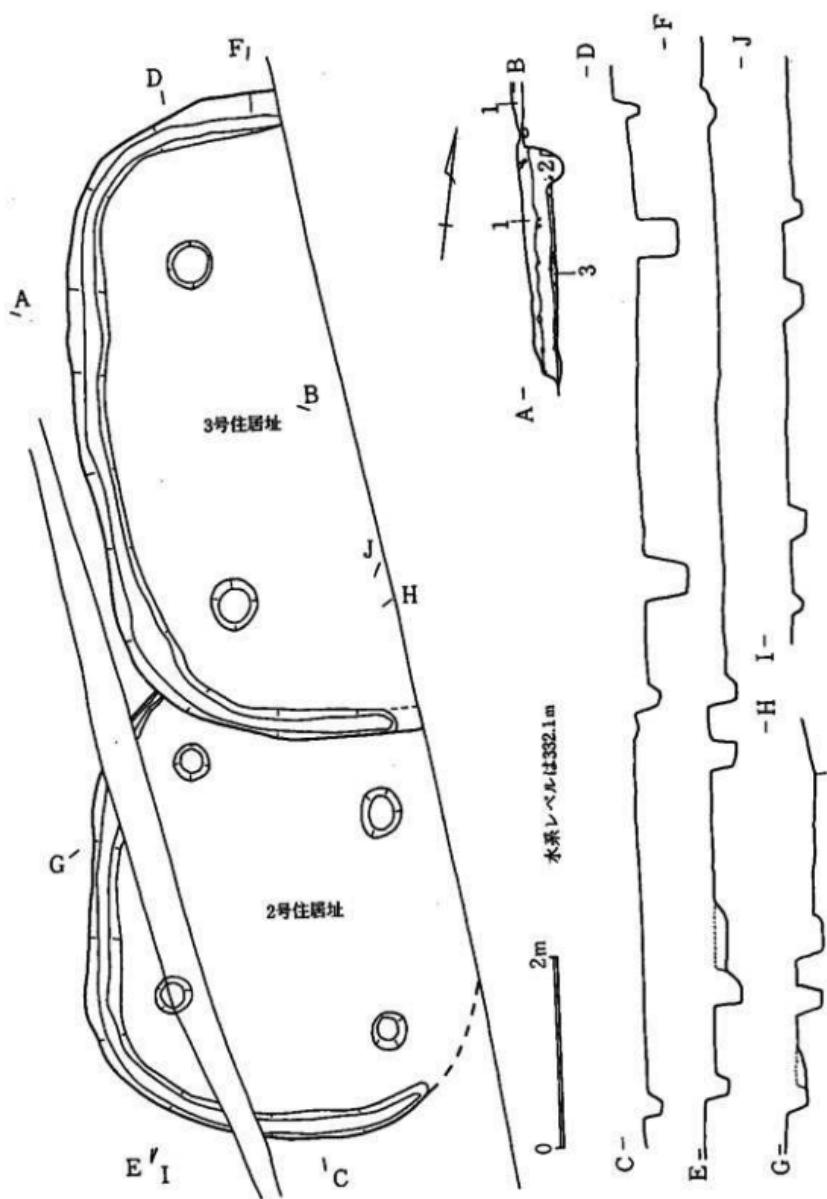
4は、小型壺の頸部破片である。文様、調整痕等認められない。内外面とも赤褐色。白色粒子や花崗岩片を含む。

3号住居址

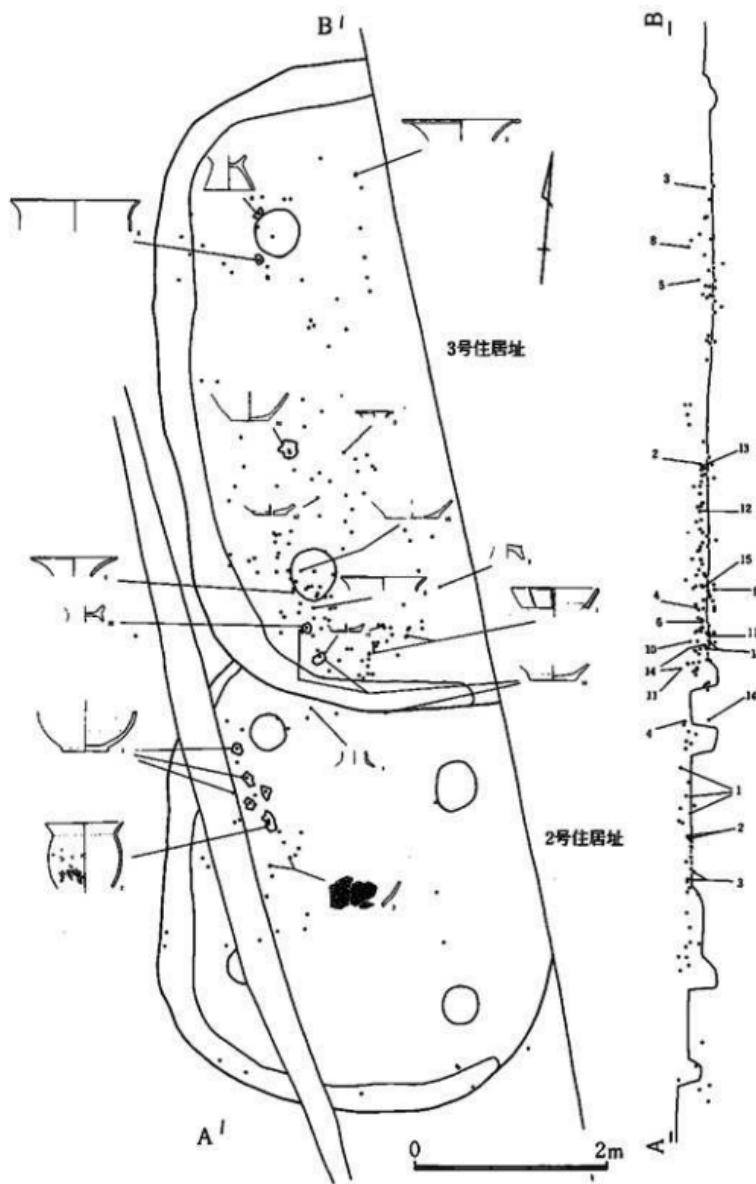
遺構（第10図） 2号住居址の北側に位置、2号住居址を切っている。東半分を、畑の段造成と石垣の構築によって切り取られている。2号住居址より深く掘り込まれており、壁面が10~15cmなどが残存している。

A-B線で覆土の土層をみると、1層が暗黄褐色粘土質土層で直径0.5~3cmの礫を多く含む。この土層は、住居址外部にもみられ、耕作土層直下の自然層である。2層は暗褐色粘土質土層で、直径0.5~2cmの礫を含む。周溝を埋めているが、周溝内で特に木炭片の存在が目立つ。この土層は住居址覆土である。3層は暗黄褐色粘土質土層で、直径1~4cmの礫を多く含む。地山にやや黒味が付いたような土層で、床面を貼っているものと思われる。地山は直径2~5cmの風化した礫を多く含む褐色粘土質土層で、ほとんど粘土といってよいほど粘性が強い。1~3層についても、地山層同様粘性がかなり強い。

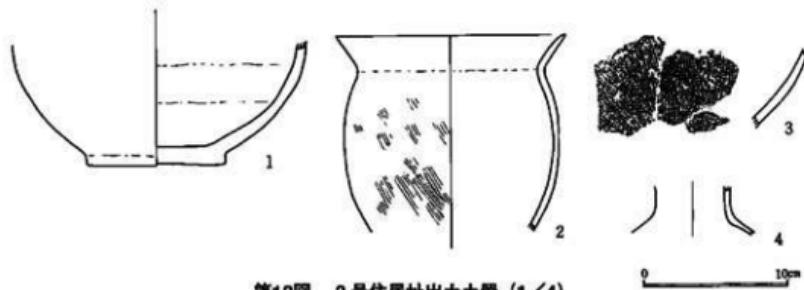
住居址の形態をみると、西壁の中央が直線的で、残存する北壁、南壁についても一部が直線的であり、全体として1号住居址のような圓角長方形に近い形態と思われる。長軸は6.7mであるが、短軸は不明である。西側柱穴で主軸方向をみると、W-14°-Nである。



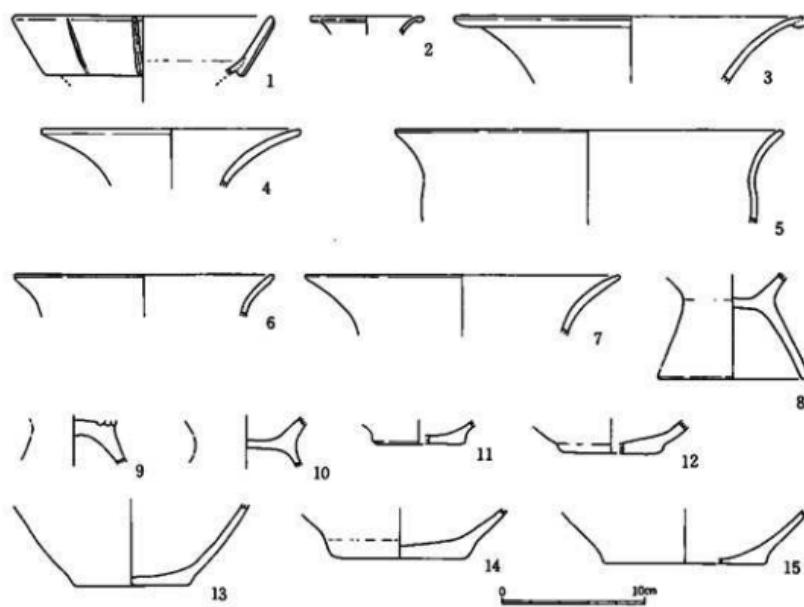
第10図 2・3号住居址 (1/60)



第11図 2・3号住居址遺物出土状況 (1/60)



第12図 2号住居址出土土器 (1/4)



第13図 3号住居址出土土器 (1/4)

柱穴は2本確認できた。直径50cm程度、深さ40~50cmである。

炉址の存在は確認できなかった。

周溝は30~40cm、深さ10~15cmである。遺存している部分ではほぼ全周する。南東部で切れているが、これは擾乱を受け消失している部分である。

遺物出土状況(第11図) 出土遺物は土器のみである。特に南半部に多く出土している。覆土中に浮いた状態のものが多くみられる。完形個体はみられないが、比較的大型の土器片が何点かみられた。なお、覆土中の遺物も、周溝上にはあまり分布していない点注目される。

出土土器（第13図） 1は、壺の口縁部破片である。複合口縁で、頸部端部の外側に帯状の粘土紐を貼り付けている状況が破断面から明瞭に把握できる。口縁部外側に棒状付文が三本みられ、それぞれ4～7cmとかなり距離を置いて貼付されている。内外面とも暗褐色で、比較的砂粒の目立たない胎土。2は、小型壺の口縁部である。折り返し口縁である。内外面とも赤褐色、砂粒の目立たない緻密な胎土。3は、折り返し口縁の壺の口縁部破片である。口縁端部は丸い。内外面とも赤褐色で、白色粒子や赤色粒子、岩片などが多く入る。4は、単純口縁の壺の口縁部破片である。口縁端部は平坦である。内外面とも黒褐色で、白色粒子や岩片を多く含む。

5は、壺の口縁部破片である。口縁端部は比較的平坦である。胴部最大径は肩部付近にあるらしいが、口径より小さいと思われる。内外面とも赤褐色で、白色粒子や岩片が多く含まれる。6は、壺の口縁部破片である。口縁端部は丸味を持つ。比較的口縁の長さが短い。内外面とも赤褐色を呈し、白色粒子や岩片が多く入る。7は壺の口縁部破片である。口縁長が非常に長い。白色粒子や岩片が多く入る。内外面とも赤褐色。

8～10は、台付壺の台部である。8は台部の端部まで残存している個体で、端部が平坦である。内外面とも赤褐色で、白色粒子を多く含む。接合部外径が6.5cm。9は、内外面とも赤褐色で、やや細か目の白色粒子が入る。接合部外径は5.8cm。10は、胴部内面が黒褐色で他は暗褐色。白色粒子や黒色の岩片などを多く含む。

11～15は、壺の底部である。11は、小型の底部で、高台状にかなり明瞭に突出する。内外面とも暗褐色で、白色粒子が多く入る。12は、底部が高台状に突出するものの端部がやや丸味をもつ。外面黒褐色、内面赤褐色で、白色粒子が多く入る。13は、底部の突出が弱い。胴部外面にミガキがみられ、内面もかなり平滑にナデ調整されている。内面黒色、外面白褐色で、砂粒が目立たない。色調が特徴的な個体である。14は、底径10cmとかなり大型の個体である。底部が突出するが端部が丸い。白色粒子、赤色粒子、岩片が目立つ。15は、突出する底部の端部が尖りぎみである。内外面とも赤褐色で、砂粒が比較的少ない。

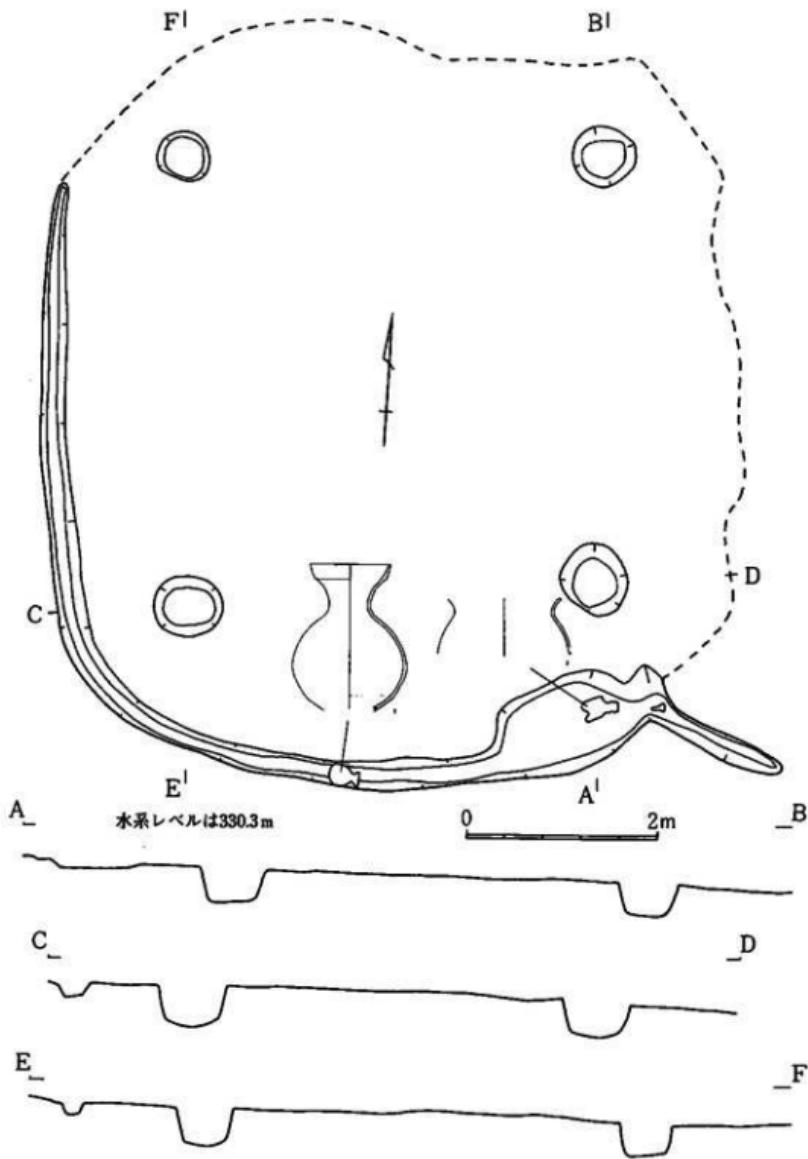
これらのうち、13はかなり大型の破片でしかも床面直上であり、この住居址の時期を示すものと理解できるが、他は小破片であったり覆土中出土であり注意して扱う必要がある。

4号住居址

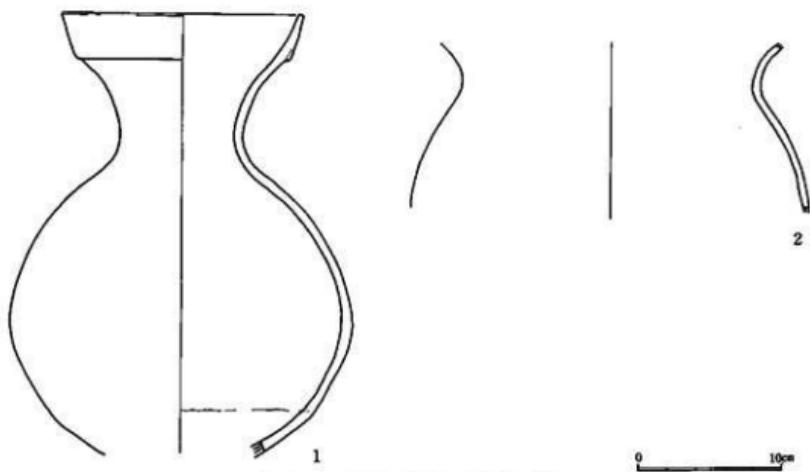
遺構（第14図） 3号住居址の北方6mほどの位置にある。2・3号住居址東部を切り取っている烟の段の直下にあり、覆土や床面までもが烟の造成や耕作で搅乱されて消失している。かろうじて、周溝の一部と柱穴が残存していた。

残存した周溝で住居址形態をみると、西辺は直線的で、南辺が弧を描く。北辺や東辺が消失しているが、小判形を呈していたものと思われる。長・短軸とも不明であるが、柱穴と周溝の距離を参考に推定すると、長軸8.5m、短軸7.5m程の大きさと思われる。主軸は、W-5°-Nである。

柱穴は、4本確認できた。直径60～70cm、深さは西側で40cm程度、東側で30cm程度である。柱穴を埋める土層は、地山がやや黒味ある程度の違いであり、検出に苦労した。



第14図 4号住居址 (1/60)



第15図 4号住居址出土土器 (1/4)

周溝は柱穴と違い、覆土が明瞭に判断できる。しかも、本住居址の場合、木炭片が多量に入っていた。幅30cm程度、深さ10~15cmである。南東部で、幅1m、長さ1.5mにわたって広がっており、南東端部で南東方向に向って浅い溝が付設されていた。

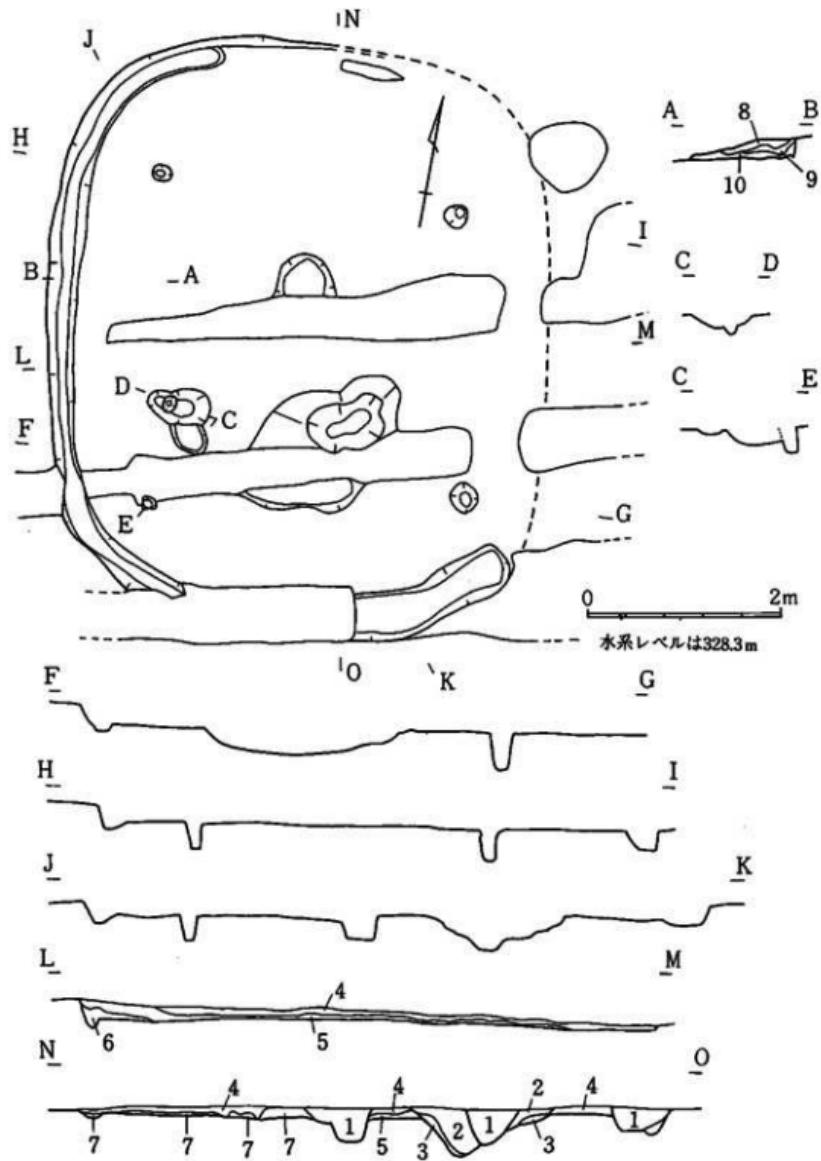
遺物出土状況（第14図） 南側の周溝の中央付近から、壺が横になった状態で出土した。口縁を東側に向け、完全に横になった状態である。上側の半分は擾乱によって消失しており、横になった下半部のみが残存していた。周囲に木炭が分布し、木炭に埋った状態で出土した。周溝南東部の幅広的部分に1個体の壺の大型破片がみられた。この他に遺物はみられなかった。

出土土器（第15図） 1は、複合口縁の壺である。底部を欠くものの、2分の1程度が残存している。複合口縁の段の部分は、外面では若干の窪みをもつ比較的明瞭なものであるが、内面ではゆるやかな曲線を成し、段は不明瞭である。頸部端部の外側に帯状の粘土紐を貼り付けて段部を形成するものとは違い、通常の作り方で口縁部を成形した後、段部に薄い粘土紐を貼り付けて段部を表現しているものと思われる。口縁端部は比較的平坦である。頸部から肩部にかけては曲線を描く。胴部はやや下ぶくれの球胴であり、段はみられない。調整痕はみられないが、内面に輪積み痕が残存する。口径16.7cm、頸部径9.3cm、残存器高30.4cmである。内外面とも赤褐色であるが、二次焼成を受けたらしく、黒い部分がある。胎土は、白色粒子や赤色粒子を多く含む。

2は壺の頸部から胴部の破片である。口縁端部を欠損する。口縁部はかなり内湾するらしい。胴部最大径は肩部より下方にあるらしい。内外面とも赤褐色で、白色粒子や岩片を多く含む。

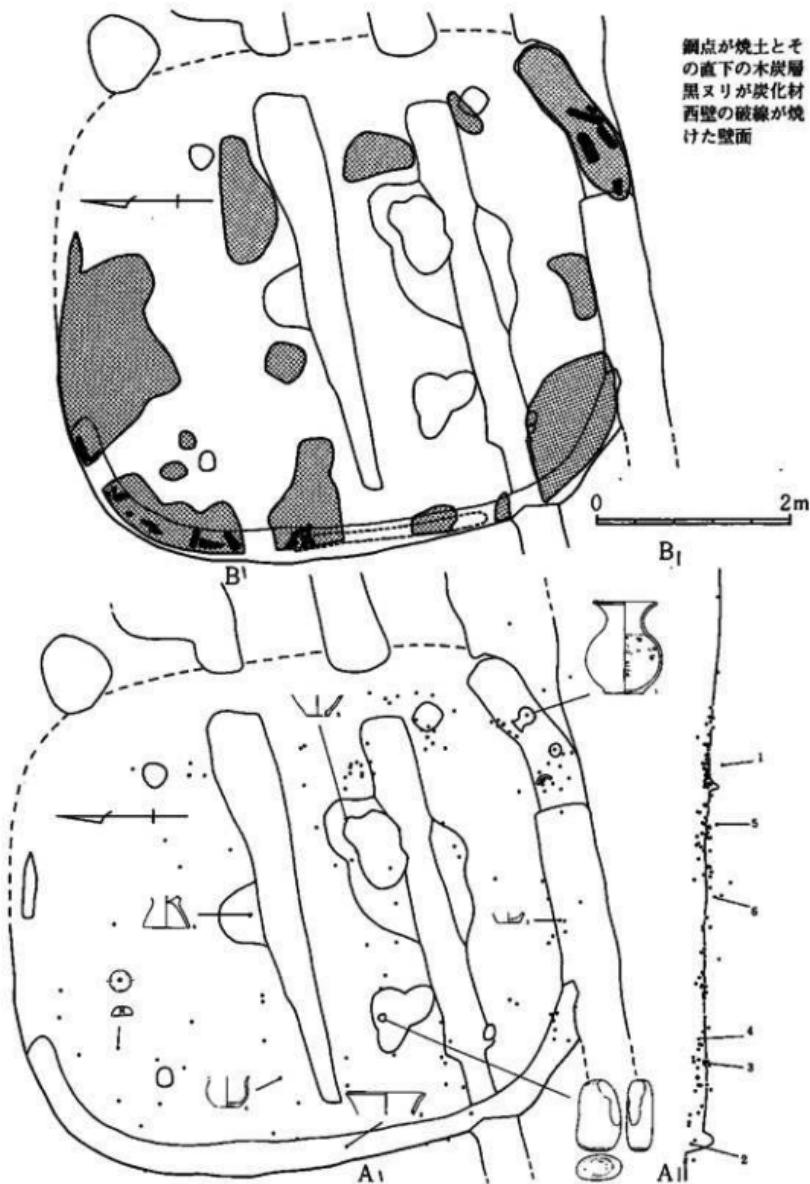
5号住居址

遺構（第16図） 5号住居址は、南地区中央部の北側に位置し、4号住居址より斜面を東側に下った所、16mほど離れた位置にある。この部分は周囲より若干高く、微妙に高まりをみせながら東へ下る尾根上にある。

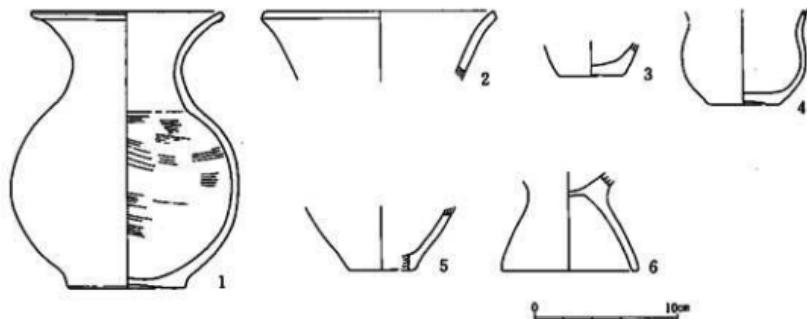


第16図 5号住居址

鋼点が焼土とそ
の直下の木炭層
黒マリが炭化材
西壁の破線が焼
けた壁面



第17図 5号住居址焼土、木炭分布図（上）、遺物分布図（下）(1/80)



第18図 住居址出土土器 (1/4)

東半部がかなり擾乱を受け、また、耕作時の溝で一部を切られているが、西半部は比較的残りがよく、壁面が深い所で床面より15cmほどが残存していた。

形態は、西壁中央が直線的である。南壁は、耕作時の溝でかなり消失しているが、弧を描く形態と思われる。こうした状況から、小判形を呈していたものと思われる。長軸は6m、短軸は西側の柱穴と壁との距離から推定して5m程度と推定される。主軸は、W-9°-Nである。

柱穴は4本確認できた。直径15~30cmと比較的小型である。深さは35~25cm程度である。

周溝は、北壁部の一部と西壁部、南壁部の一部が残存している。西壁部では明瞭で、幅30cm、深さ床面より10cmである。北壁部では浅く、かなり擾乱を受けているが、木炭片が入り込んで木炭片の帶状の分布でかろうじて確認できた部分が、北壁部中央からやや東側にあり、この付近まで周溝が延びていたものと思われる。南壁側では、南東部で幅50cmと幅が広がっている。この部分には全体に木炭が入っていた。また、完形の小型壺などが出土している。周溝は、この部分の東端で切れている。

この他、床面を掘り込んだ土坑が3カ所みられた。中央やや北よりの土坑は、耕作時の溝で南部を切られているものの、ほぼ円形だったと思われる。東西60cmで、深さ20cm程度である。この中に、台付壺が1個体、口縁部を南に向けて土坑底部に横になった状態で出土した。この個体は非常に脆弱で、取り上げ後復原ができなかった。台部のみ実測した(第18図6)。住居址南半部中央には大型の土坑がある。中央部を溝で切られているものの、長軸2m、短軸1.2mの不整橢円形で、長軸は北東-南西方向である。中央やや北側が最も深く、住居址床面より40cmである。この土坑の西側に3つの中型の土坑が重複した状態でみられた。最も大きいものが長軸70cm、短軸40cm、深さ10cm。次いで大きい南側の中型の土坑は直径30cm、深さ15cm。最も大きい土坑の中に入っている小坑は、直径10cm、深さが住居址床面より20cmである。最も大きな土坑内より、礫石1個(第84図1)と礫1個が出土した。これらの土坑は、その上面に住居址床面がみられないことから、住居址廃絶後に掘り込まれたものと思われる。

住居址覆土の土層をみると、1層が耕作時の溝状の擾乱の土層で軟質の暗灰褐色粘土質土層。

2層は、南半部中央の大型の土坑覆土で暗赤褐色粘土質土層で、径1~2cmの礫を含む。3層もこの土坑の覆土で、木炭や焼土を多く含む暗赤褐色粘土質土層である。土坑を掘った折に住居址覆土内の焼土や木炭が入り込んだものと思われる。4層は、暗赤褐色粘土質土層で、砂や細礫をわずかに含み、焼土や木炭片が若干みられる。5層は暗赤褐色粘土質土層で、直徑0.5~2cmの礫を含み、木炭や焼土をかなり含む。6層は、周溝内およびその周辺を埋める土層で、木炭片を多量に含む暗赤褐色粘土質土層である。7層は、焼土と木炭片の土層である。

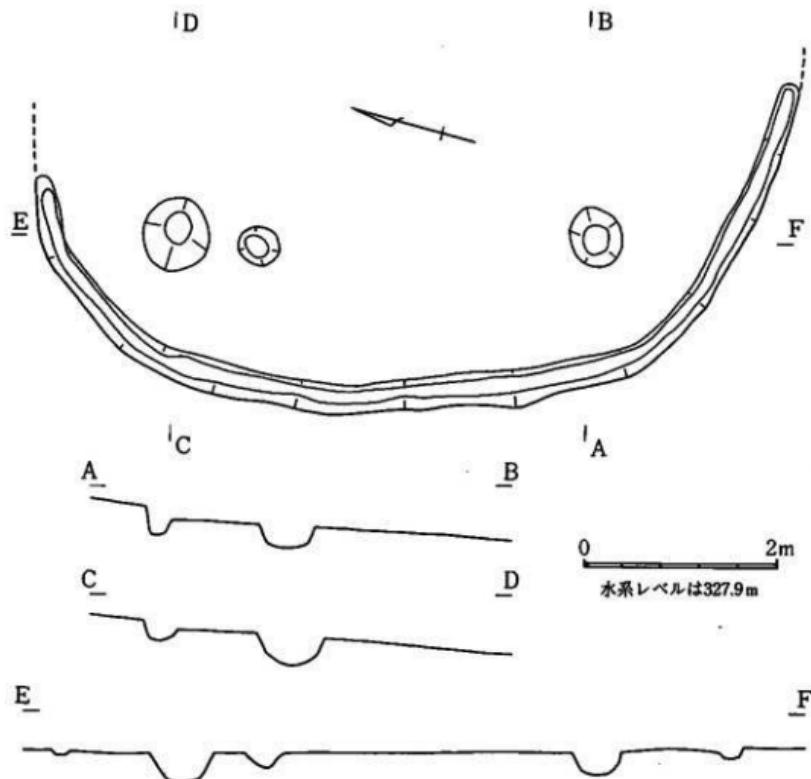
A-B線の土層断面は、西壁側に広範囲に分布する焼土層の断面である。8層が焼土層、9層が暗褐色土層、10層が木炭層である。壁ぎわでは、焼土層下の床面直上に木炭層がある点に注意。なお、木炭層は5cm程度の厚さがある。

5号住居址内には、焼土や木炭が広範囲に分布している。第17図上図にその状況を示した。焼土や木炭層は島状に分布するものの、特に残存する壁に接して多く分布する。先にA-B線の土層断面で示したように、壁ぎわに焼土層が厚く、その下位に木炭層が分布する。特に周溝内では、形態の明瞭な木炭が、底面に落ち込んだ状態で出土した。なお、住居址中央部では、焼土は少なく、木炭が主体となる。木炭の分布は、いずれも床面直上、周溝底面にみられた。また、壁面が焼けて、赤色化し硬化した部分が西壁中央部の破線部分でみられた。焼けの上下方向の範囲は、確認面から、周溝底面の若干上まで、周溝底面や周溝東側の内壁は焼けていなかった。

遺物出土状況（第17図下） 土器片を中心とした遺物は、覆土中から多く出土している。その中でも、第18図4の小型壺は完形に近い個体で、焼土上面の覆土中に浮いた状態で出土している。また、この土器の北側、住居址の北西部から、やはり覆土中に浮いた状態で土製縫織車（第82図1）が出土している。床面直上での完形個体などの遺物の出土はみられないが、南東部の周溝内から木炭層に埋まって、焼土に覆われた状態で、完形の小型壺（第18図1）が出土した。口縁を北西に向け横になった状態であった。また、非常に脆弱で復原できなかつたが小型の壺脛部が1個体、壺頭部大型破片が1個体、同様な状態で出土している。この他、敲石が小坑内から1点出土している。また、住居址中央やや北よりの土坑内より台付甕が出土しているが、この住居址が廃絶後に掘り込まれた土坑と思われ、この住居址の時期を考える場合、注意して扱う必要がある。

出土土器（第18図） 1は、小型の壺で、ほぼ完形の個体である。口縁部は折り返し口縁ある。頸部から肩部にかけては曲線を描くが、肩部に接合部があり、やや窪む。胴部は球胴で、胴部最大径がほぼ中央にある。底部は突出し、底端部が明瞭な稜を成す。底部中央がやや内側に窪みぎみである。調整は、外面ヘラミガキと思われる。内面は、口縁部から頸部にかけて風化しているので不明ながら、胴部では横方向のハケメが若干残存する。文様は施文されていない。外面暗褐色、内面赤褐色で、外面は二次焼成を受けたらしく広範囲に黒色化している。胎土には、白色粒子や岩片を若干含む。口径13cm、頸部径7.4cm、胴部最大径16cm、底径8cm、器高19cm。

2は、短頸の壺の口縁部と思われる。端部近くでやや外傾し、端部は切り取ったように平坦に仕上げられている。内外面ともナデ調整と思われる。内外面とも暗褐色、白色粒子の若干入



第19図 6号住居址 (1/60)

る胎土である。この形態の土器は本遺跡内ではこの個体だけである。3、5は、小型の壺ないしは甕の底部である。3は、底部が突出しない形態である。内外面とも黒褐色で、白色粒子も多く含む。5は、外面底端部直上で浅く窪みがみられるが、底部の突出は比較的不明瞭である。外面暗褐色、内面赤褐色で、白色粒子、岩片を含む。4は、小型の壺で、口縁部を欠くもののほぼ完形の個体である。頸部の径が、胴部最大径より若干小さい程度の、広口の甕である。胴部は球形で、胴部最大径がほぼ中央にある。底部の突出は弱いが、底部中央が広く窪み、高台状となる。内外面とも赤褐色で、一部に二次焼成を受けたらしく、黒色化した部分がある。胎土に白色粒子や岩片を多量に含む。胴部最大径 8.7 cm、底径 5 cm。6は、台付甕の台部である。体部がやや外湾ぎみである。内外面とも暗褐色で、白色粒子や岩片を含む。接合部径 5.5 cm、台部端部径 9 cm である。

この他、本住居址内より、土製紡錘車 1 点（第82図 1）、礫石 1 点（第84図 1）が出土したが、本節終りの項で詳述したい。

6号住居址

遺構（第19図） 6号住居址は、南地区北側の小高い尾根上に位置する。4・5・6号住居址がこの尾根上に連るよう分布しているが、その東端で最も傾斜の低い位置にある。

かなり擾乱を受けており、周溝でかろうじて存在を確認できた。東半部は完全に消失している。また、西半部でも、床面はかなり擾乱を受けており、遺物も土器小片が若干出土しただけであった。炉址の存在も確認できなかった。

かろうじて残存する周溝から住居址形態を復原してみると、西辺は若干弧を描いており、北辺はほとんど残存しないので不明、南辺はかなり大きく弧を描く可能性がある。概して丸みのある小判形であったと思われる。長軸は8m程度と思われるが、短軸は不明である。主軸の方向は、W-15°-Nである。

周溝は、幅30cm前後、深さは最深部で15cmである。周溝内の土層は、木炭片を若干混える暗褐色土層である。

柱穴は2本確認できた。北側が直径70cm、深さ30cm。南側が直径60cm、深さ20cmである。覆土は、地山が若干黒味を帯びた土層で、検出に苦労した。なお、北側の柱穴の南側に隣接する小穴は擾乱坑である。

出土土器 出土遺物は土器小片が少量あつただけで、実測できる個体はみられなかった。

7号住居址

遺構（第20図） 7号住居址は、南地区の東端の最も低い位置にある。22・23・7号住居址と近接して分布するが、7号住居址は、22・23号住居址より一段低い位置にある。

東壁付近をかなり擾乱されており、東壁も消失しているが、西壁は床面より高い所で20cmほど残存している部分があり、比較的残りがよい。

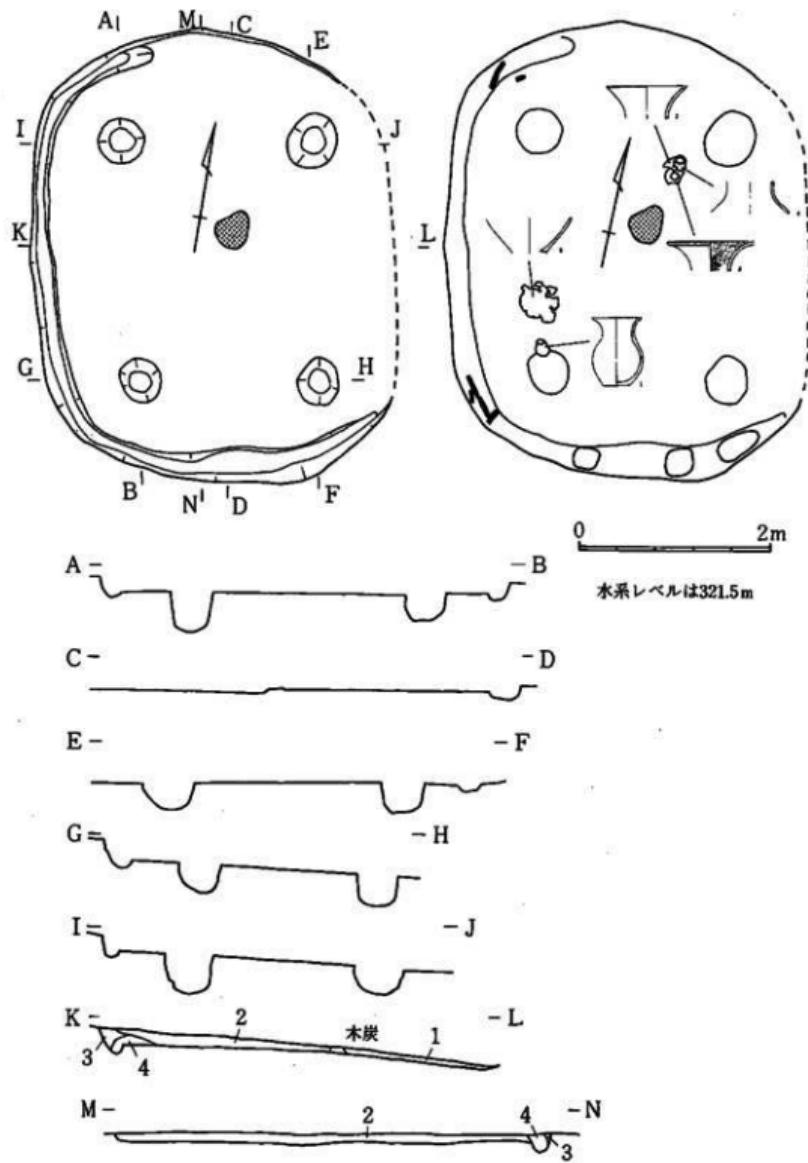
住居址形態は、西壁が直線的、北壁、南壁が弧を描く、小判形の形態である。長軸4.7m、短軸3.8mと推定される。主軸方向は、W-14°-Nである。

まず、土層をみると、1層が暗褐色粘土質土層で、耕作土層の下底部である。住居址東半部の擾乱された部分を覆う。2層が黒褐色粘土質土層で、木炭片が多量に入る。3層は、周溝上を覆う土層で、褐色粘土質土層である。廃絶直後に壁面が崩壊したものかもしれない。4層は周溝内の土層で、大型木炭を大量に含む黒褐色粘土質土層である。

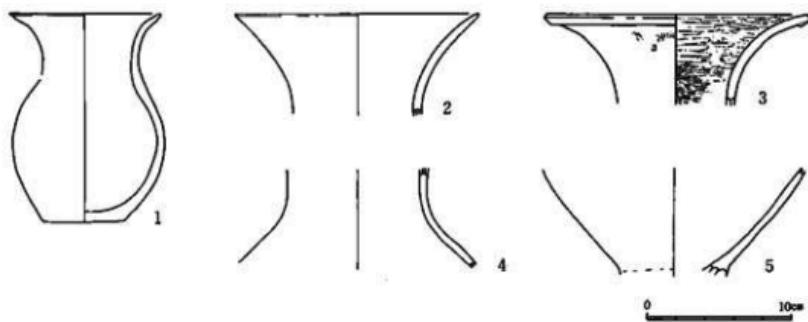
周溝は、北壁西部から、西壁直下、南壁直下に残存する。北壁側では徐々に浅くなるので、本来より東側へ延びていた可能性もある。西壁側では、幅20cm前後、深さ10cm程度である。南壁側では南東部付近が幅40cm前後と幅広くなっている。そして、東端部で再び細くなり、徐々に浅くなって消失している。東壁下に続いている可能性もある。

柱穴は、4本確認できた。直径45~50cmで、深さ25~40cmである。柱穴覆土は、暗褐色粘土質土層で、地山がやや黒味を帯びた程度で検出に苦労した。また、非常によく縛っている。遺物や木炭などはまったく入っていなかった。

炉址は、おそらく、住居址中央やや北よりの焼土であろう。枕石や粘土層などの分布はみられなかった。



第20図 7号住居址



第21図 7号住居址出土土器 (1/4)

形態の比較的明瞭な木炭が、周溝底面より多く出土した。南側の周溝では、直径1cmほどの細長い炭化植物が活雑に積み重なった状態で出土している。木炭の上位に焼土の分布はみられなかった。

遺物出土状況 (第20図) 完形に近い小形壺 (第21図1) が、南西部の柱穴の北端部から出土した。口縁部を斜め上方に向け、立った状態で出土。すぐ北側の台付壺の出土面よりも、底面の出土レベルが低い。おそらく、柱穴内にやや落ち込んだ状態と思われる。この北側から、台付壺 (第21図5) の大型破片が床面に平らに伸ばされた状態で出土した。炉址の北東方で、北東部の柱穴との間に、壺の口縁部から肩部にかけての部分が集積されていた。第21図2~4の個体である。3は口縁部を床面に伏せた状態。4は肩部側を床面に置いた状態。2は口縁部の3分の1ほどの破片で、3と4の間に内側を上にして置いた状態で出土した。

出土土器 (第21図) 1は、小型の壺である。口縁端部は尖形であるが、非常に薄いので、折り返し口縁の折り返し部が剥落したものと思われる。胴部はやや細長い球胴で、胴部最大径がほぼ中央にある。胴部の底部付近がやや窪むものの、底部の突出は不明瞭である。風化が著しく、文様や調整等不明であるが、外部に部分的に赤色塗料が残存している。内外面とも赤褐色で、白色粒子の入る胎土。推定口径9.5cm、頸部径6.4cm、胴部最大径10.5cm、底径6cm、器高14.3cmである。

2は、壺の口縁部である。端部が尖形で薄く、折り返し口縁の折り返し部が剥落したものと思われる。内外面とも赤褐色で、白色粒子や岩片を多く含む。3は、折り返し口縁の壺の口縁部である。口縁端部が平坦に仕上げられている。本遺跡出土のものではめずらしく、表面の風化があまり強くない。調整痕をみると、外面は、縦方向の細かなハケメが、口縁直下に若干残存し、その上を縦方向のヘラミガキがなされている。内面は、横方向の目の細かなハケメ調整がなされ、その後に口縁部側を横方向のヘラミガキを行っている。内外面とも赤褐色で、白色粒子を多く含む胎土。4は、壺の肩部から頸部にかけての破片である。2、3とは別個体。頸部から肩部にかけて曲線を描く。内外面とも黄褐色で、白色粒子や赤色粒子を多量に含む。

5は、台付窓の脇部下半である。内外面とも褐色で、白色粒子や赤色粒子を多く含む。

8号住居址

造構（第22図） 8号住居址は、南地区の中央部に位置する。南方にある南側埋没浅谷に向ってゆるやかに傾斜する斜面の頂部に位置する。近接する2号住居址から、南方6mほどの位置にある。

3本の周溝が重複しており、同一カ所での3軒の住居址の重複したものである。西壁部で、最も外側の周溝をI、中央をII、内側をIIIとする。

東壁側は、搅乱を受けて消失しているものの、西壁は高い所で30cm前後と比較的残りがよい。住居址形態は、西壁が直線的で、南壁や北壁が弧を描く小判形である。I、IIの周溝では、南北両壁の形態がほぼ同じであるが、IIIでは北側の円弧が強く、南側は南西隅で屈曲し、円弧も弱い。長軸は、Iが6.9m、IIが6.5m、IIIが6.7mである。短軸は不明。主軸方向は、西壁と西側柱穴が平行しないため、ここではより確実な西壁の直線部の方向を示す。IがW-20°-N、IIがW-20°-N、IIIがW-18°-Nである。

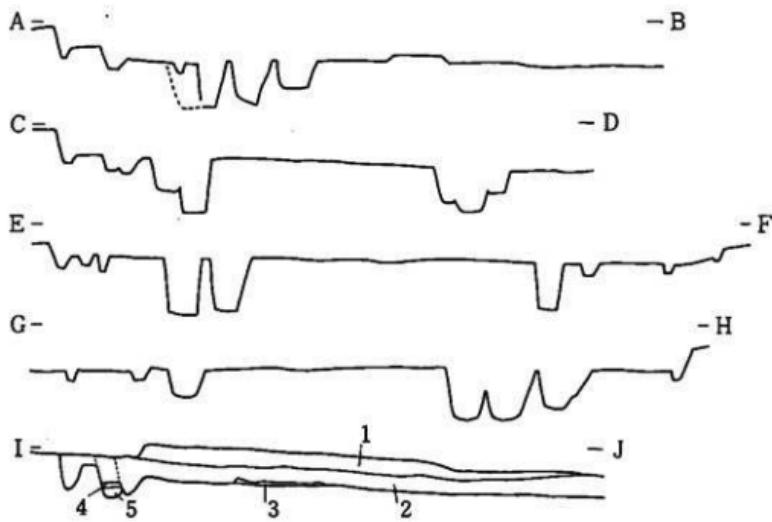
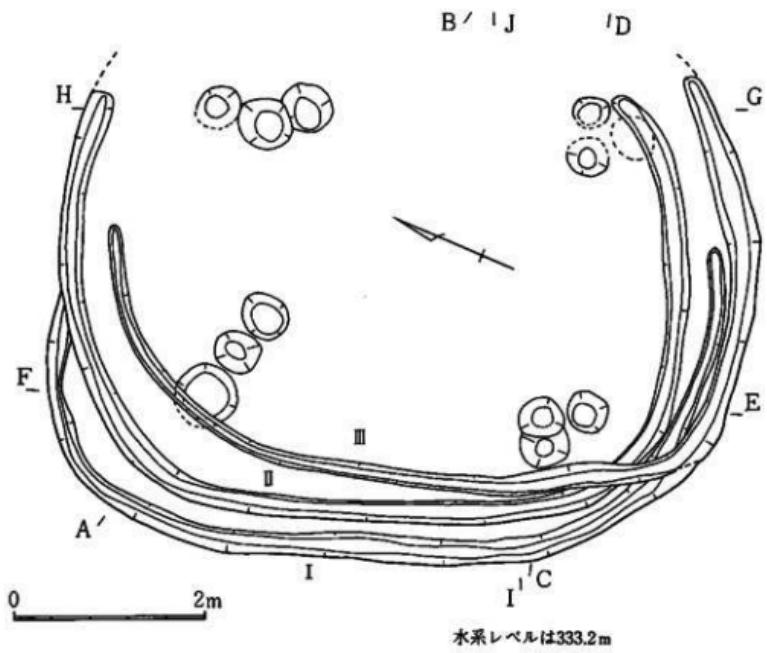
周溝は、Iが北・西壁側では最も外側にあるが、南壁側では中央へ入り込む。Iは、II、IIIよりも一段高い位置にあり、床面も15cmほど高い。幅は、西壁中央で25cm程であるが、北壁、南壁側では15cm程である。深さは10cm前後。IIの周溝は北・西壁側では中央部にあるが、南壁側では最も内側に入る。幅20~25cm、深さ10~15cmである。IIIの周溝は北・西壁側で最も内側にあるが、南壁側では最も外側に出る。北壁側では15cm程度と幅が狭いが、南壁側では20~30cmと広がる。深さ10cm程度である。いずれも黒褐色粘土質土層が入り、容易に検出できた。

柱穴と思われる小坑は、3~2本の単位で合計11本が検出できた。北西端部のものが直径60cmと大きいものの、おおむね40~50cmの大きさである。深さは25~55cmと幅がある。I~IIIの周溝に伴うと思われる小坑を比定すると、その配列方向がかなり歪んでいる。小坑内の覆土が地山より若干黒味を持つ程度の違いしかなく、検出に苦労しており、あるいは柱穴以外のものである可能性も考える必要がある。

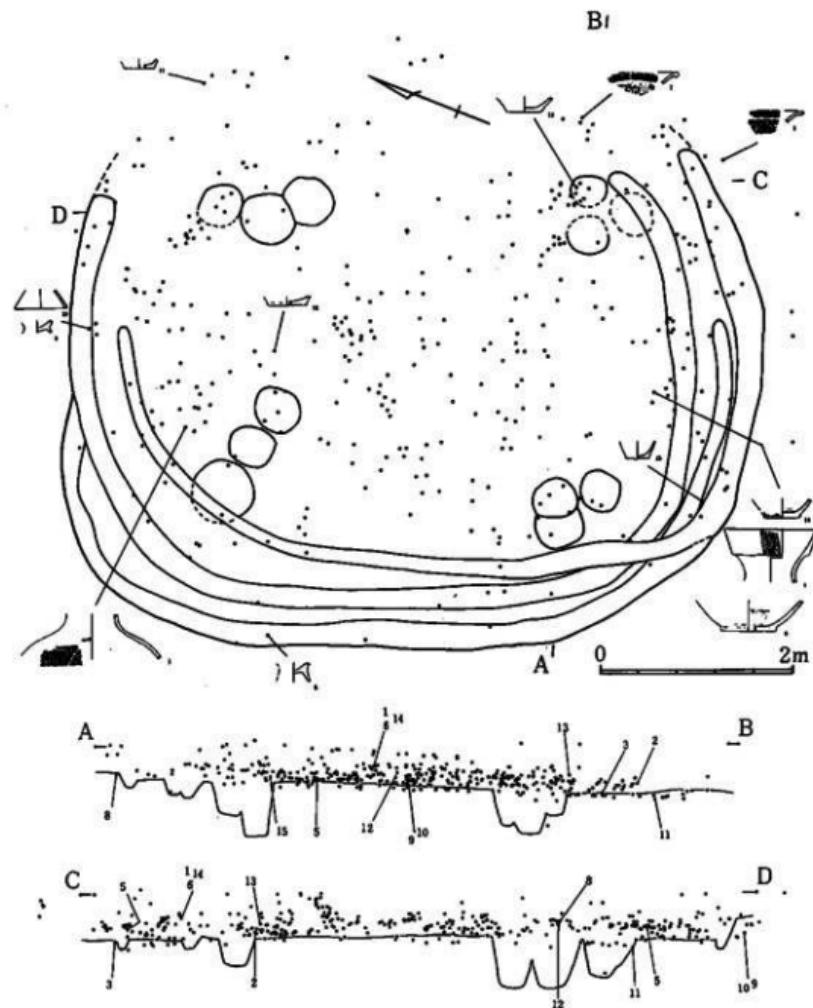
土層をみると、1層が暗褐色粘土質土層で耕作土下部の土層。2層が黒褐色粘土質土層で木炭片を多く含む。特に中央部の中位付近に層状に木炭片が入る部分がみられた。3層は褐色粘土質土層で、貼り床の可能性がある。4層は褐色粘土質土層で、IIの周溝が人為的に埋められたことを示す土層と思われる。5層は暗褐色土層で、IIの周溝内にのみみられる。4層同様人為的な埋土である可能性がある。IおよびIIIの周溝内の土層は、2層とほぼ同じものであった。

この土層の状況から、I~IIIの周溝の切り合い関係をみると、Iの周溝の床面をII、IIIの周溝が切っているので、Iが最も古いと思われる。IIの周溝を人為的に埋めたと思われる4・5層をIIIの周溝が切っているので、IIIが最も新しいと思われる。したがって、I、II、IIIの順で新しく掘られたものと思われる。

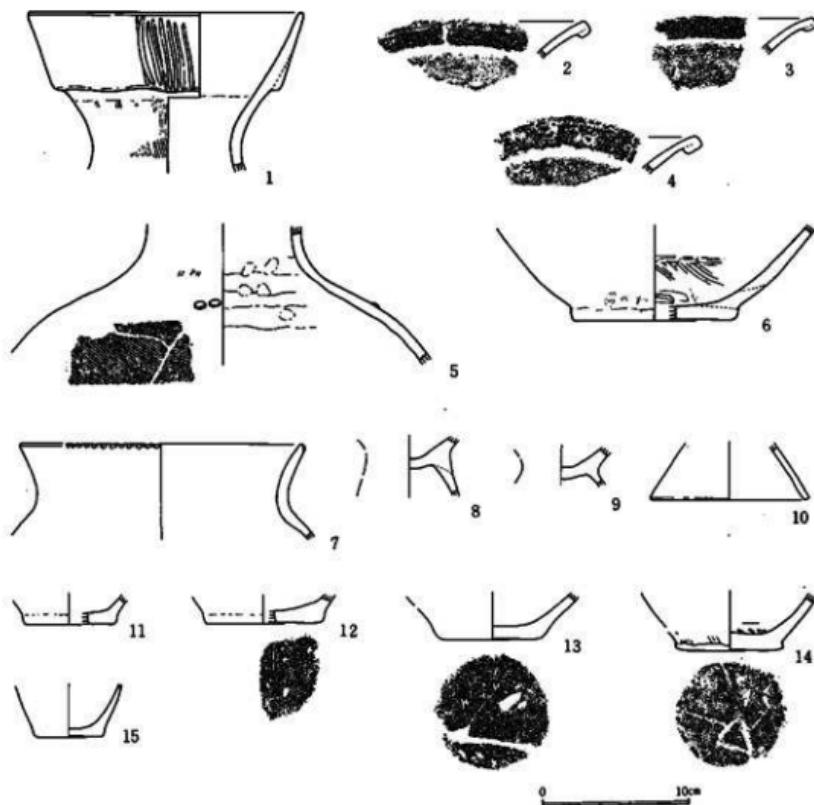
なお、図示しなかったが、II層中位のレベルで木炭がかなり広範囲に分布していた。また、炉址の残存は把握することができなかった。



第22図 8号住居址 (1/60)



第23圖 8號住居址遺物出土狀況 (1/60)



第24図 8号住居址出土土器 (1/4)

遺物出土状況（第23図） かなり多くの土器片が覆土中より出土している。A-B線の垂直分布図でみると、搅乱を受けた住居址東半部の地山面直上まで分布しており、土壤搅乱作用で遺物がかなり移動していることが推定できる。かなり大型の土器片もあるが、いずれもかなり浮いた状態で出土している。なお、平面分布やA-B線垂直分布図でみると、覆土中の遺物の大半はⅢの周溝を埋める土層中のものと思われる。ただし、第24図の8はⅠの周溝内、9・10はⅡの周溝内より出土している。なお、剥片が1点、覆土中より出土している。

出土土器（第24図） 1は複合口縁の壺の頸部から口縁部である。頸部と口縁部の境界部の段は外面で明瞭であるが、内面では不明瞭である。外面の段は、断面三角状に粘土帯を貼り付けて表現したものと思われる。口縁部には、8本の沈線を連続的に縦に施文している。おそらく、この文様が4単位施文されていたと思われる。頸部外面に縱方向の目の細かいハケメ調

整がなされている。内外面とも黒褐色で、白色粒子や角閃石粒子が目立つ胎土である。2～4は、折り返し口縁の壺の口縁部破片である。それぞれ別個体である。5は、壺の頸部から肩部にかけての大型破片である。肩部に斜方向に施文された縄文の文様帶があり、一周しているらしい。その下端に2個を1単位とする小円形の貼付文がみられる。縄文帶より下位は、横方向のヘラミガキがみられる。内面は、輪積み痕と指頭痕とが残存する。かなり肩の張った形態らしい。内外面とも黒褐色で、白色粒子や角閃石粒子、岩片が目立つ。6は、壺の底部破片と思われる。底部が明瞭に突出する。外面に縱方向のハケメ、内面に横方向から斜方向のハケメが残存する。外面暗褐色、内面黒褐色で、白色粒子や赤色粒子が目立つ。

7は甕の口縁部破片である。口縁が直立ぎみで、平坦な端部に刻み目が入る。内外面とも褐色で、白色粒子や岩片が入る。8～10は台付甕の台部である。9・10は同一個体。いずれも、内外面とも赤褐色で、白色粒子や岩片が多く含む。

11～15は、壺ないしは甕の底部破片である。11は小破片で、底部がやや突出する。内外面とも黄褐色で、砂粒はあまり目立たない。12も小破片で、比較的明瞭に底部が突出する。内外面とも暗褐色で、白色粒子や岩片を含む。木葉底らしい。13は底部全体の大型破片で、底部の突出が弱い。内外面とも赤褐色で、白色粒子や岩片が目立つ。木葉底の可能性がある。14は底端部が水平方向に強く張り出している。内面にヘラ状工具による調整痕がみられる。内外面とも黄褐色で、白色粒子や角閃石粒子が目立つ。木葉底らしい。15は小型品の底部で、底部の突出はあまり明瞭でない。内外面とも赤褐色で、白色粒子が目立つ。

9号住居址

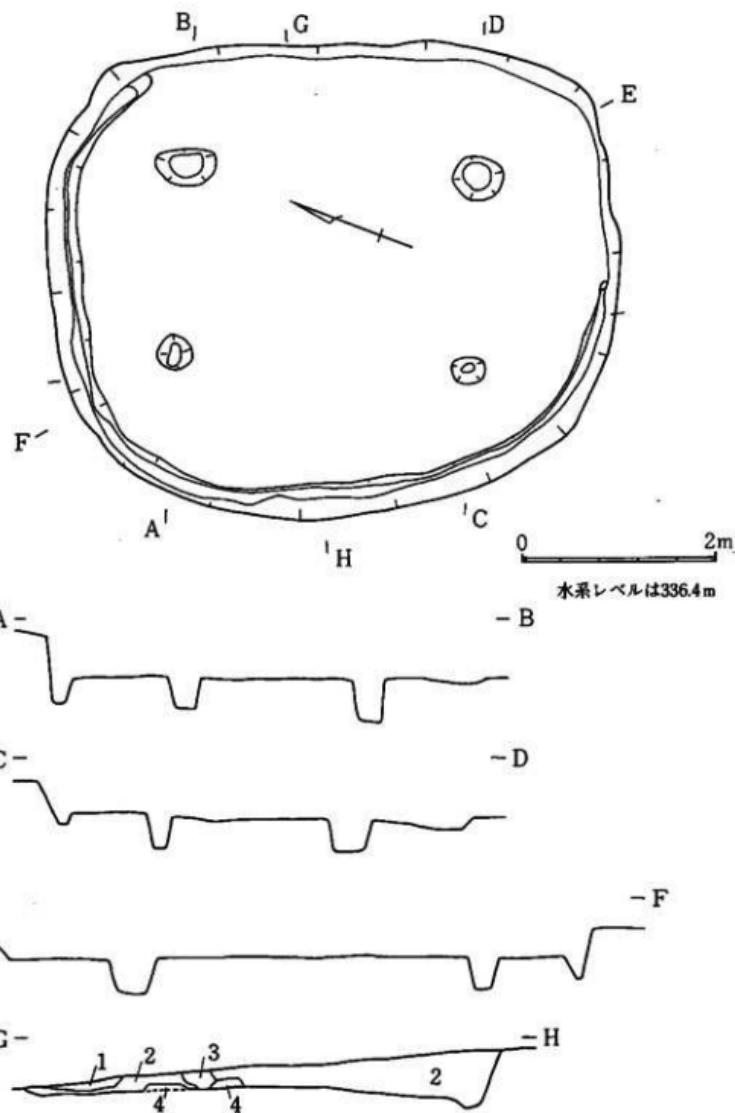
遺構（第25図） 9号住居址は、南地区中央の遺構群から南方へやや離れた位置にある。8号住居址の南西32mの位置である。すぐ南側に南側埋没渓谷を望み、この渓谷の方向へ傾斜する緩斜面上に位置する。

遺構の残存状況はかなり良好で、西壁もかろうじて確認できた。なお、北壁の東側と西壁の北側の一部を、畑地灌漑用水の管によって搅乱を受けているが、搅乱の深部は床面に至っていない。壁高は、最も深い西壁が45cm、浅い東壁で10cm程度である。

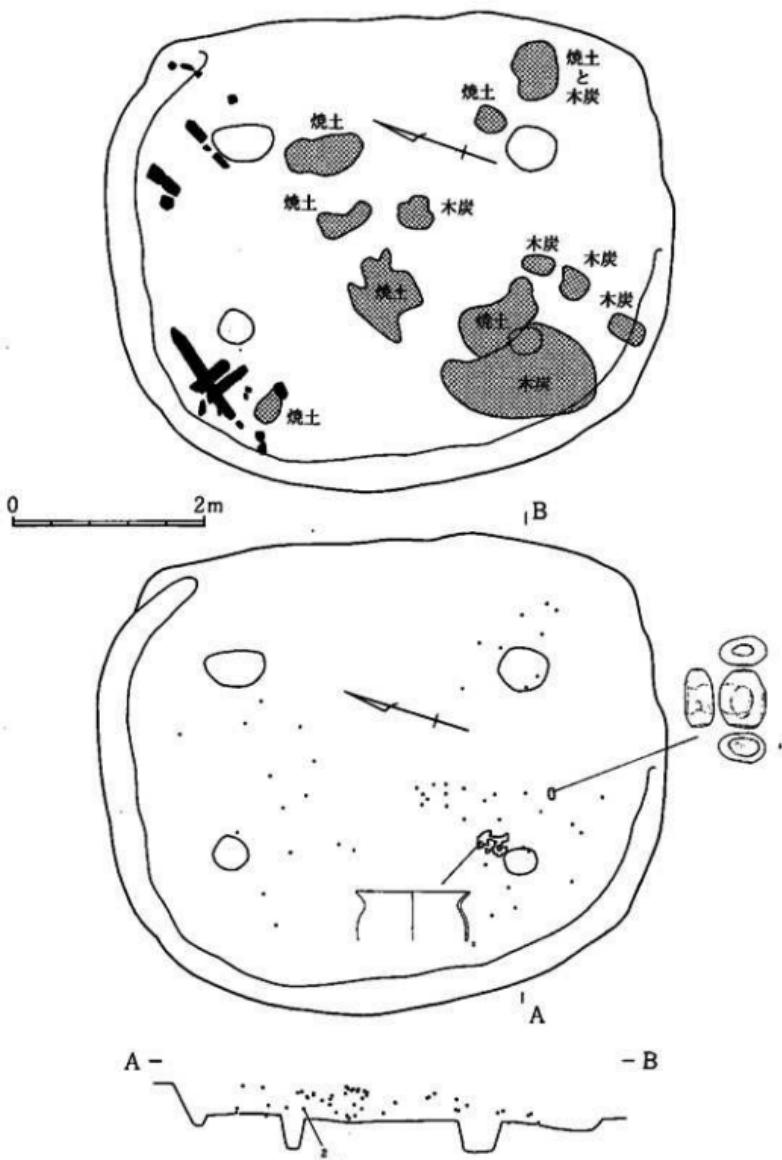
住居址形状をみると、西壁中央部が弱い弧を描くが、北壁中央は比較的直線的である。概して、他の住居址と同様な小判形である。長軸6m、短軸4.9mである。主軸の方向は、W-17°-Nである。

柱穴は4本確認できた。直径30～50cm程で、深さが30～40cm程度である。覆土は暗褐色粘土質土で、かなり硬質であり、検出にかなり苦労した。柱穴内からは、木炭や土器片などはまったく出土しなかった。

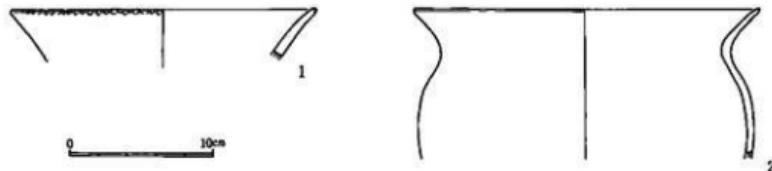
周溝は、北壁、西壁と、南壁西半部にみられた。東壁や南壁東半部には掘られていないものと思われる。北壁の周溝は、東端部からかなりの深さを持っており、徐々に浅くなって消失するような状況ではない。一方、南壁の周溝の東端部は、徐々に浅くなり消失している。住居址覆土と同じ土層が入っており、検出が容易であった。木炭や遺物の出土は、あまりみられなかった。



第25図 9号住居址 (1/60)



第26図 9号住居址木炭・焼土出土状況（上）と遺物出土状況（下）



第27図 9号住居址出土土器 (1/4)

土層をみると、1層が黒褐色粘土質土層で、他の土層より黒味が強い。2層が黒褐色粘土質土層で、礫を比較的多く含み、木炭や焼土粒子が若干入る。3層は黒褐色粘土質土層で、木炭や焼土が多くみられる。4層は焼土層である。

焼土や木炭の集中部が広範囲にみられた（第26図上）。焼土は住居址中央部に比較的多くみられ、木炭は、周溝に近い位置から多く出土した。焼土は、覆土中にやや浮いた状態のものがみられた。木炭で形態が明瞭なものが北壁側に多くみられた。中でも北西隅で出土した木炭が材料を組み合わせた状況が確認できる状況で出土した。北西—南東方向に、幅10cm前後、厚さ1cm程度の板材が、長さ1.1mにわたって残存していた。その中央付近で、これに直交して同様な幅、厚さの板材が、長さ40~50cmにわたって、2列に平行して残存していた。よく観察すると、キの字状に平行してある板材は、上下2枚になっており、長い方の板材を挟み込むようになっていた。住居址の上屋構造の一部を成していたものと思われる。

遺物出土状況（第26図下） 土器を中心とした遺物が覆土中から若干みられた。特に南西部で台付甕（第27図2）が床面上に焼土に埋って潰れた状態で出土した。なお、この台付甕の台部は消失した。この他には、あまり大きな個体の出土はなかった。また、敲石・磨石1点（第84図3）が、やはり南西部から出土している。これも、床面直上で出土した。この他、かなり大型の礫が床面より若干浮いた状態でいくつか出土している。この礫の出土は、特に南部に多かった。

出土土器（第27図） 1は甕の口縁部である。口縁端部に刻み目が入る。端部付近でやや外反するものの、比較的直線的で長い口縁部である。内外面とも赤褐色で、一部に二次焼成を受けたものか黒色化した部分がある。白色粒子や岩片を多く含む。

2は、台付甕の胴部から口縁部にかけての個体である。かなりの部分の破片が残存するが、細片が多く、復原がかなり困難であった。また、台部は消失してしまった。単純口縁で、端部は尖形である。また、直線的で比較的短い。胴部最大径は肩部にあるらしく、肩の張った形態と思われる。内外面とも赤褐色で、白色粒子や岩片を含む。

10号住居址および12号住居址

遺構（第28~29図） 10号および12号住居址は、深く切り合っているため、ここで両者合わせて記述したい。両住居址は、南地区の中央、やや北よりにある。東西方向の低い尾根状の高まりの頂部付近にある。9号住居址から北西方へ30m程の位置にある。また、最も近い住居址は24号住居址で、両住居址の東方23m程の位置である。

残存状況はかなり良好であるが、10号住居址の東壁については、焼土の帶状の分布でからう

じてその残存が確認できる程度であった。12号住居址については、10号住居址より新しい住居址であるが、10号住居址床面より浅いレベルまでしか掘り込んでおらず、10号住居址の覆土中に掘り込まれているため、床面や東・南壁を検出することができなかった。

まず、10号住居址（第28図）であるが、西壁、南壁ともに若干の弧を描く小判形の形態を示す。長軸 6.9m、短軸 5.2 m で、主軸が W-19°-N である。床面が北部の一部を除きほぼ全面にわたって焼けており、特に中央部から焼土帯直下の東部にかけては非常に硬く焼き締っている。また、西壁の北半部も、周溝の底部直上まで焼けていた。

柱穴は 4 本が確認できた。柱穴およびその周囲は焼けておらず、他の住居址より、その検出が容易であったが、やはり住居址覆土とは異なり、木炭をあまり含まない硬質の土壤であった。直径が 30~40cm と比較的小さく、深さも 20cm 程度と浅い。

周溝は、北西隅から西壁および南壁直下にみられた。南壁中央付近で 40cm 前後と幅広くなるものの、他はおむね 30cm 程度の幅である。深さは、15cm 程度。北西隅の東端部と南壁の東端部とは、ともに徐々に浅くなり消失する。北壁、東壁直下には、掘られていないかったものと思われる。

次に、12号住居址（第29図）であるが、10号住居址よりやや西側にずれて切り合っており、西部がかろうじて検出できた程度である。西壁中央が直線的で、北西隅と南西隅とは弧を描いており、おおむね小判形の形態であろう。長軸は、南北方向の土層断面（第28図）にみられる周溝の位置から、5.5m 程度と推定される。短軸は、柱穴と西壁との関係から 5 m 程度と推定される。10号住居址よりやや小型の住居址と思われる。主軸方向は、W-12°-N である。

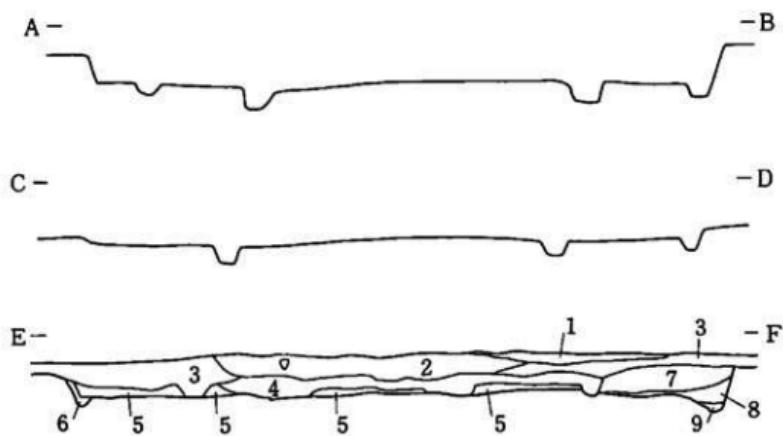
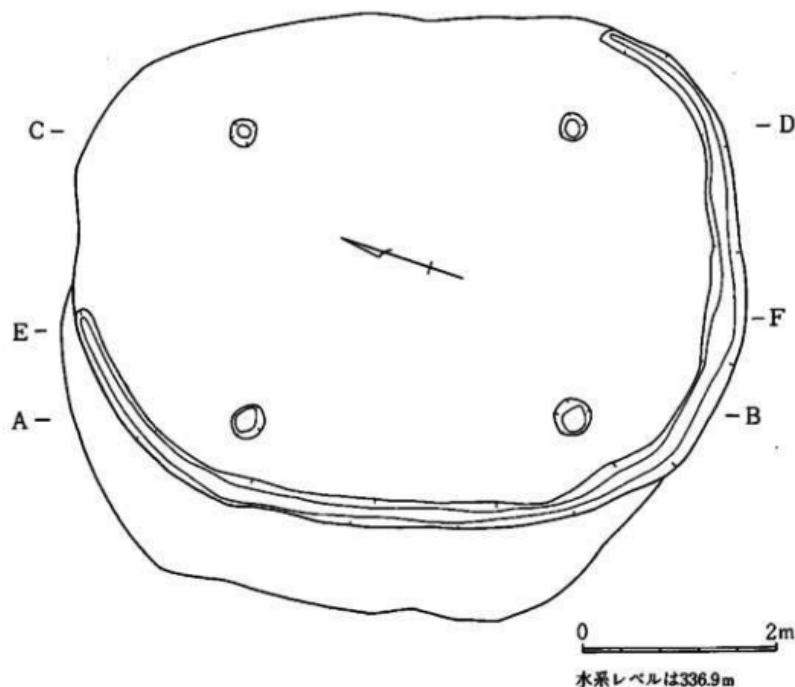
柱穴は、4 本確認できた。直径 20cm 程度と小型である。また、深さも 20cm 程度と浅い。

周溝は西壁から南西隅にかけてみられた。北端部は徐々に浅くなる。南壁側については、南北方向の土層断面図にもみられるように、周溝が存在したものと思われる。

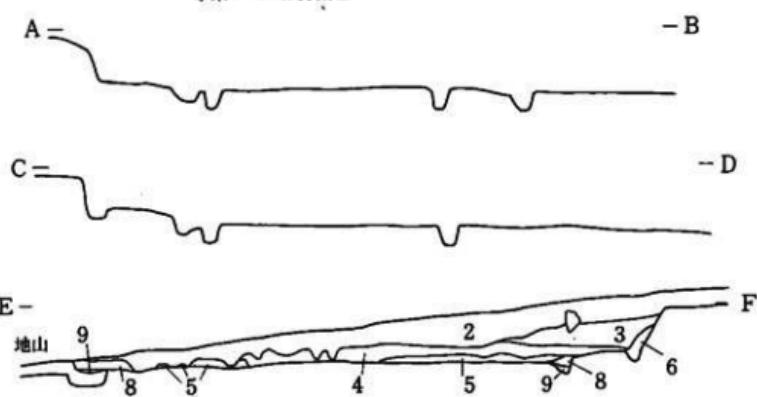
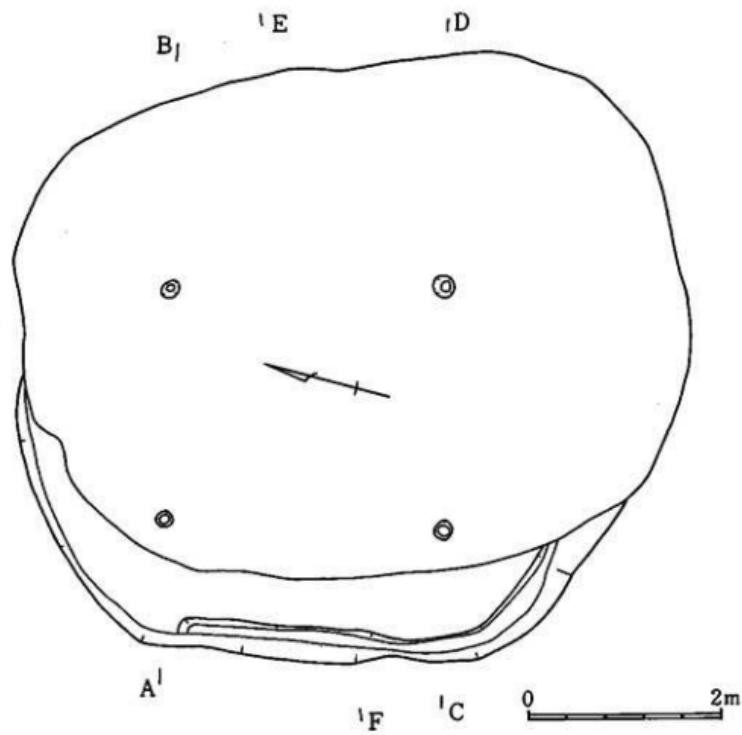
土層についてみてみよう（第28・29図）。まず、南北方向（第28図 E-F 線）であるが、1 層が耕作土層である。2 層が暗褐色粘土質土層で、直径 3 ~ 5 cm の小礫を多量に含む。3 層が暗褐色粘土質土層で、2 層よりやや暗く、礫をあまり含まない。4 層が黒褐色粘土質土層で、木炭片が多く含む。5 層が暗褐色粘土質土層で、黄褐色土の粒子がかなり入る。12号住居址の床面を構成する土層で、10号住居址の床面を直接覆う。6 層が、10号住居址の周溝の覆土で、木炭片や焼土ブロックを含む黒褐色粘土質土層。7 層が暗褐色粘土質土層、8 層が木炭片を含む焼土層。9 層が黒色粘土質土層で 10号住居址覆土である。2 ~ 4 層が 12号住居址覆土層で、6 ~ 9 層が 10号住居址覆土層である。5 層は、12号住居址の貼り床かもしれない。

東西方向（第29図 E-F 線）をみると、2 層が広く両住居址を覆っている。3 層が西壁側に三角堆土状に分布する。その下層に 4 層が広く分布する。周溝には 6 層が入る。以上が 12号住居址覆土で、5 層がやはり貼り床状にみられる。10号住居址関係の土層では、東壁側に帶状にみられる 8 層の焼土層、その直下の薄い 9 層の分布、周溝内の 8 層焼土層と 9 層黒色粘土質土層である。東壁側では 12号住居址の立ち上がりが不明確である。

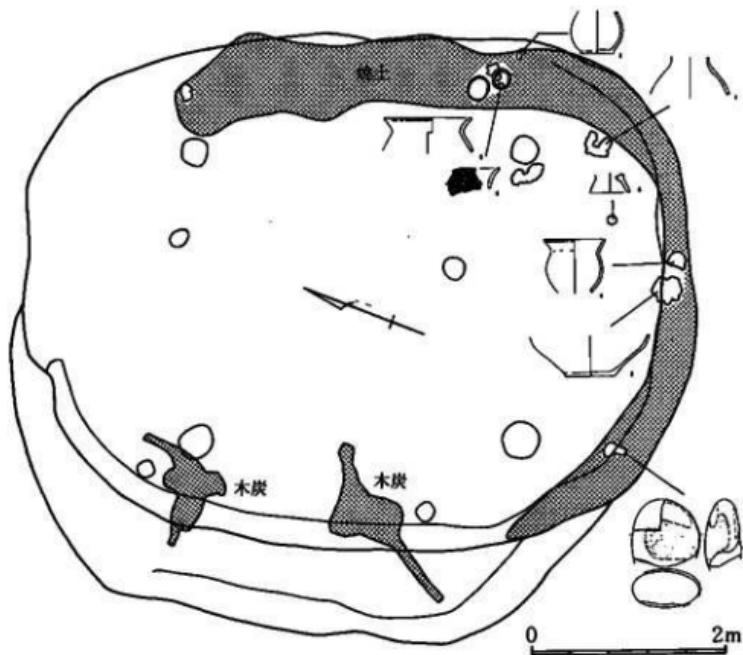
2 層は礫を多量に含み、住居址の斜面上方より流れ込んだ土層と思われるが、土器小片を多



第26図 10号住居址 (1/60)



第29図 12号住居址 (1/60)



第30図 10・12号住居址焼土、木炭及び床面直上遺物の分布

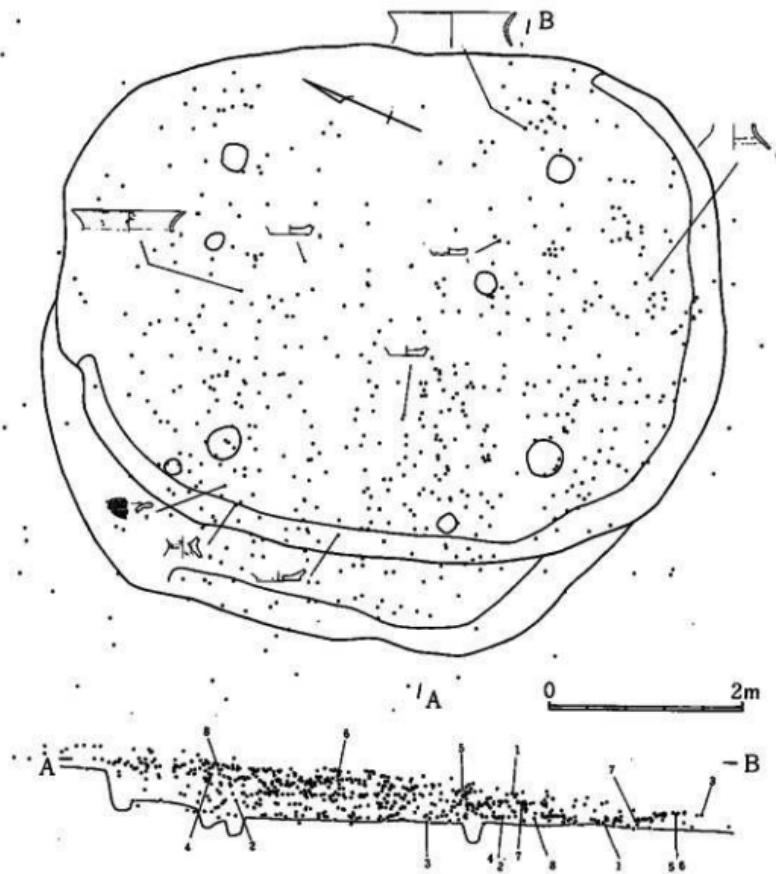
量に含んでいる（第31図）。住居址周辺に土器が廃棄されていたことを示すものだろうか。

次に焼土や木炭の分布をみてみよう（第30図）。10号住居址の南壁から東壁直下にかけて、厚い焼土層の帯状の分布がみられた。南壁直下では周溝内に堆積し、土層観察で示したとおり、その直下に黒色粘土質土層が分布している。東壁側では、厚さ10cm程度の厚さを持っている。この焼土層に覆われて、床面直上遺物が出土している。

12号住居址関係では、西側にある程度形態の判別できる木炭が分布している。10号住居址の周溝をまたいで2カ所で分布がみられる。この木炭は覆土中に浮いた状態である。東西方向の土層断面図の4層上面に分布していた。

遺物出土状況（第31図） 土器片が覆土中より多量に出土している。特に2層中から出土量が多い。3層中の出土量は比較的少ない。これらの覆土中の土器片のうち、図化の可能なものは、大半が12号住居址に帰属するものとして第33図に示した。また、土製の紡錘車（第82図2）や剣片、打製石斧（第83図3）が覆土中から出土した。

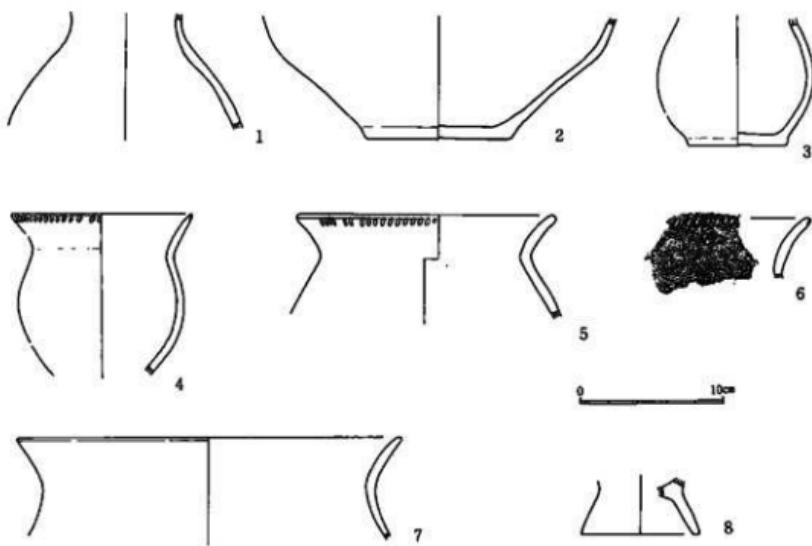
床面直上から出土した遺物は、全て10号住居址に帰属する。特に南東隅に大型破片が集中する。甕や壺が混在するが、風化が著しく、復原不可能なもののが多かった。また、南壁直下の周



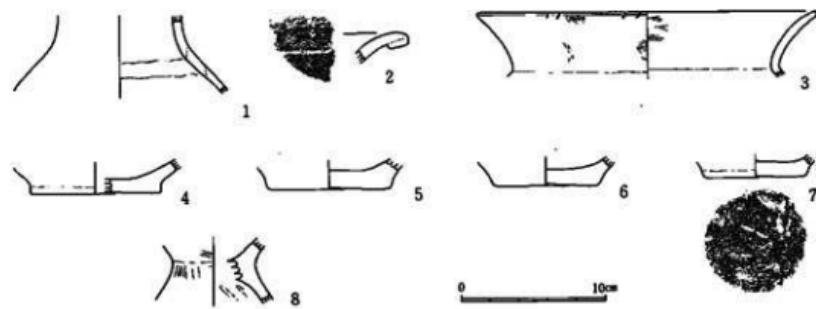
第31図 10・12号住居址覆土中遺物出土状況

溝内に落ち込んだ状態で、甕（第32図4）、壺底部（第32図2）、磨石（第84図4）が出土した。いずれも、周溝内の覆土上面に浮いた状態で出土している。磨石は、その場で割れた状態で出土。なおかつ、一部を欠損している。また、焼けているらしく、一部弱く赤色化したり、うっすらとススの付着が表面および破断面にみられる。

出土土器（第32図、第33図） まず、10号住居址（第32図）であるが、1は小型の壺の頸部から肩部にかけての破片が数点接合したものである。頸部の器壁は薄く3mmほどである。内外面とも褐色で、白色粒子や岩片を多く含む胎土である。住居址南東部の床面直上で出土。2は、周溝内より出土した壺の底部である。底部は全体が残存している。胴部下半に若干の屈曲がみられ、屈曲部から底部に至る器壁は若干内湾している。内外面とも赤褐色で、白色粒子や



第32図 10号住居址出土土器 (1/4)



第33図 12号住居址出土土器 (1/4)

岩片を多量に含む。3は、住居址南東部の床面直上で、焼土に覆われて出土した小型の壺の胴部で、全体の2分の1程の個体である。上端部が頸部にややかかっており、広口の壺と思われる。内面はナデ調整されているが、外面は風化が著しく調整のありかたは不明。内外面とも暗褐色。白色粒子や雲母片、岩石を多く含む。4は、周溝内に落ち込んだ状態で出土した小型の壺である。底部を欠くものの、口縁部も含む3分の2程の個体である。口縁部に刻み目がみられ、胴部は丸い。底部がかなり小さいものと思われ、台付かもしれない。内外面とも暗赤褐色で白色の細かな粒子を含む。5は壺の口縁部で、住居址南東部の床面直上から焼土に覆わされて出土。口縁部から頸部にかけての部分が一周する程度に残存している。口縁部を床面に伏

した状態で出土。口縁部に刻み目をもつ。口縁部がやや内湾し、端部が丸い。器壁も部厚い。内外面とも赤褐色で、白色粒子を多量に含む。6は、5に接して出土しているが5より口縁部が長く、別個体である。やはり刻み目を持つ。やや内湾する。内外面とも赤褐色で、白色粒子を含む。7は大型の壺の口縁部破片で覆土中出土。表面がかなり風化しているので不明ながら刻み目があったかもしれない。内外面とも褐色で、白色粒子や岩片を含む。8は、小型の台付壺の台部で床面上出土。内外面とも赤褐色で、白色粒子を含む。

12号住居址（第33図）出土の土器は、全て覆土中出土である。1は壺の頸部から肩部にかけて、内面に輪積み痕がみられる。内外面とも暗褐色で、白色粒子を含む。2は、折り返し口縁の壺の口縁部小破片である。内外面褐色で、白色粒子を含む。3は、壺の口縁部小破片で、口縁端部が尖形で細かな刻み目をもつ。外面に縱方向のハケメが若干残存する。非常に長い口縁で、しかもかなり強く外傾しているらしい。胎土も他よりも緻密である。4から7は、壺の底部である。いずれも底部がやや突出ぎみに作られている。4の胎土に雲母がかなり多くみられる。他は一般的な胎土である。8は、台付壺の台部である。雲母がかなり目立つ。台部外面に若干のハケメが残存する。

11号住居址

造構（第34図、第37図） 11号住居址は、南地区の最西端、最も山地に近い高所に離れて位置する。最も近い位置にある10・12号住居址まで、35mを測る。

東部が擾乱を受けて不明瞭であるが、西側の残存は良好で、周溝底よりの壁高は最も高い所で80cmある。

住居址の形態は、全体に丸みのある小判形を呈する。西壁部分も、周溝のありかたをみるとやや外湾している。

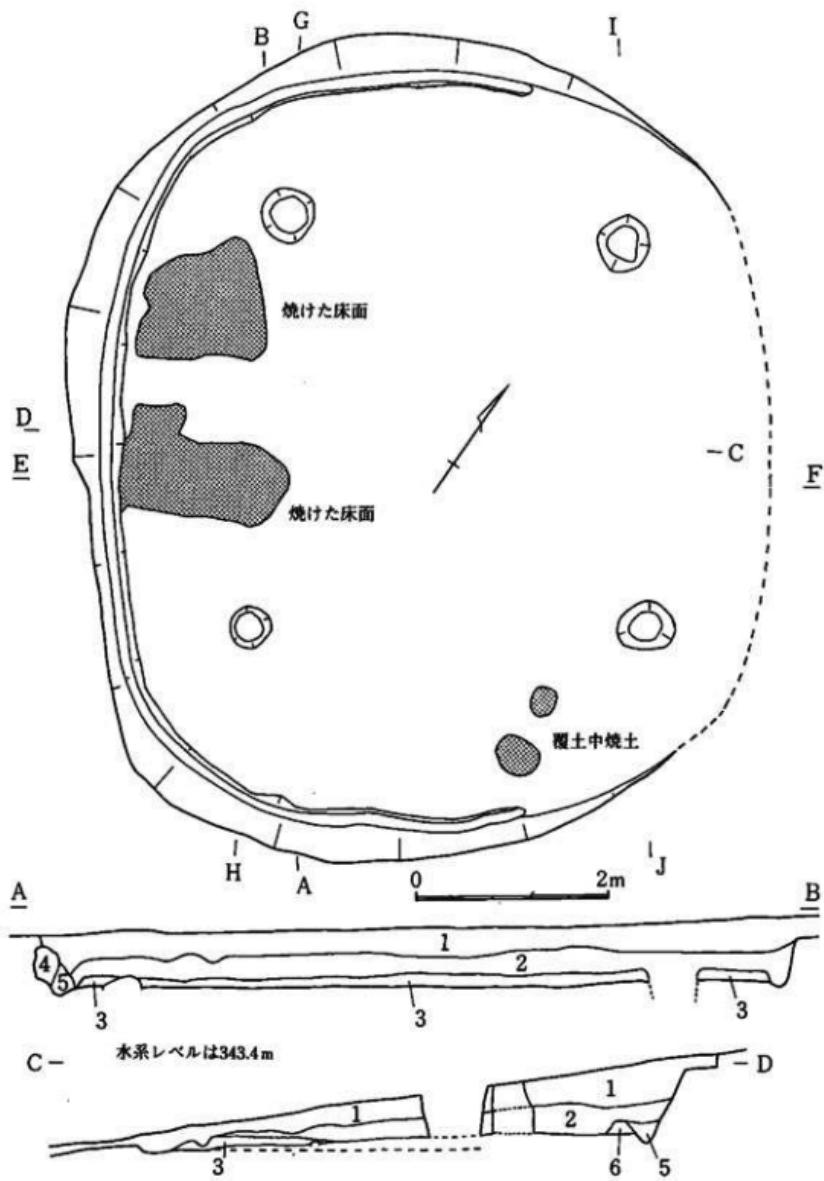
周溝は深い所で15cmと明瞭であるが、東側部分も含め全周するかは不明である。柱穴は4ヵ所確認でき、直徑が50~56cmと大きく、深さは20~30cmである。西部に焼けた床面が確認できた。これは炉址ではなく、住居焼失に伴うものと理解される。また、南西部に床面から30cmほど浮いているものの焼土が2ヵ所で確認できた。

長軸が8.4m、短軸は推定で7.2mある。主軸方向は、W-30°-Nである。

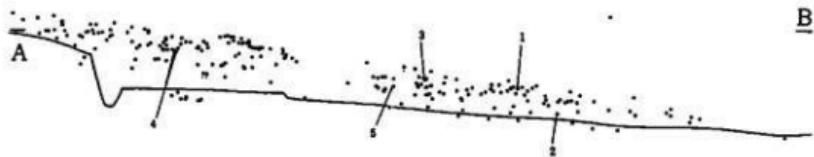
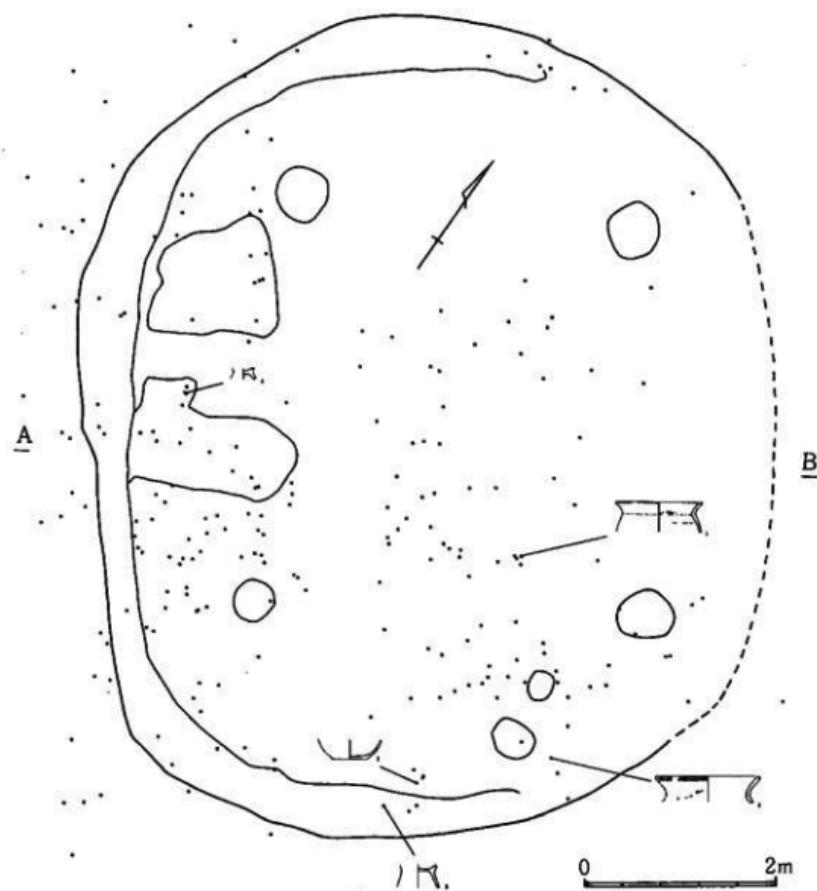
土層をみると（第34図下）、1層が暗褐色粘土質土層で、小礫を多量に含む。遺物の大半がこの土層中より出土している。2層が黒褐色粘土質土層で、小礫を多く含み、木炭や焼土ブロックが混在している。3層は黒色粘土質土層で、礫をほとんど含まない。おそらく、3層は床を形成するもので、荒掘りの後、礫を除去して残りの土壤をつきかためたのであろう。また、2層は、こうした床面や焼けた床面が土壤化作用を受け、形成されたものかもしれない。1層は、斜面上方からの移動が主成因の土壤であろう。

4~6層は局部的に存在する土壤である。4層は暗褐色礫層ブロックで暗褐色粘土質土が混入している。壁面が崩壊したものである。5層は周溝内にみられる土層で、黒褐色粘土質土層。6層は焼けた床面ブロックである。

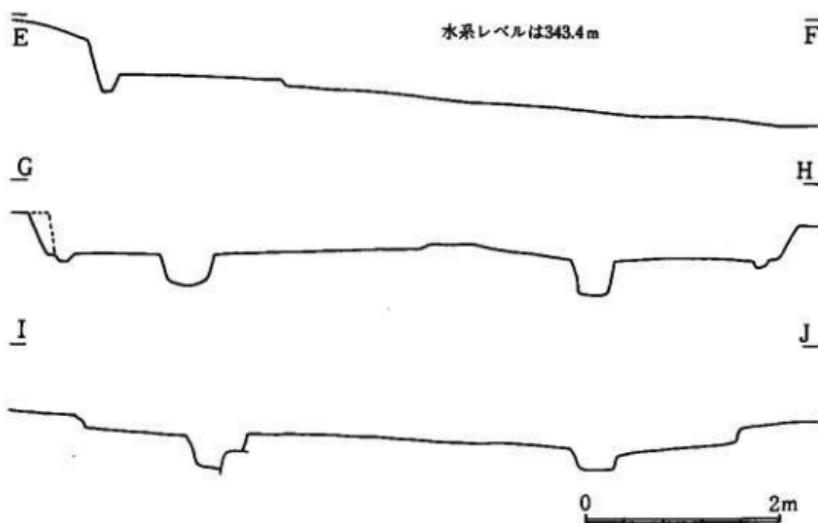
遺物出土状況（第35図） かなりの量の土器片が覆土中より出土しているが、床面上から



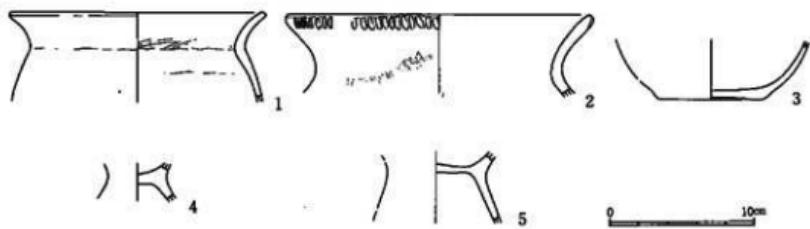
第34図 11号住居址 (1/60)



第35圖 11号住居址櫛土中遺物出土狀況



第36図 11号住居址断面図 (1/60)



第37図 11号住居址出土土器 (1/4)

出土する遺物はみられなかった。覆土中出土の遺物は、平面的には住居址内全体に分散しており、なおかつ、住居址西側の斜面上方に連続的に分布が広がっている。この状況は、垂直分布図をみると明瞭である。斜面上方から帶状に遺物が分布しており、西壁付近では、床面上方に無遺物層が確認できる。土層の項でも述べたとおり、遺物の大半は、住居址外から土壤の移動とともに住居址内に流れ込んだものである可能性が指摘できる。

これらの遺物の帰属が問題となるが、この住居址より西側に住居址はなく、また、遺物の特に多い分布状況もみられなかった。おそらく、住居址に居住中に破損した土器などを住居址周辺に廃棄し、それが住居址廃絶後流れ込んだものであろう。したがって、覆土中出土の遺物とは言え、本住居址の時期等を示す遺物と考えてよいものと思われる。

なお、この遺物の中に、石包丁（第83図1）や剥片（第83図2）が含まれていた。

出土土器（第37図） 1は壺の口縁から肩部にかけての破片である。平縁口縁で、やや内湾し外傾する。口縁内側に横方向のハケメが若干残存している。内外面とも赤褐色で、比較的砂粒の含有が少ない。2は壺の口縁部破片で、刻み目をもつ。非常に長く、厚い。外面に縱方向のハケメがみられる。内外面とも褐色で、白色や赤色の粒子を多く含む。3は、底部付近の破片で、白色粒子や岩片を多量に含む。器壁が薄く、胴部で3mm程度。4は、小型の台付壺の台部破片である。内外面とも褐色で、白色粒子、岩片を多く含む。5は、かなり大型の台付壺の台部である。内外面とも褐色で、白色粒子や岩片を多く含む。

13号住居址

遺構（第38図） 13号住居址は、北地区中央の住居址群の西端部に位置する。

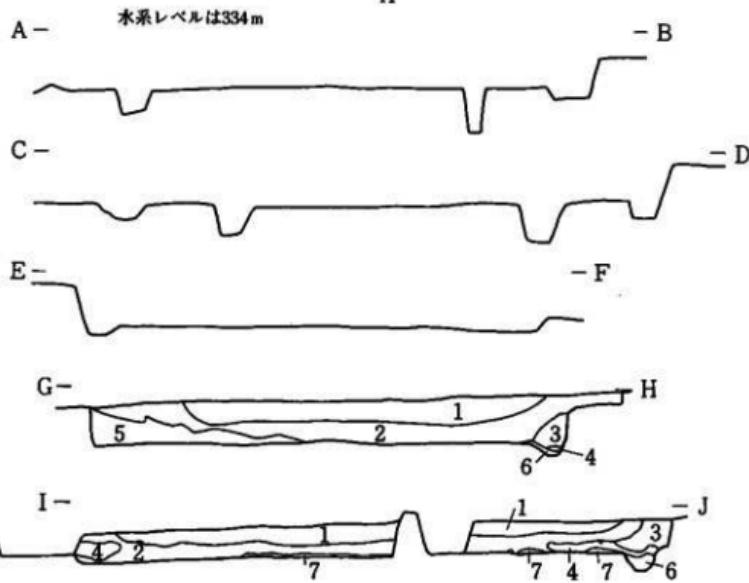
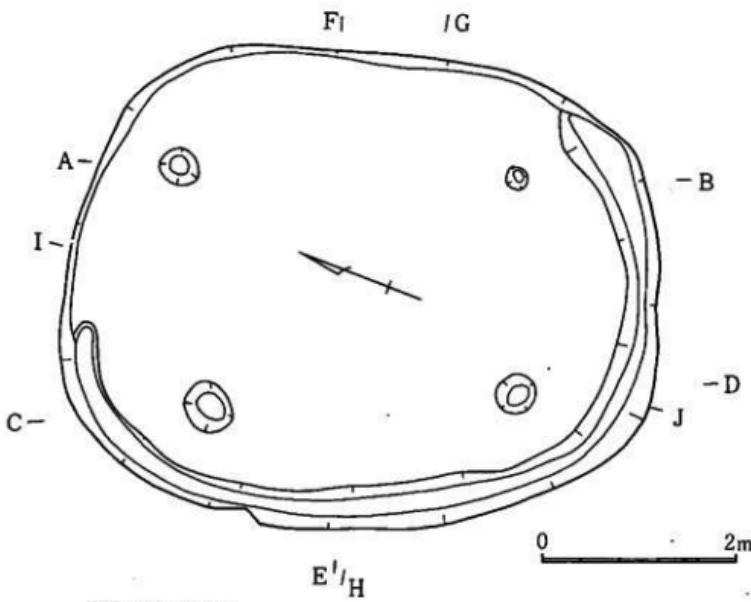
住居址の形態は、全体に丸みのある小判形である。四隅部分の屈曲がかなり不明瞭である。住居址の壁は全周が把握できた。壁高は、最も高い所で周溝底より60cmある。周溝は、深い所で20cmあり明瞭であるが、北壁から東壁にかけての部分は確認できなかった。周溝の両端は徐々に浅くなるのではなく、深さを保ったまま途切れる状況である。また、幅が南側ほど広くなっている、東端部で50cmと最も広い。柱穴は4ヵ所確認できたが、直径50cmから20cmと大小の差がある。深さも50cmから25cmと違いがみられる。

床面は、中央から南部にかけて床面上と思われる木炭片の分布が広く見られた。また、北半側で、覆土中にやや浮いたかたちで、ブロック状に焼土の分布がみられた（第39図下）。しかし、大型の木炭等の分布はなく、木炭の量も比較的少なかった。

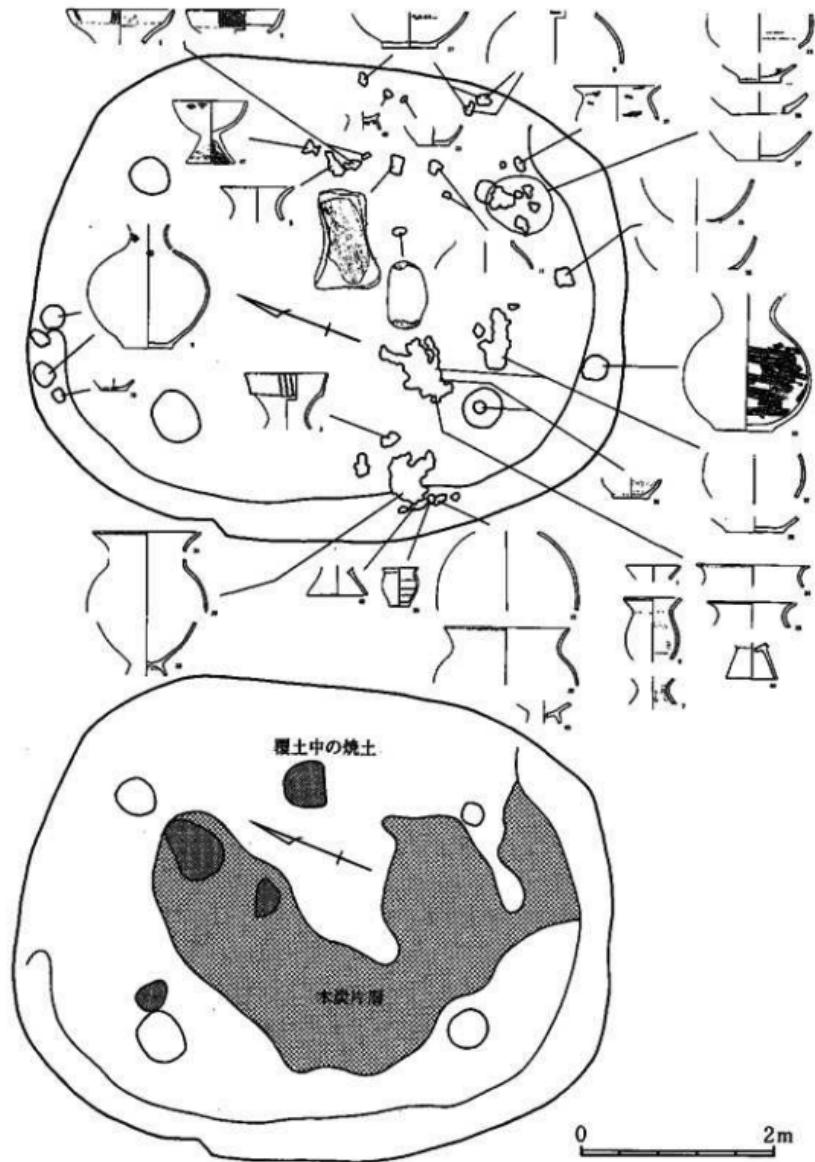
土層をみると（第38図下）、1層が暗褐色粘土質土層で、礫が多く、木炭等の分布はみられない。2層も暗褐色粘土質土層であるが、礫が少なく木炭の混入が少量認められる。3層は周溝上に三角堆土状にみられる黒褐色粘土質土層で、礫や木炭がほとんどみられない。4層は、焼土や木炭片を多量に含む黒褐色粘土質土層で、土器片も多量に入る。5層は、住居址東側にみられる土層で、黒褐色粘土質土層で、土器片を含む。6層は周溝の覆土で、黒褐色粘土質土層で木炭、焼土を比較的多く含む。7層は地山の暗褐色粘土質土層。

遺物出土状況（第39図上） 住居址南半部と、北端部とに、いずれも床面上で多量の遺物の分布がみられた。北端部では、壺の上半と下半とが分断されて、40cmほど離れて位置していた。この他、壺の破片が若干みられた。南半部では、床面上に潰れたように壺や壺の破片が分布していた。いずれもブロック状にまとまっており、各ブロック内には、いくつかの個体が含まれていた。また、完形個体の分布もみられた。南壁中央直下の周溝内に、大型の壺が、口を北なめ下方に向かたかたちで出土した。また、西壁中央やや南よりの周溝内に、土器片のブロックがあり、その中に立った状態で小型の広口壺が出土した。東部では、床面上に口を北に向けて、横になった高壙が出土している。この他、南西部の柱穴内に、ほぼ床面のレベルから、壺の底部破片が出土している。また、大型の砥石（第86図）や敲石（第84図2）が、床面より10cmほど浮いて出土している。

なお、本住居址については、遺物を取り上げて床面を清浄した後に、床を厚さ2cmで、50cmの方格を設定して採取し、水洗選別作業を行って、炭化種子の検出と同定を行った。その成果



第38図 13号住居址



第39図 13号住居址床面直上遺物出土状況（上）と焼土、木炭片層の分布（下）

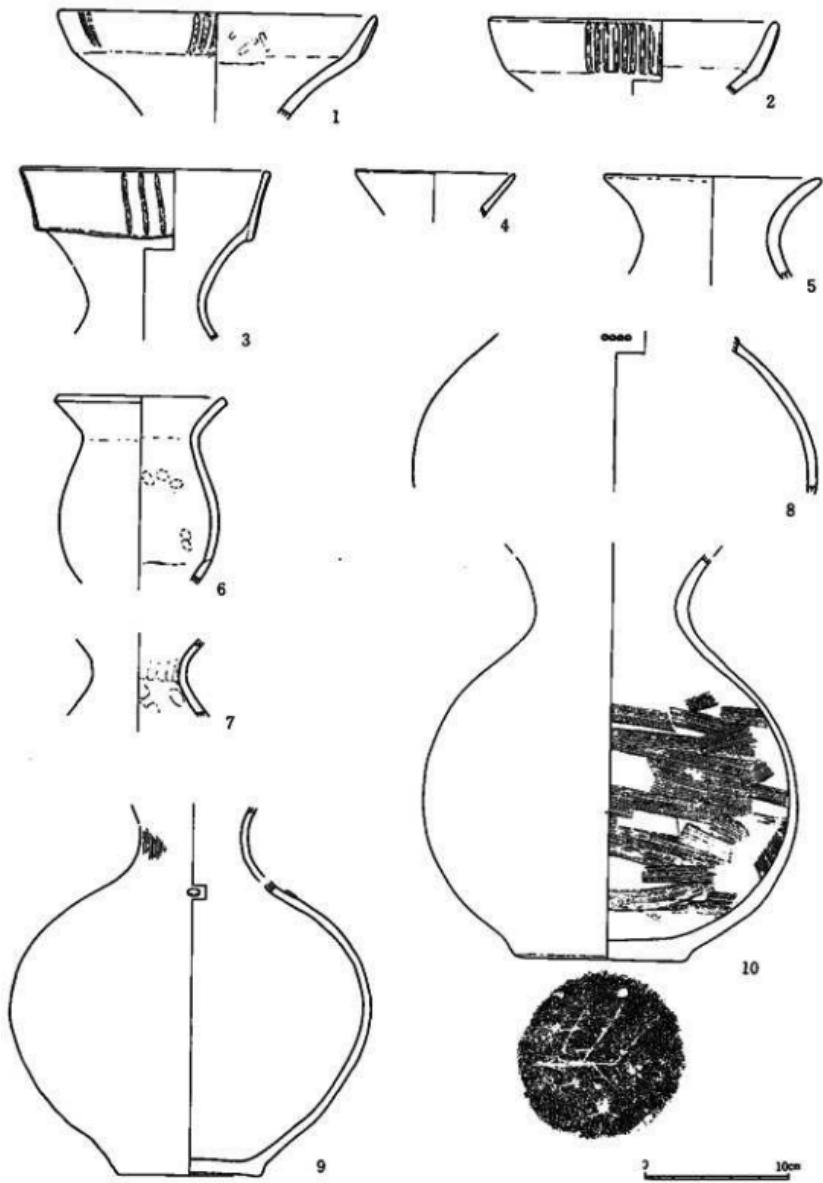
については、第4章「13号住居址床面下土壤の炭化種子水洗選別」で詳述する。

出土土器（第40～42図） 第40図は、壺である。1は、複合口縁の壺の口縁部である。この個体は、2と同一個体であり、8～9本の沈線が施文されている。口縁の段の部分が、かなり不明瞭であり、特に内面では、曲面となっている。また、複合口縁部分の幅が非常に狭くなっている。外面とも赤褐色で、白色粒子を多量に含む。3は、複合口縁の口縁部から頸部にかけての個体である。3本の沈線が、若干右下がりぎみに施文されている。口縁部は直立ぎみで若干内湾ぎみである。段の部分が非常に明瞭で、頸部の端部に外側からの縁部を貼り付けているものと思われる。外面とも赤褐色で、白色粒子や岩片、赤色粒子なども含む。4は、小型の壺の口縁部と思われる。平縁でかなり薄い。外面とも黒褐色で、白色粒子や岩片を含む。

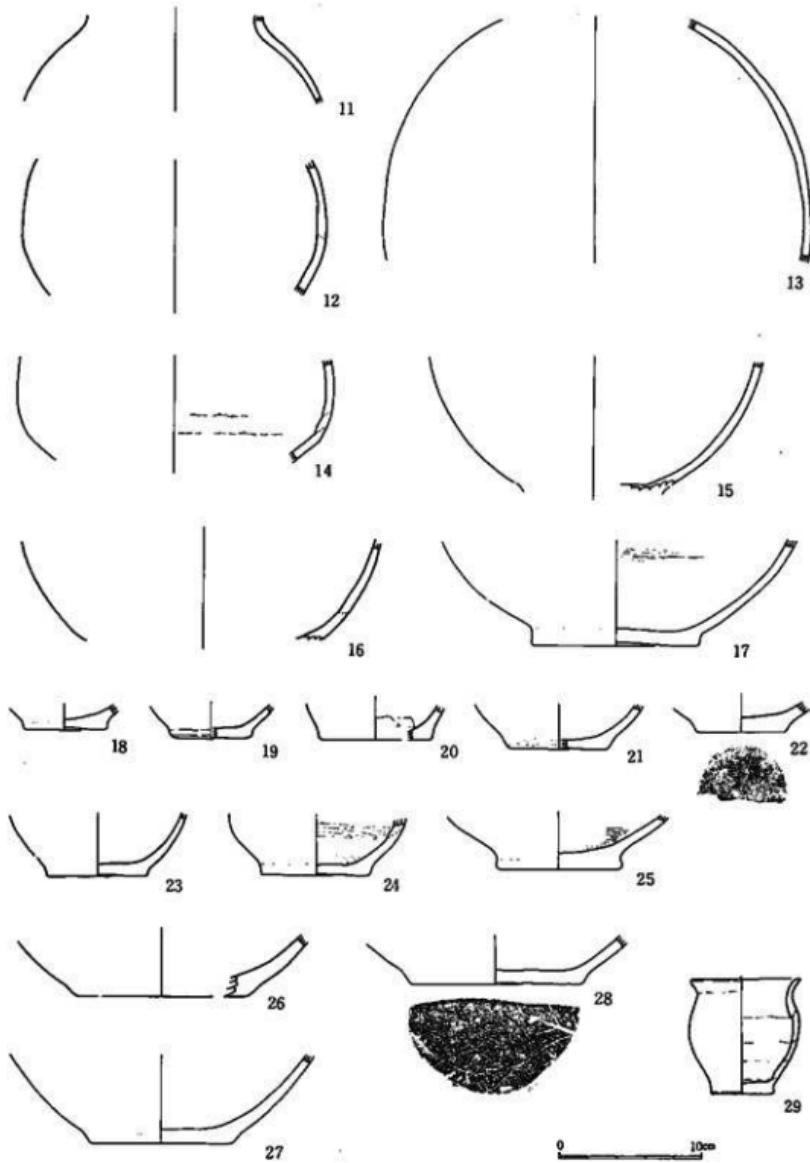
5は、壺の口頸部である。端部が平坦かやや丸い形態である。かなり厚い器壁である。外面とも赤褐色で、白色粒子や赤色粒子がみられる。6は、小型の壺である。口縁から、胴部下半の形態がわかる個体である。口縁部が角形に仕上げられ、端部が平坦である。また、口縁部がかなり短い。胴部は、やや下ぶくれの球状を呈する。外面とも暗褐色で、白色粒子を多量に含んでいる。全体の3分の1程が残存している個体である。7は、小型の壺の頸部から肩部にかけての破片である。外面にミガキ調整された地肌が若干残存している。また、内面には、成形時の指頭痕が若干残存している。外面とも黒褐色で、緻密な胎土で、砂粒は比較的目立たない。

8は、大型の壺の胴部大型破片である。肩部付近に、4個連続して、直径4mmほどの貼付文が施文されている。何単位あったかは不明。かなり球形に近い胴部だと思われる。大型である割には、器壁が薄く感じられる。器壁厚は5mm程度である。外面とも赤褐色で、白色粒子や赤色粒子を多く含む。また、岩片も若干みられる。9は、口縁部を欠くものの、ほぼ完形の個体である。住居址北端部で出土した。上下に分断されて出土した壺である。肩部に1個の貼付文がみられる。直径8mmで、1単位しかみあたらぬ。胴部最大径は、ほぼ胴部中央にあり、その部分がかなり張り出したように見える。底部も突出させている。頸部がかなり細い。また、大きさの割に器壁が薄く、4mm程度の所がある。外面とも赤褐色で、白色粒子や岩片を含む。10は、住居址南端で周溝内に落ち込んだかたちで出土した完形個体である。口縁部を欠くが、他はほとんど欠けていない。内面は、横方向のハケメが広範囲に残存している。また、外面は、ミガキ調整されており、胴下半部には、赤色塗料が残存している。底部は木葉痕がみられる。胴部の形態は球形に近い。外面とも赤褐色で、白色粒子や岩片を含む。

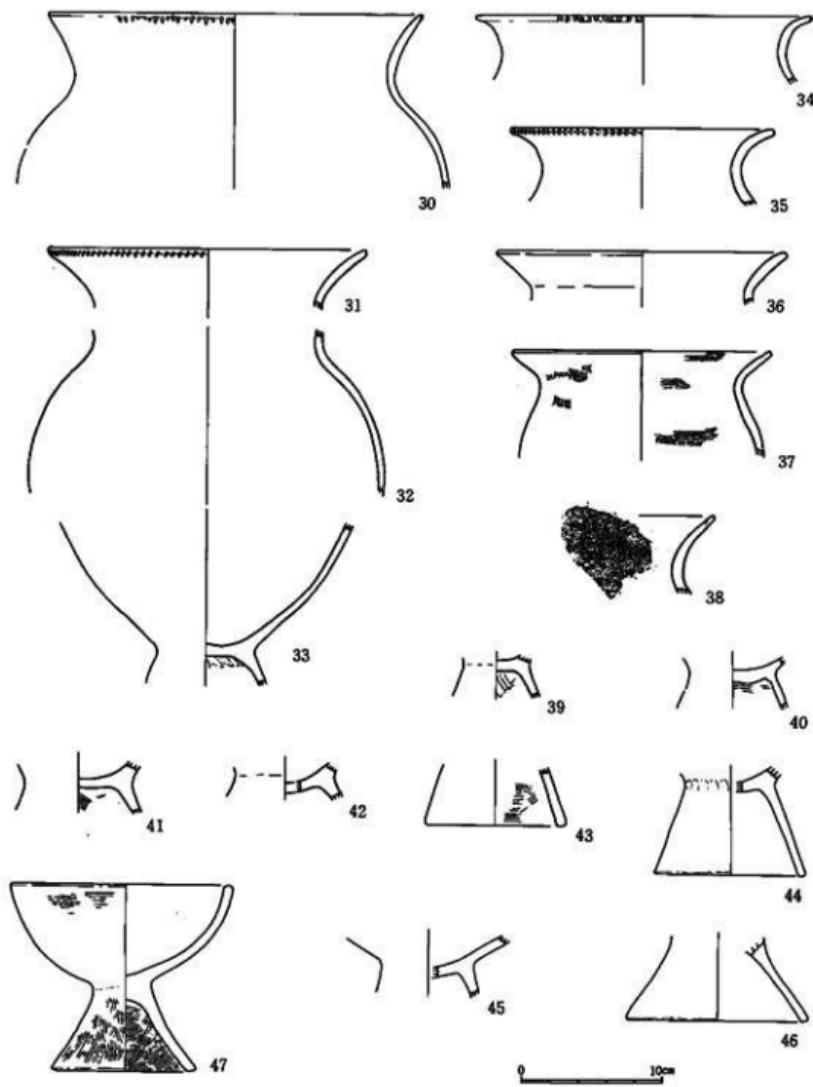
第41図は、壺の肩部から底部である。11は中型の壺の肩部破片である。器壁が4～5mmと比較的薄い。胎土の粒子も細粒で石英、長石、花崗岩らしい岩片、赤色粒子を含む。12は壺の胴部で、胴下半部に若干の屈曲がみられる。胎土の粒子がやや大粒で11と同様の粒子の他、黒灰色の泥岩のような岩片も含む。13は壺胴部上半の大破片である。球胴で大型の個体であるが、器壁は比較的薄い。胎土は12と同様である。14は壺の胴下半部の破片で、比較的強い屈曲がみられる。15は底部側の大型破片で、屈曲がなく球胴である。胎土に非常に大粒の岩片を多量に含む。16は胴下半部の破片で、屈曲がなく球胴である。



第40図 13号住居址出土土器(1) (1/4)



第41図 13号住居址出土土器(2) (1/4)



第42図 13号住居址出土土器(3) (1/4)

17は、底部を含む大型破片である。胴部下半で微弱な屈曲があり、底部は台状に突出する。胎土に大粒の赤色岩片が目立つが、泥岩か砂岩が焼けて赤色化したもののように見える。弱い屈曲部の内面に、横方向のハケメと思われる調整痕がうっすらと残存する。18は小型の壺の底である。底部は強く突出する。19は小型の壺の底部破片で、底部が突出する。比較的薄手で胎土に白色鉱物の他、輝石と思われる黒色で光沢のある鉱物を含む。20は底部破片で、若干突出する。覆土中出土。21は小型壺の底部で、底部が若干突出する。覆土中出土。22は小型壺の底部で、やや突出する。23は小型壺の底部で、突出する底部を持つ。24は小型壺の底部で、底部は突出する。胴下半部に屈曲がみられる。屈曲部内面に棒状工具による横方向の調整がみられる。かなり大粒の白色の岩片が多く含まれる。25は底部大型破片で、中型の個体である。底部は強く突出し、底部周縁がさらに突出している。胴部内面に横方向のハケメが若干残存する。底部内面には指頭底が残存する。26は底部小破片で、底部の突出がほとんど見られない。27は大型の壺の底部破片で、弱い突出を示す。28は大型壺の底部破片で、あまり突出していない。底部外面に木葉痕が見られるが、かなりナデ消されている。胴部外面はかなり平滑で、横方向のナデないしミガキが施されているらしい。

29は小型の広口壺で、完形品である。器高 8.3 cm、口径 7.5 cm、底径 4.3 cm、胴部最大径 7.5 cm である。口縁端部は丸く、口縁はゆるやかに外反する。胴部最大径は胴上半部にあり、その内面には、成形時に胴部と口縁部とを接合した痕跡が明瞭に残存する。底部は強く突出し、底端部も突出する。内外面ともナデ調整で、特に内面には棒状工具による横方向ナデ調整の痕跡が見られる。胎土は他の壺や壺と同様である。

第42図は台付壺である。30は口縁部から肩部にかけての大型破片で、口縁部にはキザミ目が見られる。口縁部は 5 cm ほどもあり長く、やや内湾ぎみである。比較的肩部の張る器形と思われる。器壁は 5 mm 程度と薄い。胎土は壺同様、石英、長石、白色岩片、赤色岩片等を多く含む。31~33は同一個体である。口縁部は 5 cm ほどの長さを持ち、やや内湾しながら比較的強く外傾する。口縁にはキザミ目が見られる。肩部はあまり張らず、胴部最大径は胴上半の比較的下部にあるらしい。底部内面中央がやや盛りあがる。器壁は全体的に 5 mm 程度と薄い。胎土に輝石が目立つ。34は、口縁部破片で、強く外反する。口縁にはキザミ目が見られる。35は、やはり強く外反する口縁部破片で、3 cm 程度と短めである。口縁にキザミ目が見られる。36は、やや内湾する短めの口縁部破片で、平口縁である。頸部がくの字状に明瞭に屈曲する。覆土中出土。37は平口縁の大型破片で、口縁部は直線的で頸部が比較的明瞭である。口縁部と胴部の内面に横方向のハケメ、同外面には縦方向のハケメが残存する。胎土にあまり大きな粒子がみられない。38は平口縁の小破片で、5 cm 程度と長い口縁でゆるやかに内湾する。

39は、台付壺台部である。小型である。台部内面に棒状工具による斜方向のナデが見られる。40は比較的大型の台付壺で、底部内面は平坦である。台部の底部内面がやや突出し、接合部の台部側内面に横方向のハケメ状の調整が見られる。41も大型台付壺で、底部は内外面とも平坦である。台部内面に斜方向のハケメ状の調整が若干残存する。42は、底部外面がやや突出する。43は台部端の破片で、内面に横方向のハケメが見られる。44は大型の台付壺の台部で、台部は

直線的に外傾する。接合部外面に指痕痕が見られる。45の底部は外面傾にやや突出する。46はやや内湾ぎみに外傾する台部で、接合部が厚い。

47はほぼ完形の高坏で、本遺跡ではこの他3号土坑に破片が1点見られるのみである。深い楕形の身部とラッパ状に開く台部とから成り、口縁はやや角口縁ぎみである。身部外面に横方向のハケメ、台部外面に縦方向ハケメ、台部内面に横方向から斜方向のハケメが見られる。器高12.9cm、身部口径15.5cm、台部口径9.8cm、接合部径4cm、身部器高7cmで、身部の器高の方が高い。白色粒子や岩片を含む粗い胎土である。身部内面底部に、黒色タール状の物質が付着している。色調は赤褐色である。

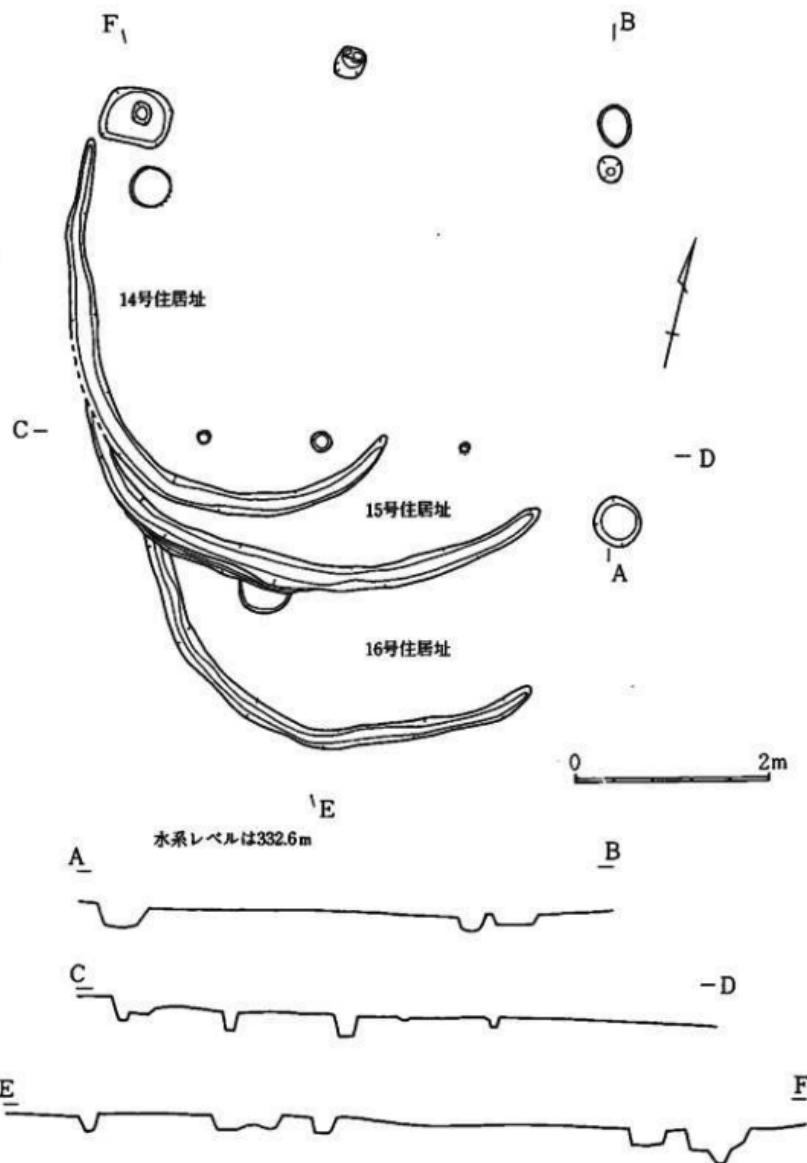
14・15・16号住居址

遺構（第43図） 北地区中央に群集する住居址群の中にあり、3軒の住居址が重複して確認された。重機による表土剥ぎ段階で周溝が3本確認され、北の周溝から14・15・16号住居址とした。溝覆土の切り合い関係を見ると、中央の15号住居址の覆土が木炭が多量に入る黒色の土層で、14号住居址西側の周溝の上を覆って、北西端にある方形の土坑まで扱んでいた。周溝内の土器も、15号住居址が最も多く、他は少量しか出土しなかった。15号住居址南西部から出土した第46図2・3・5の土器の一部は、14号住居址の上に乗った形で出土している。こうした点から、15号住居址が最も新しいが、14・16号住居址の新旧関係は不明である。なお、14・16号住居址周溝の覆土は暗褐色土で木炭片を少量含む。また、15号住居址周溝の外側にもう一重の周溝があり、覆土は14・16住と同じ暗褐色土で木炭片がほとんど見られない。15号住居址周溝の土器は、溝から出ている側が黒く焼けており、覆土の状況と合わせて焼失住居址と考えられる。柱穴状のビットをいくつか確認したが、いずれも浅く、各住居址の柱穴については不明とせざるを得ない。

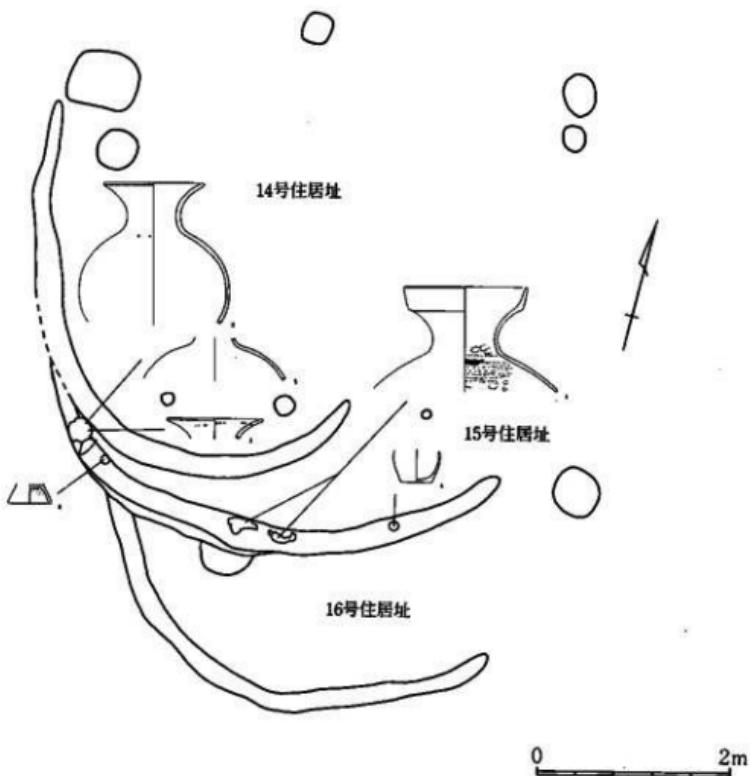
遺物出土状況（第44図） 出土遺物のほとんどは周溝内出土であり、15号住居址の周溝から大型の土器片が多く出土した。

出土土器（第45図） 14号住居址出土土器を第45図に示した。1、2は折り返し口縁の壺の口縁部破片である。2の内面に円形貼付文が見られ、孔が1ヶ所貫通している。3、4は壺の口縁部破片で3はキザミ目を持ち、4は平口縁である。

15号住居址出土土器を第46図に示した。1は有段口縁の大型壺である。頸部内側に横方向のハケメが若干残存するが、他の内面の調整痕はヘラ状工具による横方向のナデと思われる。外面の一部に赤色塗料が残存する。胎土には数種類の岩片と石英、長石、雲母の鉱物粒子が多量に混入する。2は球胴の中型壺である。単純口縁で、肩部に2個の円形貼付文がある。胎土は1と同様である。3は単純口縁の壺で、内面に円形貼付文が3個、8mm間隔で並ぶ。また、その並びに4個の孔が6~7mm間隔で並ぶ。孔は3個が貫通しているが、1個だけ内面側のみの穴となっている。胎土は1と同様である。4は小型の壺ないしは壺の胴部以下の部分である。底部は平坦で、胴部径に近い大きさの比較的大きなものである。胎土は1と同様である。5は壺の肩部大型破片である。2、3と同じ場所でまとめて出土した。胎土の数種類の岩片や石英、長石、雲母、輝石といった鉱物片を多量に含み、2や3よりも粗い胎土である。6は



第43図 14・15・16号住居址



第44図 14・15・16号住居址遺物出土状況

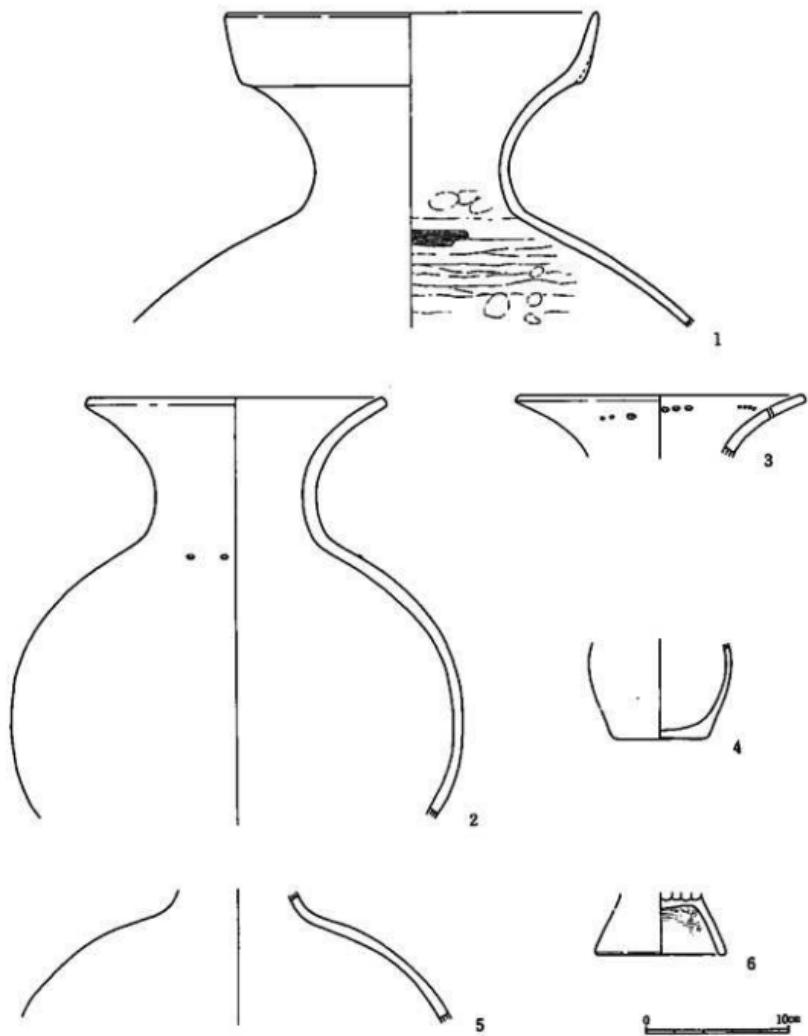


第45図 14号住居址出土土器 (1/4)

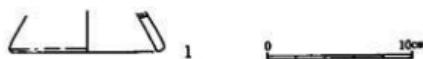
台付甕の台部で、台部のみの完形個体である。内面に横方向のハケメが残存する。台部端の径が 9 cm、胴部との接合部の径が 6 cm である。

15号住居址出土土器はいずれも周溝内から出土し、かなりの部分が接合する大型破片が多い。また、1 の内外面と 2 の内面は 2 次焼成を受けたらしく、黒色の部分が広く見られ、部分的に火ハネ状の小規模な剥落が見られる。

16号住居址出土土器は第47図に示した台付甕の台部破片のみで、周溝内出土である。



第46図 15号住居址出土土器 (1/4)



第47図 16号住居址出土土器 (1/4)

17号住居址

遺構（第48図） 17号住居址は北地区中央の住居址群の中にある、比較的大型の住居址である。南西部の周溝と4本の柱穴が確認できたが、住居址の北東部で斜面側にある3分の2程の部分や壁は耕作により攪乱され消失している。周溝は幅20cm、深さ10cm程度で、暗褐色粘土質土で少量の木炭片を含む覆土である。周溝の形態からして、住居址は胴張りの小判形のプランであったと思われる。柱穴は4本確認できた。東側の斜面側にある柱穴がやや深く60cm程度、西側の山側の2本は50cm程度の深さである。柱穴の床面側の直径が50cm程度である。東と西の対角線上にある柱穴2本は、やや浅いピットと切り合っている。東側の柱穴と切り合うピットは深さ25cm、西側の柱穴と切り合うピットは深さ30cmである。また、南側の柱穴内から完形の小型壺が出土した。柱穴の中央やや北西側、深さでは床面と柱穴底面とのほぼ中間にあり、真横に寝た状態で、口縁側を南西方の住居址外側に向けるようにして出土した。土器の中には、横になった下側半分に土壤がみられるが、上側は空腹になっていた。調査時に胴部を欠いてしまったが、口縁部を若干欠く程度でほぼ完形の個体であった。こうした出土状態からして柱穴を抜き取った後に意図的に埋設されたものと考えられる。住居址廃絶に伴う儀礼的行為であった可能性がある。床面もほとんど攪乱されて失われているが、住居址中央やや北西の位置で直径60cm程の範囲の焼土が確認できた。炉址の可能性がある。また、住居址東側で直径90cm程の範囲に細かな木炭片の集中を確認した。

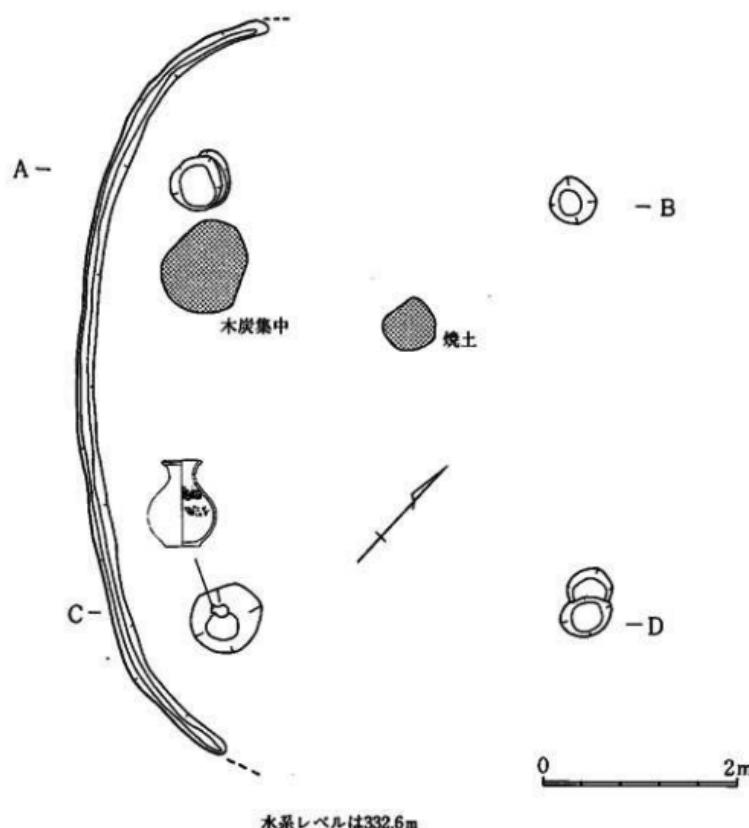
なお、北西側と南側の柱穴上場の中心を結んだ線で主軸の方向を示すとW-47°-Nである。周溝から周溝の長軸の長さを推定すると8mほどになり、平野遺跡の中では大型の住居である。

遺物出土状況 住居址の覆土や床面を失っていたので出土遺物も非常に少ない。柱穴内出土の小型壺については先述したとおりであるが、住居址南東部隅にあたる位置から第48図2の台付壺の台部が出土している。

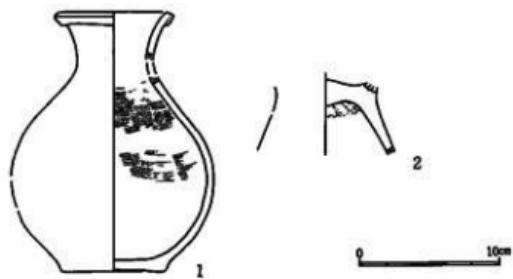
出土土器（第49図） 1は柱穴内出土の小型壺である。折り返し口縁で、端部が非常に平坦に仕上げられている。他の住居址の壺と比較して、口縁部の開きが弱く、口径が小さい。内面に横方向のハケメがみられる。ほぼ完形で、口径8.4cm、頸部径5.2cm、胴部径14cm、底部径7.4cm、器高18cmである。胴土に岩片や石英、長石などの鉱物を含むが比較的致密である。2は台付壺の台部である。接合部内面には指頭痕が連続する。

18号住居址

遺構（第50図） 18号住居址は、北地区中央部の住居址の集中する地域の中に位置する。他の住居址と比べて覆土中の木炭片の量が極端に少く、周囲の土層と覆土の違いが明瞭でなかったので、遺構確認に困難をきわめた。住居址南東部から大型土器片が多く出土したこと、北西部に浅いながらも周溝を確認したこと、南西部で壁面が把握できること、住居址中央部で焼けた床面が確認できたことなどから住居址と認定した。しかし、東半部の壁面は不明確で、南東部の壁面については大型土器片の出土状況からおおまかな位置を推定した。柱穴については、まったく確認できなかった。



第48図 17号住居址



第49図 17号住居址出土土器 (1/4)

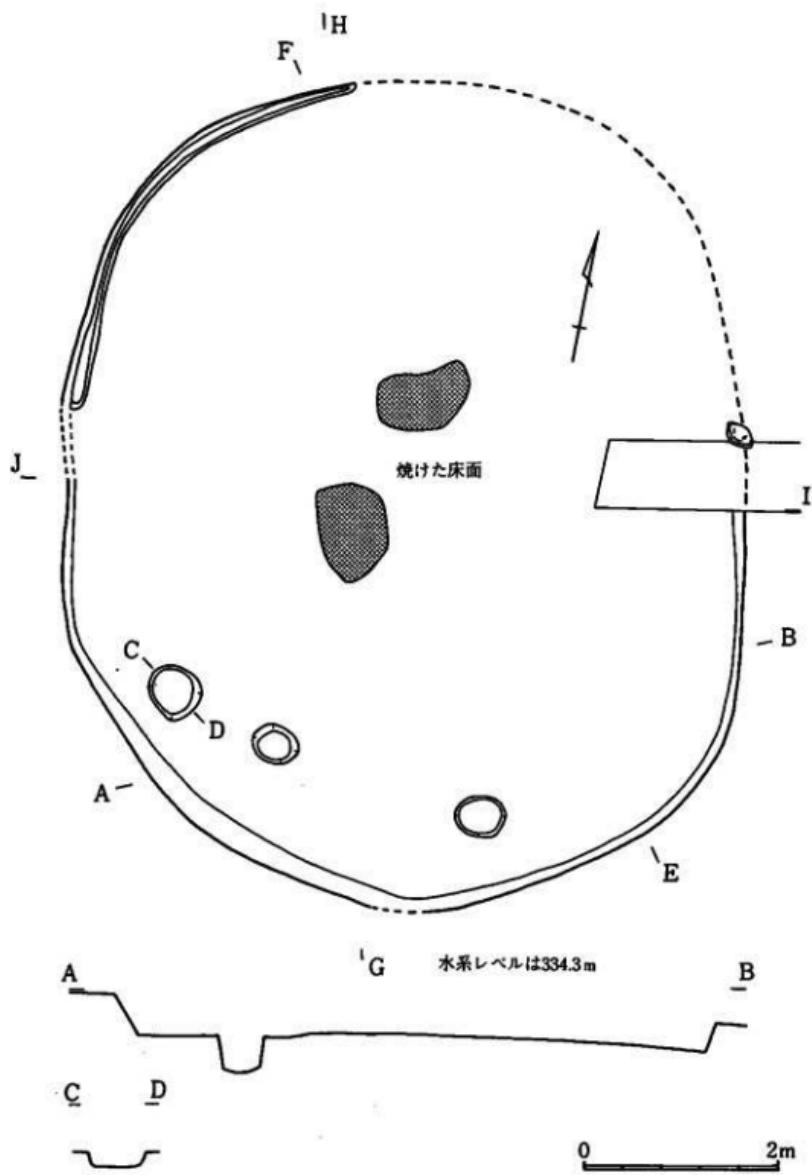
住居址の土層断面を第51図に示した。1層はJ-I線の断面の西端部のみにあり、細縫をわずかに含む黒褐色土で、攪乱層である。2層は住居址覆土層で、細縫や風化縫を含む暗褐色土層である。G-H線両端で、壁の立ちあがりや周溝の落ち込みを確認できる。3層は焼

土や木炭を確認できる暗褐色土層で、焼けた床面である。4層は直径1~3cmの黄色や緑色の風化縫を多く含む暗褐色土層の地山である。

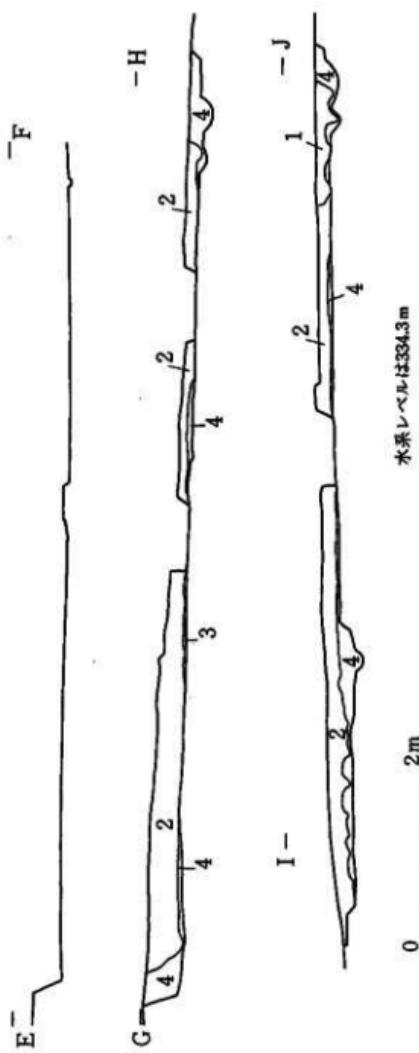
住居址の形態は橢円形で、長軸が8.48m、短軸が6.96mと大型である。南部にピットがあるが、東西端部の2個が直径60cm程度、深さ20cm程度である。この2個のピットに挟まれたピットが直径40cmで深さ40cmとやや深い。いずれも柱穴とは思われない。

遺物出土状況(第52図) 住居址の南部から南東部にかけて壺などの大型破片が多く出土したが、遺物が特にこの部分に集中することはなく住居址全体にまんべんなく分布している。第52図4の壺は胴下半部が床面から50cmほど浮いた状態で出土しているが、他の大型破片はほぼ床面と思われるレベルから出土している。他の土器片も床面レベル付近に多く出土する状況がある。住居址東半部、特に北東部で床面レベルより下位から出土する土器片が目立つ。自然の土壤流出などで攪乱を受けている状況を示すものと思われる。住居址の東側から北東方に下るように地形が傾斜しており、平面分布でも住居址外へと土器片の分布が広がっている。

出土土器(第53図) 1は複合口縁の壺の口縁部破片である。口縁直下から縦方向に4本の棒状貼付文が見られる。貼付文の断面は三角形である。口縁端部は丸口縁である。岩片や鉱物粒子を多量に含む。2は折り返し口縁の壺の口縁部破片である。口縁端部は角口縁である。3は中型の壺の頸部から肩部にかけての大型破片である。胎土には黒灰色、白色の岩片や、石英、長石、雲母などの鉱物粒子を多量に含む。4は中型の壺の胴部以下の個体である。胴部に比較的明瞭な屈曲が見られる。底部は若干突出ぎみではあるが、あまり明瞭に突出しない。底部の端部も丸くなっている。底部内面は平坦に仕上げられている。胎土は4と同様である。5は中型の壺の大型破片である。胴部に比較的明瞭な屈曲が見られる。底部は若干突出する。胎土には独特な岩片が入る。灰色で軟質の岩片で大きいものは直径3mmほどある。シルト岩ないしは泥岩であろうか。他の粒子は他の土器と同じである。6は壺の口縁部である。角口縁の外側端部にキザミ目が施されている。白色の岩片や石英、長石が見られ、特に雲母が目立つ胎土である。7は台付壺の台部の破片である。接合部の径は5.2cmである。胎土の白色岩片、石英、長石、雲母などの鉱物粒子を多く含む。8は本遺跡唯一の出土の小型鉢形土器である。3



第50図 18号住居址



第51図 18号住居址断面図および土層断面

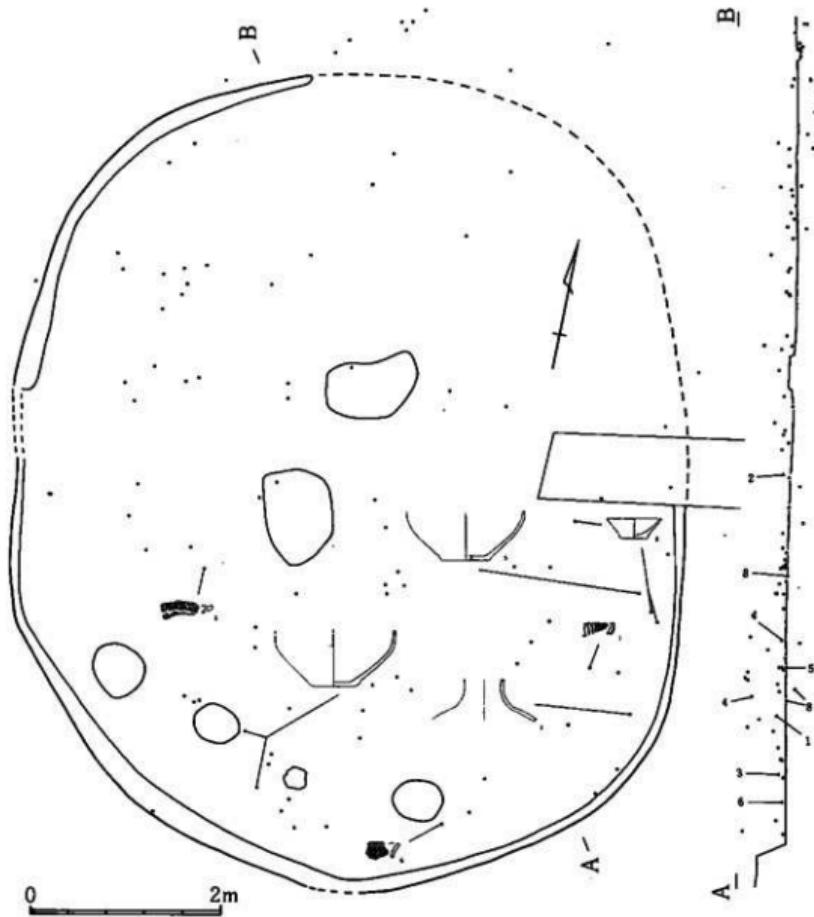
分の1ほどが欠けた個体である。口縁端部は平坦な面を持つ角口縁である。底部は突出する。底部の内面は丸みをおびている。口径11cm、底径5.9cm、器高4.4cmである。胎土に白色や褐色の岩片および石英、長石が目立ち、雲母や輝石といった鉱物粒子もみられるがごく小さな粒子で量も少ない。

19号住居址

遺構（第54図） 北地区中央の住居址群の中にあり、18号住居址と13号住居址の間に位置する。覆土は耕作等で攪乱を受けほとんど失われているが、床面直上の土器群がかろうじて残存している状況である。周溝は北西部から南東部にかけてみられる。深さは10~20cmある。南西部の一部がスプリンクラーの配水管によって攪乱されている。南東部では、掘り方と思われる浅く幅広の溝がめぐっている。壁は周溝のない東部でもかろうじて確認でき、住居址東側では周溝が設定されなかつた可能性がある。柱穴は直径25~30cmほどで深さ25~40cmで、4個確認できた。床面は明瞭ではないが、住居址中央やや北東よりに直径60cmほどの焼土が見られ、炉の可能性がある。また、東部中央付近にL字状に木炭と焼土の分布があり、攪乱溝によって取り残された東端部の周溝内にも焼土ブロックが2ヵ所見られた。

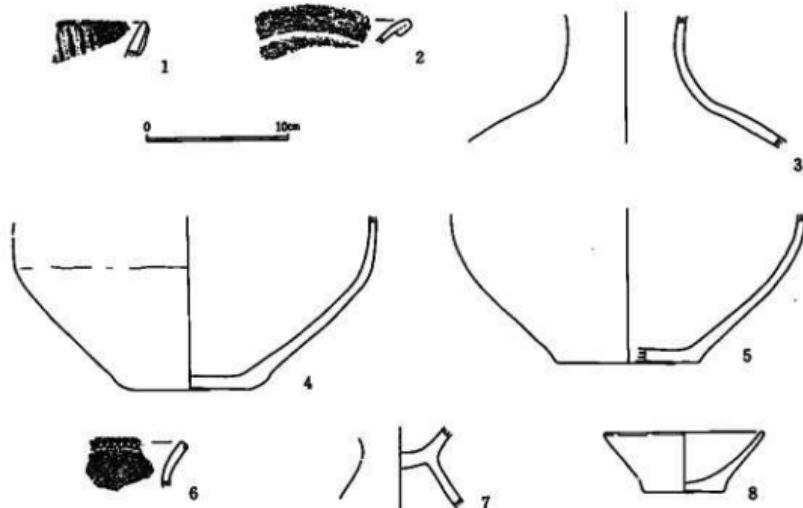
形態は小判形で、長軸4m70cm、短軸3m80cmである。小型の住居址である。主軸はW-15°-Nである。

遺物出土状況（第54図） 床面直上に土器片の分布が見られた。土層の攪



第52図 18号住居址遺物出土状況

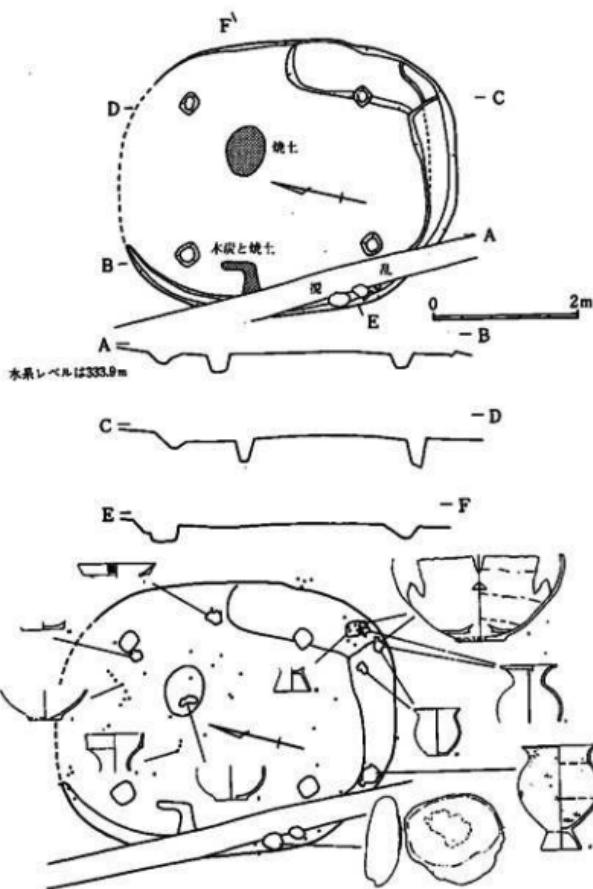
乱や土壤流出が激しいと思われる東側の部分についても、比較的大型の土器片が何点か分布し、床面が保存されている可能性を示している。周溝内からは、完形土器や大型土器片が多く出土した。南側では、完形の台付壺が口を東に向け、完全に横になった状態で出土した。周溝の底面よりやや浮いた状態であり、住居新築時より土壤が入って周溝がやや埋積された状態ではあるが、住居使用時には周溝は幅広い溝として存在していた可能性を示している。南東部では、大型壺や小型壺、台付壺の大型破片や、広口壺のほぼ完形の個体が、相互に近接して出土した。広口壺は周溝底部と周溝肩部の床面レベルとに分かれて出土した。大型壺は周溝上ながら床面



第53図 18号住居址出土土器 (1/4)

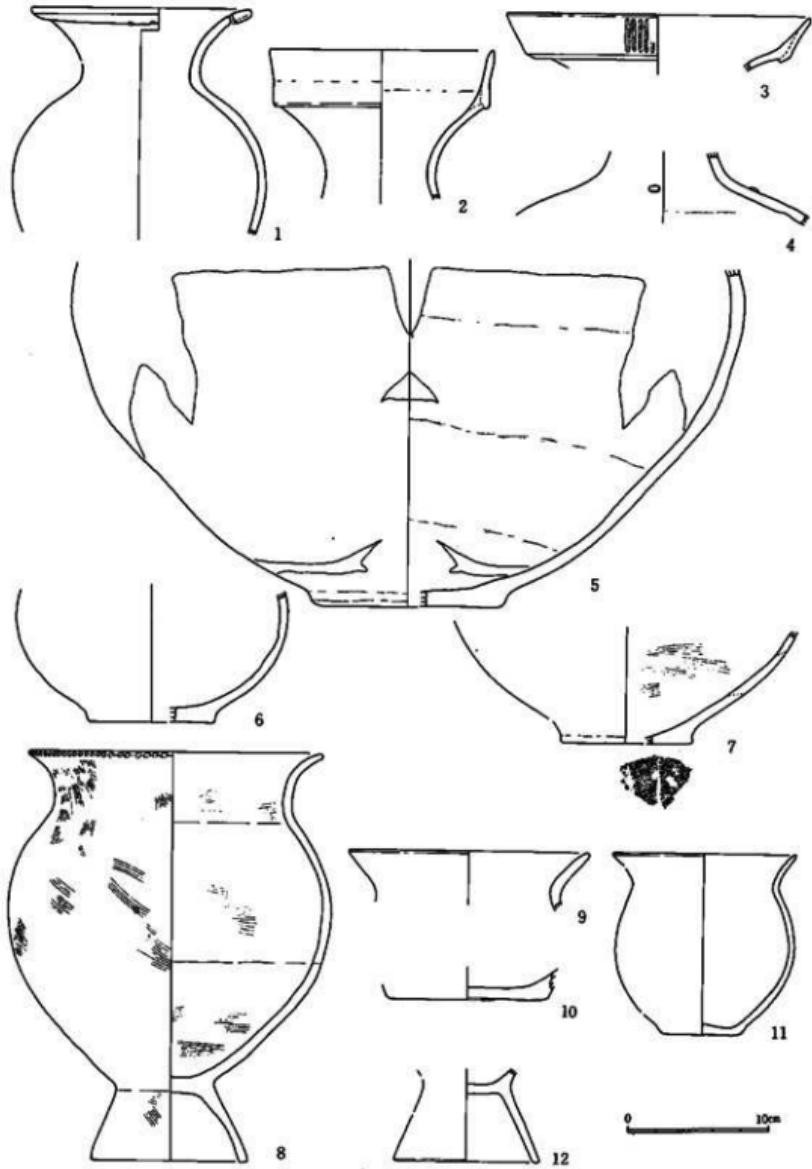
とほぼ同じレベルから出土した。南西部では磨面のある大型壺（第85図2）と碟とが並んで周溝底部から出土した。搅乱溝により周溝底部中央から東半部が失われており、磨面のある大型碟と碟は壁側に立てかけられたような状態で出土している。両者は焼けており、また周囲に焼土が見られた。

出土土器（第55図） 1は折り返し口縁の小型壺である。肩部との境界は比較的明瞭で、内面ではくの字状に近い屈曲を示す。頸部の立ち上りは不明瞭で、肩部から直接口縁が立ち上がり強く外傾する。口縁部のたけが低く、頸部径が太い。口縁直下の折り返しが切れる部分に貫通した穴が2個並んでおり、対極の位置に2ヵ所配置されている。穴の径は2mm程度で、2個の穴の間隔は1.5cmと1.2cmである。胴部は球胴と思われる。胎土には花崗岩様の岩片や白色や黒色の泥岩様の岩片、石英、長石、雲母といった鉱物粒子がみられ、比較的粗い。2は複合口縁の中型壺の口縁部破片である。複合口縁部はほぼ垂直に立ち上り、端部はやや尖形ぎみである。接合部内側は段が見られず、曲線的に仕上げられている。胎土は1と同様である。3は複合口縁の中型壺の口縁部破片である。複合口縁部はかなり外傾し、下端部が面取りされている。口縁端部は丸口縁である。縱方向に5本の沈線が連続し、その間隔は4mm程度である。胎土は1同様である。4は中型壺の肩部破片である。頸部の立ち上がりがあり、存在する頸部は内傾している。円形の貼付文が1個みられ、直径は8mmである。内面に輪積み底が残存し、その幅は2cm程度である。胎土は1と同様である。5は大型壺である。胴部中央から底部にかけての大型破片である。胴部中央に最大径を持つらしいが、底部にかけての器壁は断面観が直線的できれいな球胴にはならないようである。底部は突出している。胎土は1と同様で



第54図 19号住居址

ある。内面が2次焼成を受けたらしく、広範囲が黒色化している。6は球胴の小型壺の胴部から底部にかけての大型破片である。底部は突出する。胎土は1と同様である。7は中型壺の胴部下半から底部にかけての部分で、5個の破片が接合した破片である。胴部内面に横方向のハケメが見られる。底部は突出し、木葉底と思われる。胎土は1と同様。8は台付壺の完形個体である。口唇部にキザミ目を持つ。口縁部下半がやや直線的に立ち上がり、口縁部上半が内湾しながら外傾する。胴部最大径は胴部上半部にある。外面に右下りの斜方向のハケメが、内面に横方向のハケメが残存する。胎土は1と同様である。口径20.8cm、器高28.5cm、胴部最大径22.6cm、台部底径11cm、台部接合部径6.8cm、台部高5.8cm。9は壺の口縁部破片である。口唇にキザミ目のない平口縁である。胎土は1と同様である。10は壺の底部破片である。底部が突出する形態である。胎土は1と同様である。底径は11.4cmである。12は台付壺の台部で、台部だけを見るとほぼ完形の個体である。底部径10.4cm、台部高5.6cm、接合部



第55図 19号住居址出土土器 (1/4)

径 6.5 cm である。胎土は 1 と同様である。11 は広口壺のほぼ完形の個体である。口縁部はやや内湾しながら外傾し、端部が尖りぎみである。胴部最大径が胴部中央にある。底部は弱く突出する。器壁が薄く、4 mm 程度である。胎土が他の個体と違い粒子が非常に細粒であるが、岩片や鉱物粒子の内容は他とほぼ同じようである。

20号住居址

造構（第56図） 20号住居址は北地区の東部にあり、中世末の 1 号掘立柱建物址と重複している。周溝の一部が確認されたことと、弥生時代後期の土器片が集中的に出土したことから、住居址と認定した。周溝は南部が残存するのみで、幅 20~30 cm、深さ 10 cm 程度で、屈曲のない弧状の形態である。住穴や炉址は確認できなかった。

遺物出土状況（第56図） 土器小破片が直径 6 m 程度の範囲に分布していた。東側の斜面下方の土器片は、周溝底のレベルより低いレベルで出土したものもあり、かなり攪乱を受けているらしい。

出土土器（第57図） 1 は折り返し口縁の壺の口縁部小破片である。胎土に花崗岩様の白色岩片や泥岩様の黄色ないしは赤色の岩片、石英、長石、雲母などの鉱物粒子を多く含む。2 は折り返し口縁の壺の口縁部小破片である。胎土は 1 と同様である。3 は中型の壺の胴部小破片である。胴部下半に弱い屈曲のある個体らしい。内面に横方向のハケメが見られる。胎土に白色や赤色の岩片、石英、長石、雲母の他、輝石と思われる鉱物粒子を含む。4 はキザミ目のある壺の口縁部小破片である。胎土は 1 と同様である。5 は壺の口縁部小破片で、口唇にキザミ目を持つ。外面に縦方向のハケメが見られる。胎土は 1 と同様である。6 は小型の壺の底部小破片である。底部が突出する形態である。7 は壺の底部小破片である。底部外面中央がやや瘤む形態である。胎土は 3 と同様で輝石が見られる。8 は中型の壺の底部破片である。底部が突出する形態である。胎土は 1 と同様である。9 は台付壺の台部小破片である。胎土は 1 と同様である。

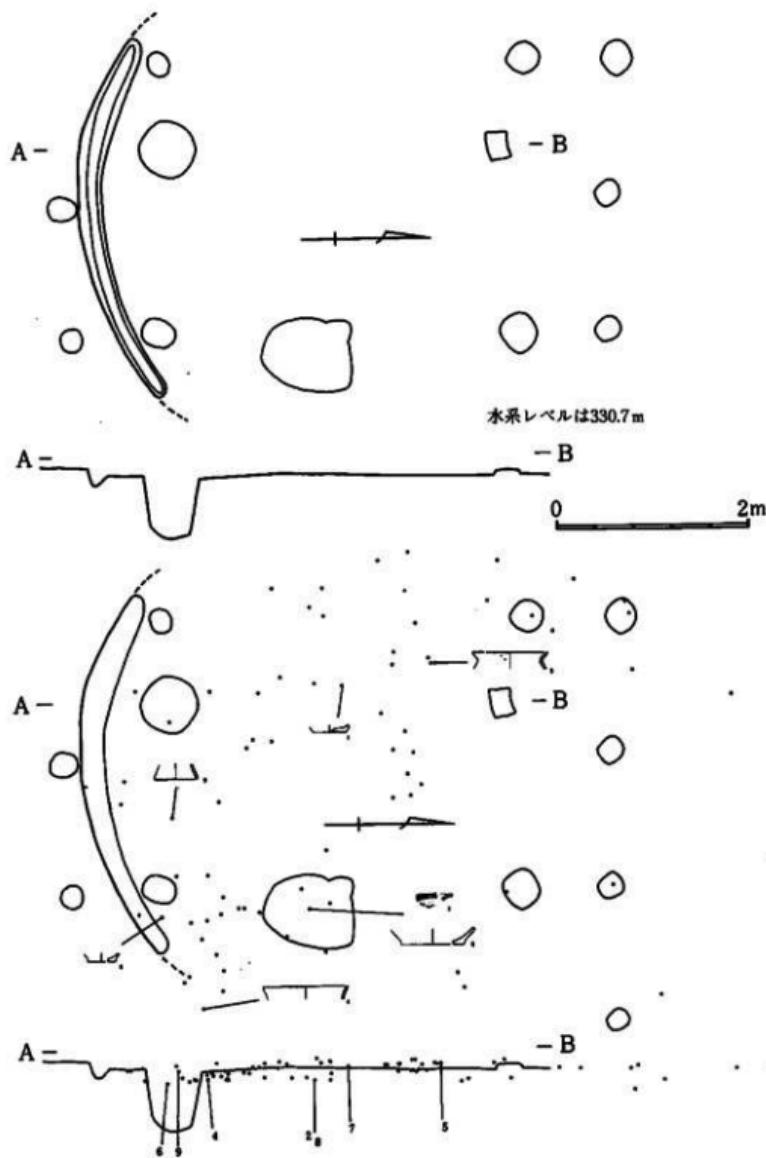
21号住居址

造構（第58図） 21号住居址は北地区の住居址群の中で最も西側の高所に位置する。北区の他の住居址が互いに近接し群集しているのに対し、その一群からかなり離れた場所にある。最も近い位置にある 13 号住居址から 45 m ほどの距離にある。

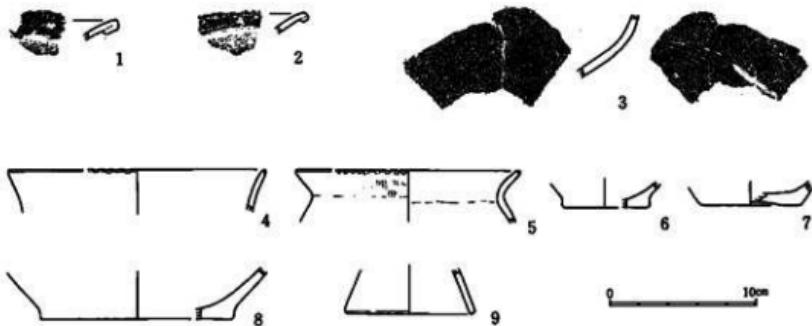
比較的保存状況の良い住居址で、壁が高い所では 60 cm ほどが残存しているが、住居址北部や東部の周溝の及ばない部分では、攪乱や土壤の自然移動などで壁を失っている。平面図では失われた部分を南部や西部の形態から復原して表示してある。住居址の形態は、胴張りぎみの小判形で、長軸 6.3 m、短軸 5.6 m である。西側柱穴でみた主軸の方向は W-36.5°-N である。

柱穴は 4 本確認できた。直径 40 cm 程度で、深さは 30~50 cm である。周溝は西壁と南壁の下に見られる。幅 20~30 cm、深さ 10~20 cm ほどである。

覆土の土層断面は、住居址の長軸と短軸方向に十字に設定した（第59図）。1 層は暗褐色軟質の土層で、造構の一部がこの土層に切られるかたちになっており、谷や地形の傾斜へ土壤が二次的に移動堆積したものと思われる。2 層は暗褐色土層で 1 層より明るく硬質。直径 1~3



第56図 20号住居址



第57図 20号住居址出土土器 (1/4)

cmほどの角礫が多くみられる。これより下位の覆土とくらべ礫が多く、住居址がかなり埋積された状態で上面を礫を含む土層が覆う時期があったと思われる。3層は黒褐色から暗褐色のやや軟質の土層。住居址外部に広がる土層であり、2層と同様に住居址埋積後に形成された土層である。4層は暗褐色土層で上層より硬質である。住居址内のみに分布する土層である。5層は覆土の最下部層の床面直上の土層で、黒褐色で木炭片を多量に含む。周溝内にも分布する土層であるが、柱穴内には分布しない。柱穴内には木炭の分布がみられなかった。したがって、5層は柱穴埋積後にその上を覆ったものと思われる。6層は住居址が掘り込んだ地山で、黄褐色で直径1~8cm程度の風化礫を多く含む。

床面上に広い範囲で木炭片の分布がみられた。特に東南部の柱穴周辺や住居址西半部に多く分布し、西半部中央にはある程度形態がわかる大型の木炭の集中分布がみられた。また、周溝内において、形態の明瞭な炭化材が多くみうけられる。

遺物出土状況（第59図） 住居址南東部の柱穴周辺に完形に近い土器や大型土器片が集中分布していた。土器片の下には木炭片を多量に含む5層があり、床面から5~10cmほど浮いた状態である。完形に近い小型壺が横なり、中型の壺が上半部のみが置かれたようになっていたり横になっていたり、壺の大型破片が横になっていたりした状態で、一平面にあたかも弧状に配置したように分布していた。大型土器片は、完形状態のものがその場で割れたではなく、あらかじめ分割されたように割られたものが置かれたようである。その部分がこの集中分布の中にあるかどうかについては、かなり細かく割れたものもあるため十分確認できなかった。

この他、完形に近い小型壺が北東柱穴の北側から、床面から20cmほど浮いた状態で出土した。南西柱穴の南側には、口縁部を欠くものの他の部分は完全な小型壺がほぼ床面上から出土した。周溝の南東端部では、ほぼ完形の小型壺が周溝内に落ち込んだ状態で出土した。しかし、周溝底部からやや浮いた状態である。その西側には中型壺の底部が周溝に落ち込んだ状態で、周溝底部からやや浮いて出土した。北西柱穴の北側には磨面のある大型礫（第85図1）が床面から5cmほど浮いた状態で出土した。平坦面を安定させた状態で、磨面を上に向けて出土した。

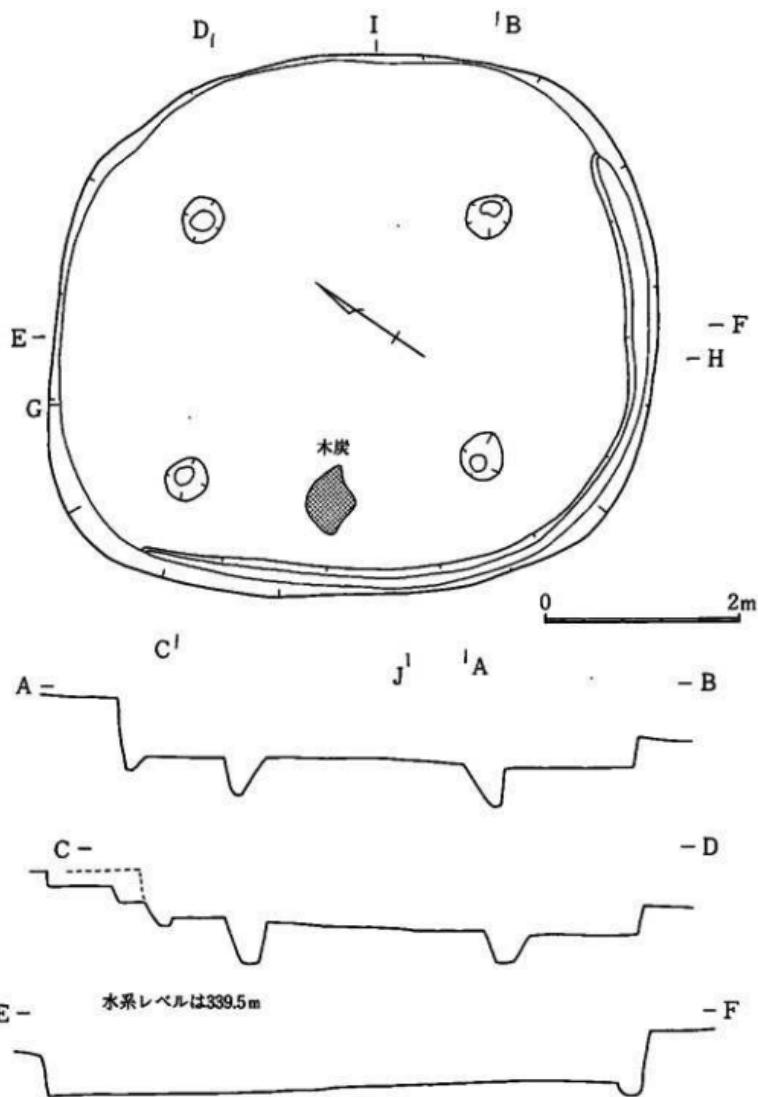
このように、完形に近い土器や大型土器片など多量に出土しているが、いずれも床面よりやや浮いており、木炭層より上位から出土しているようである。

出土土器（第60・61図） 1は中型壺の口縁部から頸部にかけての破片である。単純口縁であるが、折り返し部が剥落しているかもしれない。口縁直下2.5cmの所に2個の穴が貫通している。穴の直径は3mmで、両者の端間の距離が5mmである。頸部が比較的明瞭で、外傾しながら立ち上がり、口縁部がやや内湾ぎみに屈曲する。胎土は粗く、大粒の粒子が目立つ。花崗岩やその他の白色岩片、赤化した泥岩片、石英、長石、雲母といった鉱物粒子が多量に見られる。2は中型の壺の肩部から上方の部分である。口縁部はやや肥厚する単純口縁で、端部が斜めに面取りされている。頸部の立ち上がりがなく、頸部から強く内湾して口縁部が立ち上る。外面肩部付近に調整痕が残存し、斜方向の細かなハケメ調整の後、ナデ調整を行って表面を平滑に仕上げている。内面は横方向の粗いハケメ調整が全面に見られ、輪積み痕が残存する。胎土は1と同様である。3は壺の口縁部小破片である。折り返し口縁で、折り返し部の幅が狭く端部が丸い。胎土は1と同様である。4は折り返し口縁の壺の口縁部小破片である。折り返し部の幅が狭く、端部は平坦である。胎土は1と同様である。5は折り返し口縁の壺の口縁部小破片である。折り返し部の外側が平坦に仕上げられ、端部も面を成すがやや丸みを持つ。胎土中の岩片や鉱物粒子の大きさがやや小さいが、内容は1と同様である。

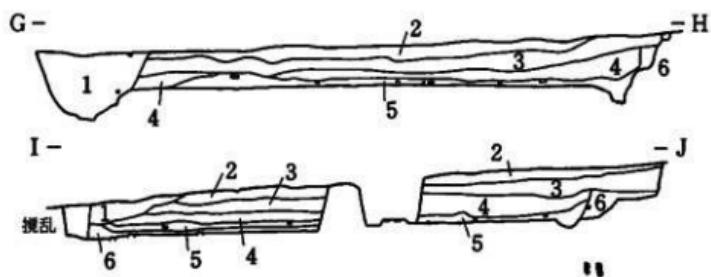
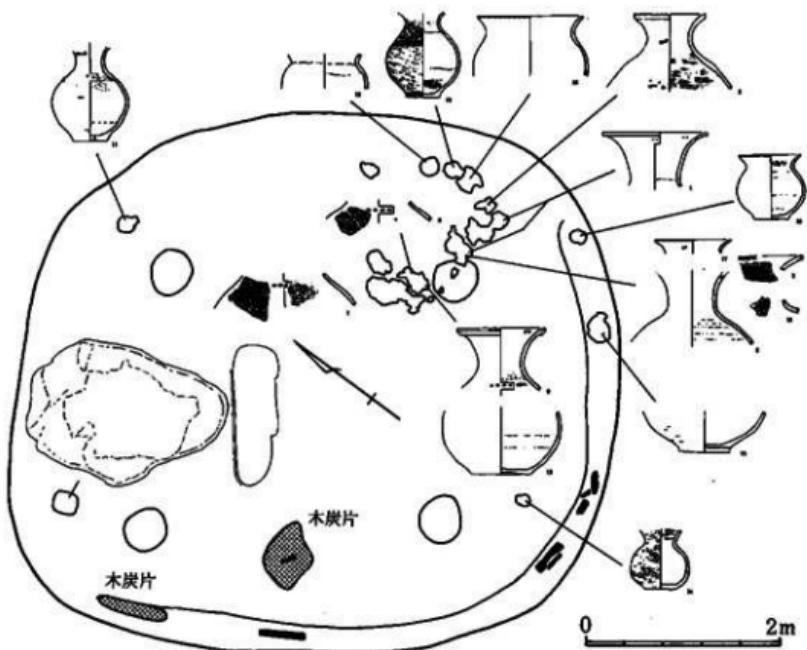
6は中型の壺の肩部から頸部にかけての部分である。頸部が垂直に近い角度で立ち上り、口縁部が外傾するようである。外面はナデ調整されている。内面は器壁が荒れているが、輪積み痕が残存している。胎土は1と同様である。7は壺の肩部小破片で、円形貼付文が3個見られる。貼付文の径は6mm前後で、それぞれの端部間の距離が6mm程度である。内面に横方向のハケメと輪積み痕と指頭痕が残存する。胎土は1と同様である。8は壺の肩部小破片で、円形貼付文4個が横列する。貼付文の径は8mm程度で、端部間の距離が7mm程度である。内面に横方向ハケメが若干残存する。胎土は1と同様である。

9は中型の壺の口縁部から肩部にかけての部分である。折り返し口縁で、折り返し部が厚く幅がある。折り返し部外側および端部は平坦に仕上げられ、端部に円形貼付文2個が残存する。折り返し部がほとんど剥落しているので何個によって構成されるかは不明である。貼付文の径は7mm程度で端部間の距離が9mmである。また、口縁部内面上も横列する2個の円形貼付文がみられる。口縁端部のものとは位置が違い7cmほどの距離がある。内面の貼付文の径は8mm程度で端部間の距離が5mmである。頸部の立ち上がりが不明瞭で肩部から口縁部が内湾、外傾しながら立ち上る。肩部には4個の円形貼付文が横列する。径が7mmで端部間の距離が8mm程度である。肩部内面に横方向ハケメ、輪積み痕、指頭痕が残存する。胎土中の岩片や鉱物粒子の大きさが小つぶであるが、内容は1と同様である。10は中型の壺の胴部から底部にかけての部分である。9と同一個体の可能性がある。胴部は球窓で、底部は若干突出する。底部径が大きく12.5cmである。胎土は1と同様である。

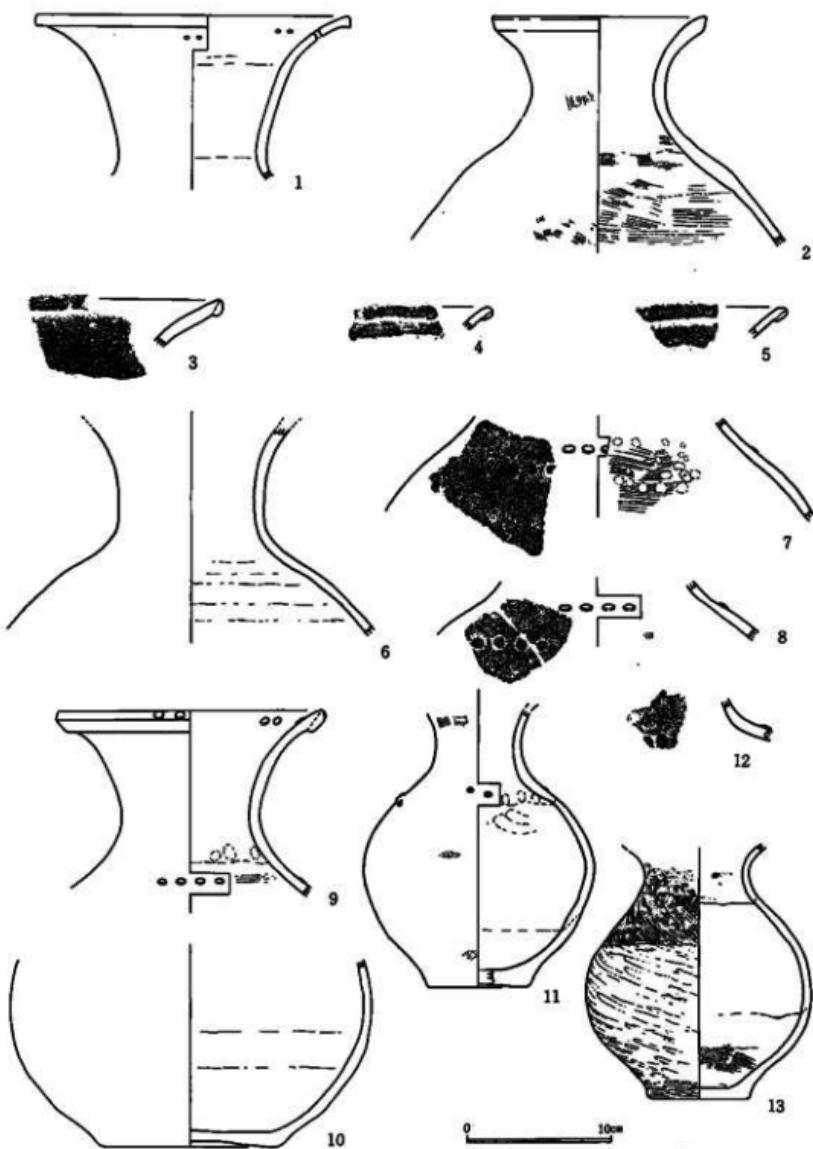
11は小型の壺で、3分の2ほどの個体である。口縁部を欠損する。頸部が内傾ぎみに立ち上り口縁部が開く。肩部に横列する2個を単位とする円形貼付文があり、全体で4単位四方に



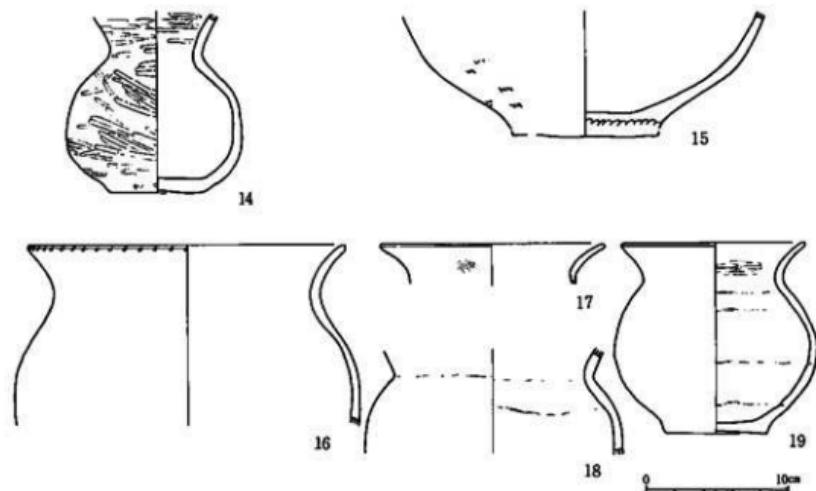
第58図 21号住居址 (1/60)



第59図 21号住居址遺物出土状況と土層断面図



第60図 21号住居址出土土器 (1/4)



第61図 21号住居址出土土器 (1/4)

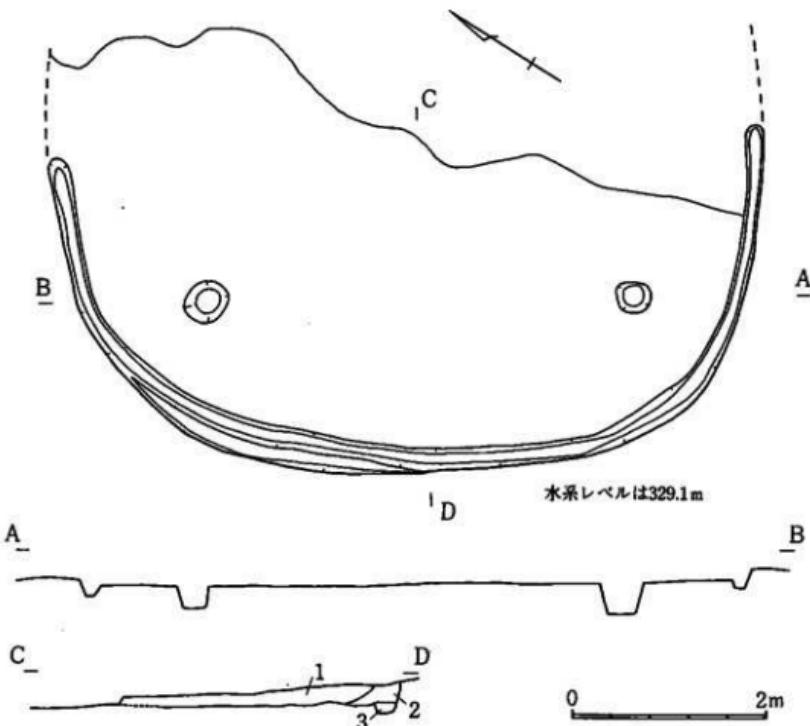
配置されている。貼付文の径が 5 mm 程度で、端部間の距離は 8 mm から 5 mm である。胴部は球洞で底部が突出する。底部径は 7 cm である。外面は若干の斜方向ハケメが残存するが大半がナデ調整され平滑に仕上げられている。内面肩部に指頭痕と輪積み痕が残存する。胎土に岩片や鉱物粒があり目立たない比較的緻密なものである。体部を縦方向に 2 分するように半分が黒色になっており、2 次焼成を受けた可能性がある。12は壺の肩部小破片で、円形貼付文が 2 個残存する。貼付文の径が 9 mm で、端部間の距離が 1 mm である。胎土は 1 と同様である。

13は小型の壺で、口縁部を欠くものの他の部分はほぼ完形である。頸部の立ち上りが不明瞭で、肩部から強く内湾して口縁部が立ち上る。胴部は球洞で、底部は強く突出する。頸部径が 7.5 cm、胴部径が 15.4 cm、底部径が 7 cm である。調整痕がかなり明瞭に残存する。外面では頸部で縦方向、肩部で右下りの斜方向の細かなハケメ調整がみられる。胴部では全体にやや右下りの斜方向にヘラ磨きがみられ、肩部のハケメ調整の後になされている。底部の突出部には横方向のヘラ磨きがみられる。内面では底部付近で横方向のハケメがみられるが他の部分はナデ調整されているようである。部分的に輪積み痕が残存する。胎土の岩片や鉱物粒子は比較的細かく、内容は 1 と同様である。

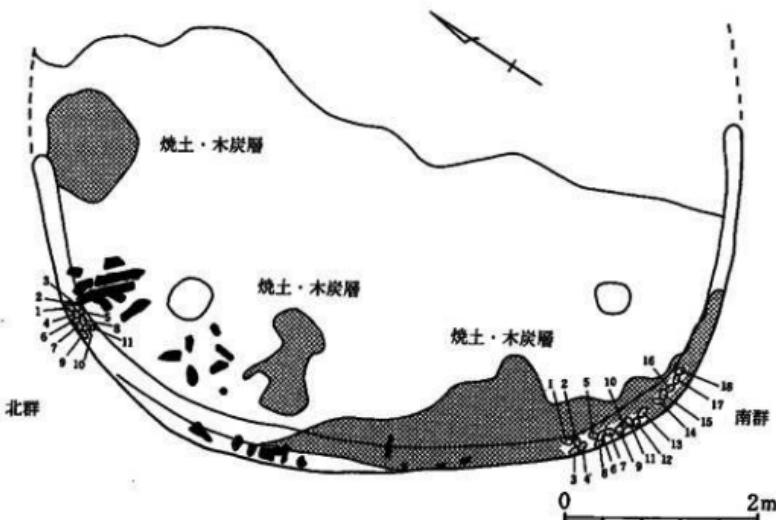
14は小型の壺で、口縁部を欠くものの他の部分は完形である。頸部の立ち上りがなく、肩部からくの字に頸部が屈曲し、直線的に外傾した口縁部が立ち上る。胴部では肩部付近と胴部下半の 2ヶ所で屈曲がみられる。底部は突出ぎみに作り出されている。頸部径が 6.4 cm、胴部径が 12.2 cm、底部径が 7 cm である。調整は、口縁部が横方向ヘラ磨き。頸部に若干、縦方向ハケメが残存する。胴部には右下りの斜方向ヘラ磨きがみられる。底部突出部に縦方向ハケメが残存する。以上が外面の調整であるが、内面は口縁部に横方向のヘラ磨きがみられ、肩部付近に

横方向のハケメがみられる。他の部分は全体にナゲ調整されているようである。胎土は1と同様である。15は中型の壺の胴部下半から底部にかけての部分である。底部は欠損しているが、突出した底部であったと思われる。胴部外面に縦方向のハケメが若干残存し、内面ではうっすらと横方向のハケメが残存する。胎土は1と同様である。

16は壺の口縁部から肩部にかけての部分である。口縁部は内湾しながら外傾し、端部にキザミ目を持つ。肩部が張る形態と思われる。胎土は1と同様である。17は壺の口縁部小破片で、口縁端部は丸く仕上げられている。胎土は1と同様である。18は壺の肩部である。頸部が比較的強く屈曲している。内面に輪積み痕が残存する。胎土は1と同様である。19は小型の壺でほぼ完全の個体である。口縁部は単純口縁で、直線的に外傾する。胴部は球胴で、底部は突出する。口径12.5cm、頸部径9.4cm、胴部径13.9cm、底部径7.3cm、器高13cm。外面は全体にミガキ調整されている。内面も全体的にミガキ調整されている。内面に部分的に輪積み痕が残存する。内外面とも全面的に赤色塗料の塗布がみられる。底部外面の塗布は磨耗のため不明である。



第62図 22号住居址 (1/80)



第63図 22号住居址焼土・木炭層と遺物出土状況

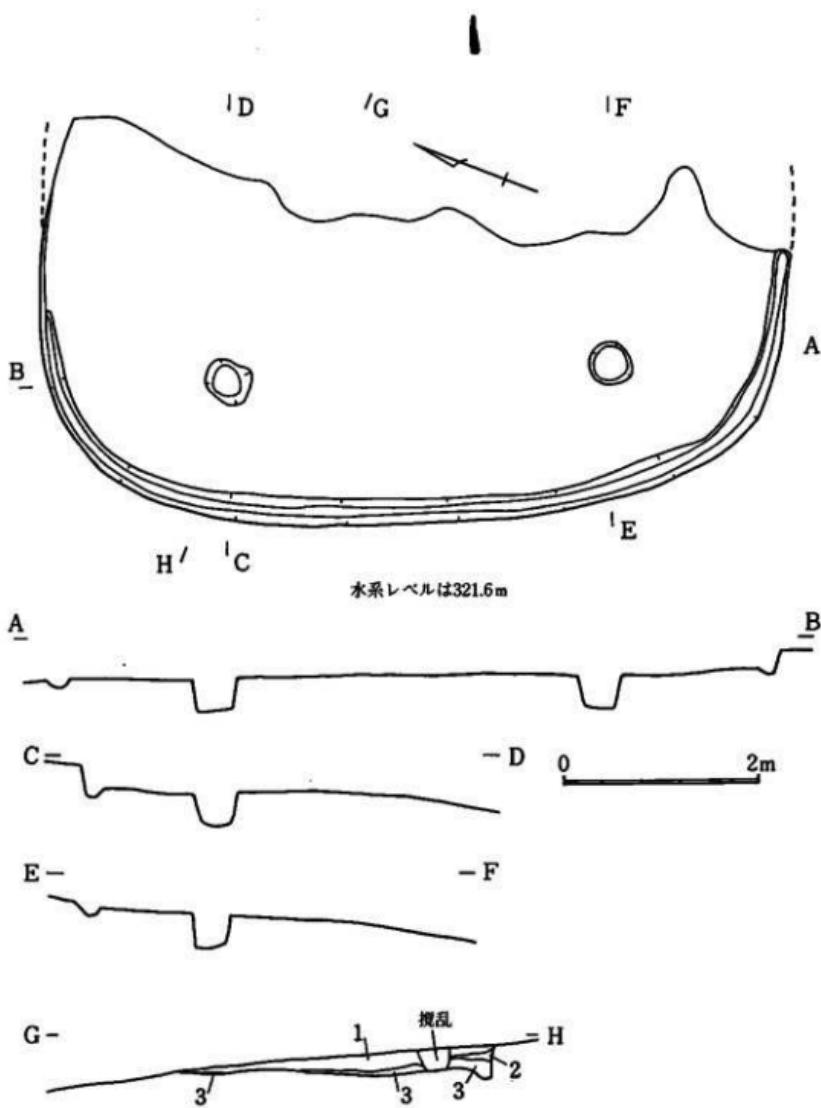
22号住居址

造構（第62・63図） 調査地域の最南端にある住居址群の中にある。住居址の東半分は耕作等で攪乱され消失している。残った西半分も、壁高が床面から高い所で20cmほどしかなく、覆土も大半が失われている。かろうじて残った覆土断面をみると、1層が暗褐色土層で、直径0.5~3cmほどの角礫を含み、やや硬質な土層である。2層が暗褐色土層で、1層に比べて軟質で礫をあまり含まず、木炭片や焼土粒を多く含む土層である。3層が周溝内にみられる土層で暗赤色焼土層で木炭片も含む。壁直下や壁に近い床面上に木炭片や焼土層が広く分布している。

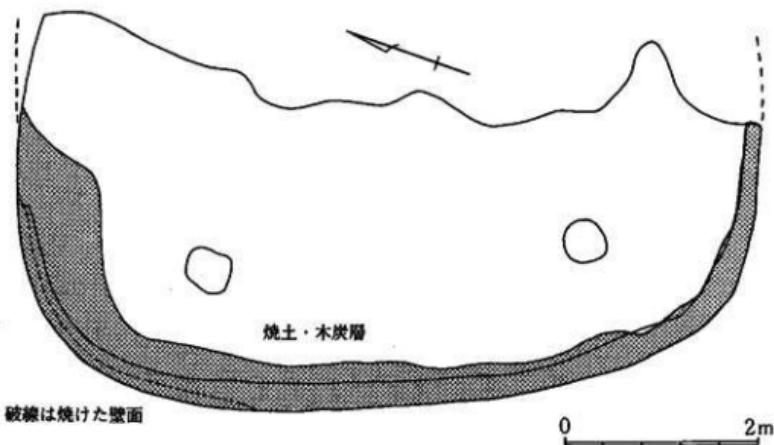
周溝は深さ10cm前後で、その形態からして住居址は胴張りの小判形であったと思われる。柱穴は2個が残存する。直径30~40cm、深さ25~35cmほどである。残存部分から推定して、住居址の長軸が7.5mはあったと思われる。残存した柱穴から主軸方向をみると、W-32.5°-Nである。

遺物出土状況（第63図） 棒状の木炭片が壁の近くの床面上や周溝内より多く出土した。あたかも住居址の中心に向って放射状に並んでいるように見える部分もあり、住居址屋根材のタル木が崩壊した状態のように見える。焼土・木炭層は周溝内を満していた。その周溝の底部に2ヵ所に分かれて石縁と思われる小型礫の群集が発見された。南群18個（P104第87図）、北群11個（P105第88図）である。いずれも、木炭層や焼土層に覆われている。

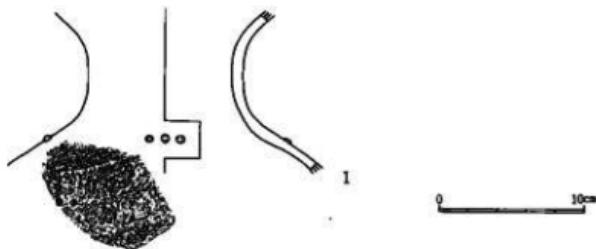
遺物 遺物は非常に少く、先述した29個の礫の外は、ビニール袋1袋に満たない弥生時代後期の土器片のみであった。土器は小片ばかりで図示はできなかった。礫については、石器の項で一括して述べる。



第64図 23号住居址



第65図 23号住居址焼土・木炭層



第66図 23号住居址出土土器 (1/4)

23号住居址

遺構（第64・65図） 発掘範囲の最南端に位置する住居址で、22号住居址に隣接する。住居址の東半分が耕作等で搅乱され残存しない。残存する部分の覆土の土層は、1層が暗褐色土層で直径1～3cm大の角砾を多く含む。2層が暗赤色焼土層で、直径1～2cm大の焼土粒子を多量に含む。3層が1層より暗い暗褐色土層で、焼土粒子や木炭片を多く含み、周溝部でそれが特に多く含まれる。

周溝は住居址北部で存在しないようであるが、他の部分は明瞭である。幅20cm程度、深さ10cm程度である。周溝のありかたから住居址の形態を推定すると、胴張りぎみの小判形である。住居址の長軸は7.7mはあったと思われる。柱穴は2個が残存し、直径50cm程度、深さ30cm程度である。この柱穴から主軸の方向を推定すると、W-23.5°-Nである。

周溝上や周溝に接した床面上に焼土層（2層）が広く分布し、北西コーナー部分ではその直下の床面や周溝壁面が焼けて赤色化し硬化していた。周溝内では底面は焼けておらず、住居址

壁面と床面側の周溝壁とが焼けていた。

出土土器（第66図） 出土した土器は、ビニール袋1袋にも満たない量である。図示できな
いほどの小破片が多いが、大型破片1点がある。第66図1は中型の壺の頸部から肩部にかけて
の部分である。頸部の立ち上りが明瞭である。肩部には結節縄文が横位に施され、その上に
3個の粒状の貼付文が付けられている。貼付文の径は5mm前後で、5mm間隔で付けられている。
胎土は花崗岩らしい白色岩片や赤色や黄色の泥岩らしい岩片、石英、長石、雲母、輝石といっ
た鉱物粒子を多く含む。

24号住居址

遺構（第67図） 南北の浅谷にはさまれた小尾根上に分布する住居址群のほぼ中央に位置す
る。住居址南東部が耕作等で攪乱されて消失している。住居址西半部に周溝がめぐり、北東コ
ーナーには周溝が確認できなかった。周溝は北側が狭く、南側に行くほど広くなっている。最
も広い所で40cmほどある。深さは10cm前後である。

柱穴は4個確認できたが、北部に柱穴以外の小ビット3個が見られた。断面図C-D線にか
かった穴が柱穴で、その両側の2個の小ビットは非常に浅い。住居址北端の小ビットは深さが
40cmほどあるが、その位置から柱穴ではない。柱穴は径が20~40cm、深さ25~35cmで、周溝
や壁の近くに設定されている。住居址西部のビットはこの住居址よりも古いものである。

住居址中央の北よりの位置に、直径50cmほどの範囲で焼土の分布がみられた。その位置から
炉址と思われる。

住居址の長軸が4.6mで、短軸は3.5mほどはあったものと推定される。西側の柱穴によ
つて主軸方向をみると、W-34°-Nである。

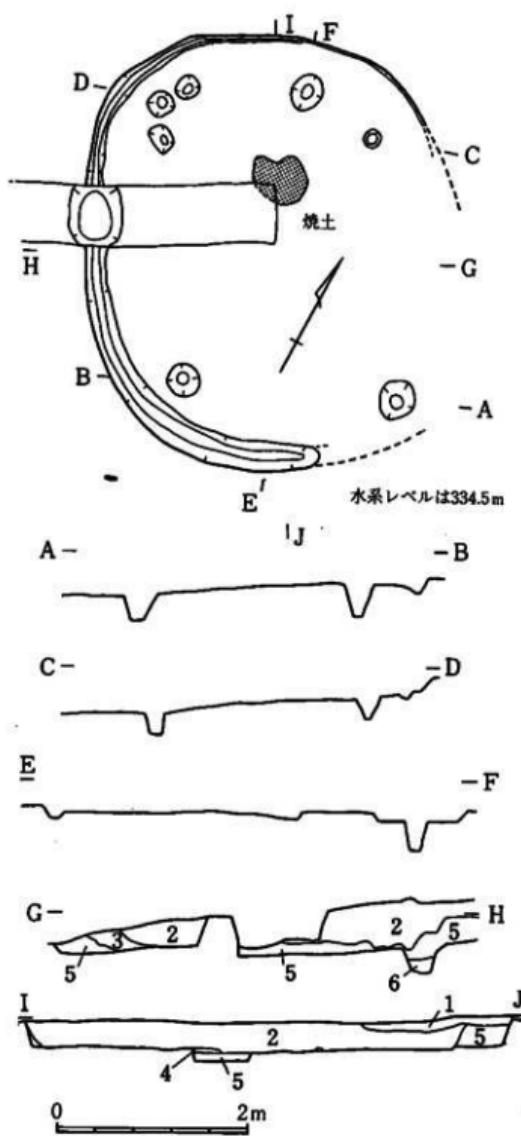
土層断面をみると、1層が暗褐色土層で、直径0.5~2cmほどの角礫をやや多く含む。2層が
黒褐色土層で住居址覆土である。3層が暗褐色土層で1層より明るく、礫が少ない。2層同様
住居址覆土である。4層は炉址の焼土層である。5層は住居址が掘り込んだ土層で、暗黃
褐色土層で、黄褐色や緑色の風化小礫を多く含む。6層は5層より下位に掘り込まれた古
いビットの覆土で、暗黃褐色土層で直径3~10cmほどの角礫を多く含む。

出土土器（第68図） 出土土器は非常に少なく、ビニール袋1袋程度である。いずれも覆
土中より出土した。第68図1は中型の壺の口縁部である。折り返し口縁で端部は平坦に仕上
げられている。外面の一部に縱方向のハケメが若干残存する。胎土には白色岩片や泥岩岩片、
石英、長石、雲母、輝石といった鉱物粒子が多く入る。2は折り返し口縁の壺の小破片である。
胎土は1と同様である。3は中型壺の底部で、底部が若干突出する形態である。底部径が11.8
cmである。胎土は1と同様である。4は小型の壺で、口縁部を欠損するがほぼ全体がそろつ
た個体である。頸部の立ち上りが明瞭で、胴部は球胴、底部は突出する。胎土は1と同様であ
る。覆土中に数十cm浮いて出土した。

5は小型の壺の口縁部破片である。単純口縁で端部は尖形である。胎土は1と同様である。

6は大型の壺の口縁部破片である。単純口縁で端部は尖形である。胎土は1と同様である。

7はおそらく小型の壺と思われる底部小破片である。胎土が他と異り、大粒の岩片や鉱物粒



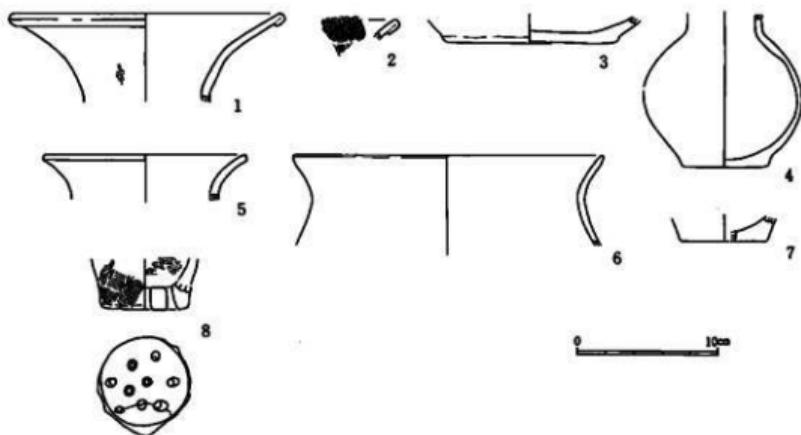
第67図 24号住居址 (1/60)

子が含まれていない。非常に微粒の白色鉱物が多く含まれている。8は、本遺跡唯一の瓶の底部である。平坦な底部に9個の孔が貫通している。焼成前の穿孔である。外面に縦方向、内面に横方向のハケメがみられる。胎土は1と同様である。

25号住居址

遺構 (第69図) 北地区の住居址群のうち最も東で、傾斜の低い位置に位置している。耕作で覆土の半分は搅乱され、周溝と柱穴の一部がかろうじて確認されたのみの住居址である。

周溝は南端のみが確認でき、幅25cm前後、深さ5cm程度である。柱穴は、A-B線とC-D線の断面図にかかった3個が確認できた。直径20~35cm、深さ20cm程度である。柱穴の他に、E-F線の断面にみるような2個のビットが確認できた。直径40cm、深さ25cmのものと、直径25cm、深さ15cmのものである。南半の2個の柱穴間のちょうど中央に位置し、住居址の構造と何らかの関係が考えられるが、性格不明である。柱穴や周溝の位置関係からして、長軸が6mほどの小型の住居址であった可能性がある。ま



第68図 24号住居址出土土器 (1/4)

た、周溝からみて、小判形の形態であった可能がある。遺物の出土はない。

1号土坑

遺構 (第70図) 北地区の住居址群のほぼ中央、13・18・19号住居址に近接して土坑がまとめて分布している。そのうち最も北に位置する土坑である。長軸が南西—北東方向を向き、長さ 2.9 m、短軸が 1.4 m である。深さは 10cm 程度と非常に浅い。形態は不整形であるが、比較的多くの土器を出土したため土坑と認定した。

出土土器 (第71図) 土器はビニール袋 1 袋分程度が出土した。そのうち図化できたのが第70図 1 の、台付甕の台部である。台部の器壁はやや外湾しながら開く形態である。端部は角に仕上げられている。内面接合部に指頭痕がみられる。胎土には、白色、黒色の岩片や泥岩岩片、石英、長石、雲母、輝石といった鉱物粒子が多く含まれる。

2号土坑

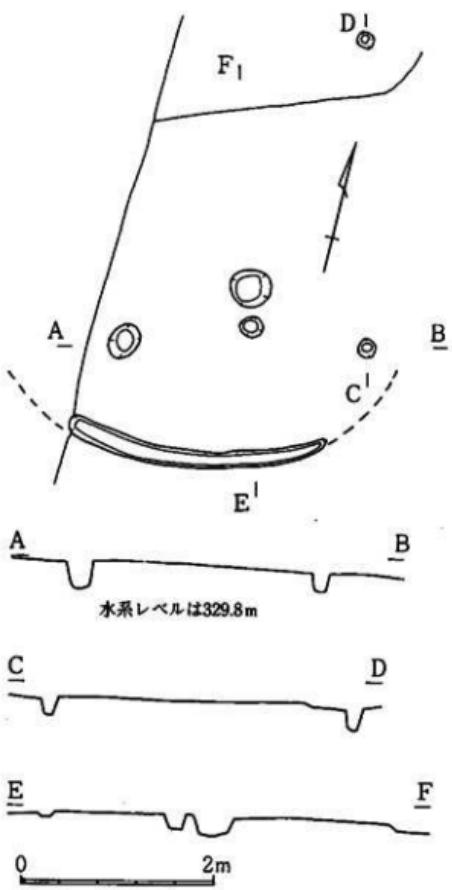
遺構 (第69図) 1号土坑の東南方約 7 m の所に位置する。直径 1.5 m ほどの不整円形を呈し、壁面はロート状に開き底面は平坦である。深さは 50cm である。

出土土器 (第72図) ビニール袋 1 袋分程度の土器片が出土した。図化できたのが第72図 1 の台付甕の台部である。非常に低い台部で、器壁は直線的に開く形態である。端部は角に仕上げられている。内面接合部が広く平坦である。胎土には泥岩岩片が目立ち、他の岩片、鉱物粒子がほとんどみられない特異な胎土である。

3号土坑

遺構 (第73図) 北地区のほぼ中央で、13号住居址の南方約 7 m の所に位置する。長軸が 2.7 m、短軸が 1.2 m、深さ 40cm ほどで、長軸の方向が南東—北西である。土坑の中央を、長軸に直行する方向で煙管の搅乱溝が横切っている。形態は長階円形で底部は丸底である。

土層断面をみると、1 層が暗褐色土層で、直径 2 ~ 30cm の亜円碟が多量に入り、土器も非常



第69図 25号住居址 (1/60)

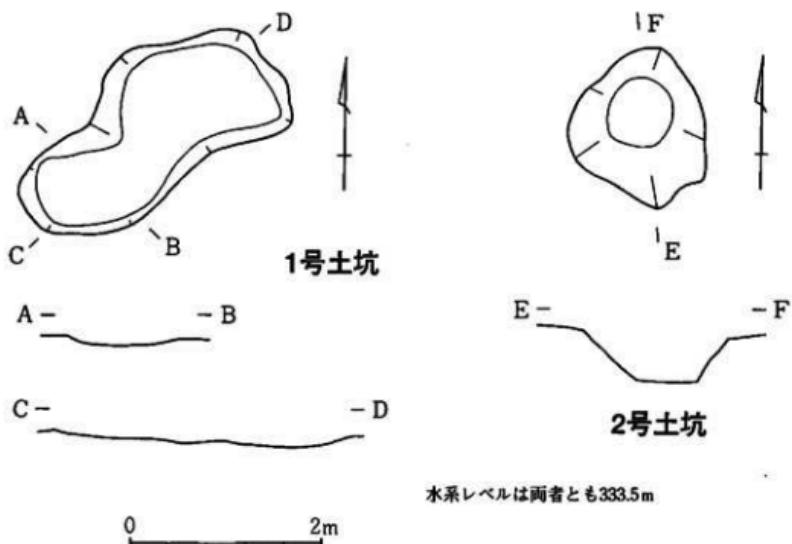
焼土や木炭片とともに土坑内に入れられた可能性がある。

出土土器 (第74図) 1は中型の壺の口縁部から頸部である。おそらく頸部が垂直に近い角度で立ち上がり、口縁部が内湾しながら強く外傾する。口縁部の端部に接する内面が若干の平坦面を形成するほどに反り返る。その口縁部内面に、疑似繩文と思われる文様が一周する。幅5mmほどの文様の内側に円形貼付文が付けられている。直径4mm程度で、4mm程度の間隔で2~3個が付けられている。1単位は欠落するがおそらく4単位あったものと思われる。口縁端部から約2cmほど内側に2個の穴が貫通している。直径3mm程度で、1.2cm間隔と8mm間隔と

に多く出土した。混入する礫の大半は赤化し、焼けているものと思われる。2層が暗褐色土層で、1層の礫を含まない部分である。3層が黒灰色土層で、長さ1~3cmほどの木炭片や、焼土粒子が多く入る。4層が暗赤色焼土層である。5層は土坑が掘り込まれた土層で、暗黄褐色土層で直径1~2cmほどの風化礫が多く含まれる。6層は5層の上に重る自然層で、黒褐色土層で細礫が多く入る。

遺物出土状況 (第73図) 多量の土器が出土した。まず、確認面の段階で土坑中央に多量の礫が土坑の主軸に沿って出土した。礫と混合するかたちで土器片も多く出土した。この礫と土器片を取り上げると、その下位から大型土器片を数きつめたように多量に出土した。主に中型の壺の破片である。土器は土坑中央の礫の下にまとまっていて、北西端にも何個体かの大型土器片の分布がみられる。

下位の土器群は、土坑の底面から10cm程度浮いた状態で出土している。また、焼土と土器、礫とが混在しているが、土坑底面は焼けた状態ではなかった。土器や礫は



第70図 1・2号土坑 (1/60)

がある。2単位が残存する。円形貼付文の位置からズレた位置にある。口縁は折り返し口縁である。端部は角に仕上げられているが、その下方にキザミ目が一周する。折り返し部外面に縦方向のハケメが残存する。胎土には白色岩片や泥岩岩片、石英、長石、雲母といった鉱物粒子が多くみられる。2は中型の壺の口縁部から胴部上半にかけての部分である。口縁部は折り返し口縁で、端部は丸い。頸部の立ち上がりが不明瞭である。胴部は球胴と思われる。胴部内面に輪積み痕が残存する。胎土には白色岩片や泥岩岩片、片岩のような変成岩と思われる岩片、石英、長石、雲母、輝石といった鉱物粒子が多く含まれる。3は壺の口縁部破片で、折り返し部が欠落したものと思われる。胎土が非常に緻密で、小粒の岩片や鉱物粒子が若干みられる程度である。4は折り返し口縁の壺の口縁部小破片である。5は有段口縁の壺の口縁部小破片である。口縁部直下から段部にかけての外面に、3本の棒状浮文が縦方向に施文されている。胎土は1と同様である。



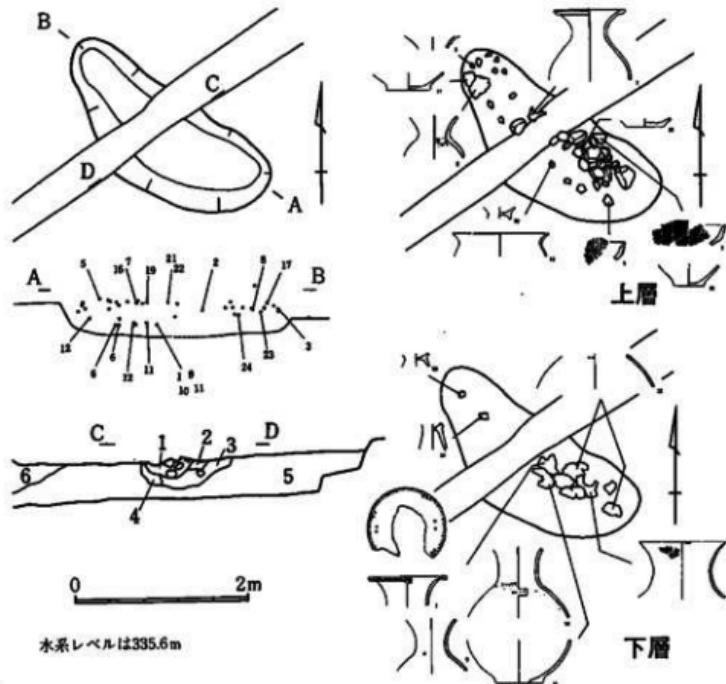
第71図 1号土坑出土土器 (1/4)



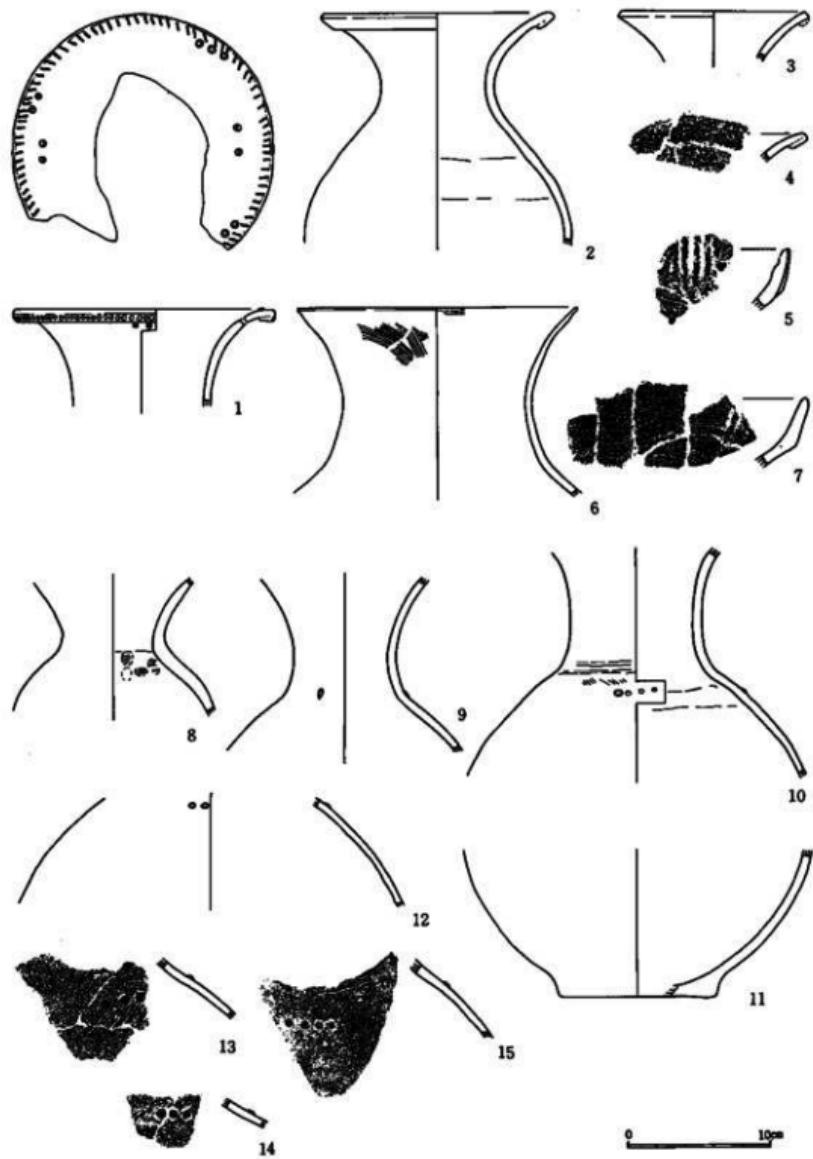
第72図 2号土坑出土土器 (1/4)

6は中型の壺の口縁部から肩部にかけての部分である。単純口縁であるが、折り返し口縁の折り返し部が欠落したもの可能性がある。頸部が非常に太く、立ち上がりが不明瞭である。胎土が3同様に緻密で、泥岩岩片などが含まれるもの非常に少ない。7是有段口縁の壺の口縁部破片である。棒状浮文が1本残存する。胎土は1と同様である。8は小型の壺の頸部から肩部にかけての部分である。頸部の立ち上がりがなく、頸部でくの字に屈曲して口縁部が内湾しながら外傾する。肩部内面に指頭痕と横方向ハケメが残存する。胎土は1と同様である。9は中型の壺の頸部から肩部にかけての部分である。頸部が内湾しながら立ち上がる。肩部と頸部の境界部に、長さ9mm、幅4mmの短い棒状の貼付文が2個残存する。おそらく、1個ずつで4単位あったものと思われる。胎土は1と同様である。

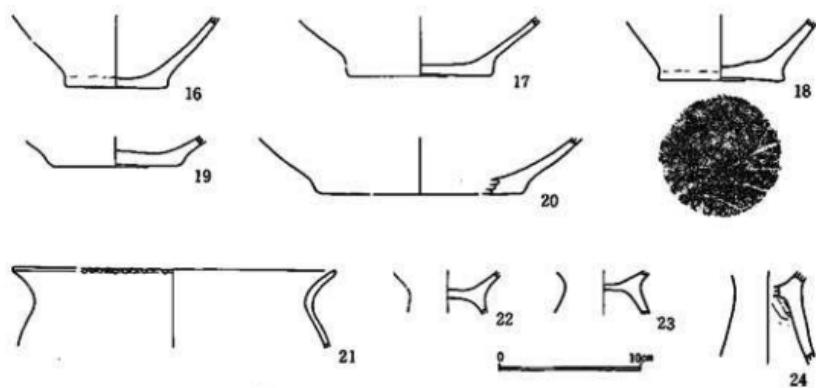
10は中型の壺の頸部から肩部にかけての部分である。頸部の立ち上がりが明瞭で長い。肩部の外面に4個の円形貼付文が横列する。また、斜方向のハケメ状の調整痕が若干残存する。胎土は1と同様である。11は中型の壺の胴部下半から底部にかけての部分で、10と同一個体の可能性がある。底部が突出する形態である。底部中央に外側からの加撃痕がみうけられる。胎土は1と同様である。12は中型壺の肩部破片である。円形の貼付文が2個残存する。胎土は3と同様な緻密なもので、泥岩の小岩片が多量にみられる。



第73図 3号土坑 (1/60)



第74図 3号土坑出土土器 (1/4)



第75図 3号土坑出土土器 (1/4)

13は壺の肩部破片で、羽状縄文が明瞭に残存する。3個の円形貼付文が横列する。直径7mm。6mmと3mmの間隔である。胎土は1と同様である。14は壺の肩部小破片で、羽状縄文がみられる。3個の円形貼付文がみられる。直径6mmで2mm間隔で貼付されている。胎土は1と同様であるが、片岩と思われる変成岩の岩片もみられる。15は壺の肩部破片で、羽状にハケメ状工具で文様が付けられている。その上に4個の円形貼付文が横列する。直径6mmで4mm間隔で付けられている。頸部直下には細い沈線が3本以上一周するものと思われる。胎土は1と同様である。

16は壺の底部である。底部が非常に強く突出し、内面に明瞭な平坦面がなく丸い。胎土が特異で非常に緻密であるが、3などが泥質であるのに対し、硬質な感じの胎土である。非常に微粒の鉱物粒子を多く含み、白色岩片や泥岩岩片、石英、長石、雲母などの鉱物粒子を含むが目立たない。底径は7.3cmである。17は壺の底部である。底部が強く突出し、外面に木葉痕がみられる。内面には広く平坦面がみられる。胎土は1と同様である。底径は10.3cmである。18は壺の底部である。底部が強く突出し、端部がやや外側に張り出す。外面に木葉痕が残存する。胎土は1と同様である。底径は8.6cmである。19は壺の底部である。底部の突出は弱い。内面に広く平坦面がある。胎土は1と同様である。20は壺の底部である。底部は若干突出する。胎土は1と同様である。

21は壺の口縁部から肩部にかけての小破片である。口縁端部に深いキザミ目がみられる。胎土は1と同様である。22は台付壺の台部の破片である。接合部に内外面とも若干の平坦面がみられる。接合部の径は5.4cmである。胎土は1と同様である。23は台付壺の台部である。接合部の内面は丸底であるが、外面に平坦面がある。胎土は1と同様である。接合部径が5.3cmである。

24は本遺跡では希少な高壺の台部である。壺部の底部が尖りぎみの丸底であり、口縁部がラッパ状に開くような形態である可能性がある。脚部は細身で強く開かない形態である。脚部内面の接合部付近に指頭痕がみられる。胎土は1と同様である。接合部径が4.9cmである。

埋没渓谷

人工的な造構ではないが、住居址の立地を規制し、また土器等の分布もみられるため、造構に準じてここで記載することとした。南北2つの埋没渓谷がみられた（第76図）。

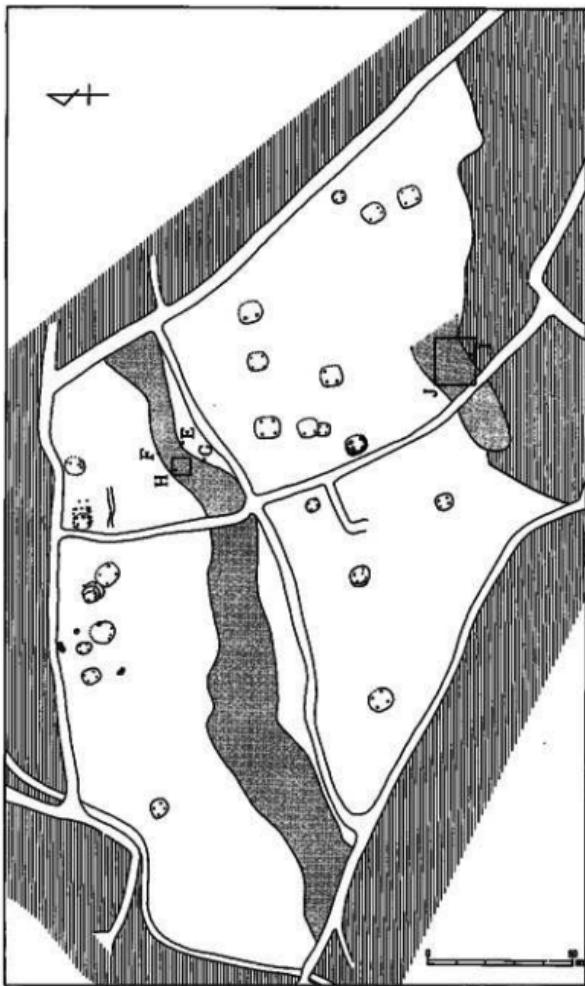
北側埋没渓谷（第77・78図） 調査区北端の竹の沢の山地との接点付近から出現し、調査区を東西に横切っていて、調査地域を南北に二分している大きな渓谷である。山地に近い部分では浅く幅広いが、徐々に深さを増して東部では非常に深く幅も狭くなっている。現在は水路としてはまったく機能していない。

北側埋没渓谷の東半部で、渓谷の幅が狭まり深さを増し初める部分で2ヵ所を深掘りし、土層断面を観察した。最も東に設定した断面がE-F線である。第75図に断面の設定位置、第76図に断面図を示した。1層が暗褐色土層で小礫を少量含み、粘性が他の土層に比べて弱く砂質である。図中の1層下部の左側にラミナ状に薄い砂層や底部に厚い砂層がみられ、水路の存在が考えられる。2層は黒褐色土層で礫をほとんど含まず、粘性が強い土層である。3層は黒色土層で礫をほとんど含まず、粘性が強い土層で木炭片を少量含む。4層は黒褐色土層で大型の礫を多量に含む。4層上部で図中に破線で示した部位に黄色の砂質土が入り、礫が並ぶようにならんで集中している。5層は黒褐色土層で大型の礫を含むが直径5mm程度の小礫が目立つ。5層上部で図中に破線で示した部位に砂を多く含む。6層は暗褐色土層で大小の礫を多量に含み、非常に軟質である。やはり上部に黄色の砂質部分を持つ。7層は黄褐色土層の地山で、礫を多量に含む比較的砂質で軟質な土層である。以上の土層は大きく3つの段階にまとめられる。まず、4~6層の大小の礫を多量に含み上部に砂層や砂質土がみられる土層で、礫を流す土砂流とその後の水路の安定といった過程をくり返した不安定な時期と考えられる。この段階にこの渓谷が形成された可能性がある。この時期に統いて2・3層の時期となる。砂層の形成や礫の流れ出しが見られず、黒色土層がゆったりと形成される安定した時期と思われる。その後、1層にみられるように礫を出し出すような土砂流のようなものはなかったと思われるが、一定量の出水により水路が形成され、それがゆったりと埋没していった過程が推定される。なお、1層の形成にあたって、2・3層が削られて一部が消失している可能性が考えられる。

この断面の西側約7mほど離れた場所に、H-G線の断面を接続した。この断面の北側には土器片が集中出土した地点がかかっている。第77図に断面図を示した。最上部8層は暗褐色土層で小礫がみられるがそれほど多く含まれず、下部にラミナ状に砂層がみられる。9層は黒色土層で大小の礫を少量含む。土器の集中するのはこの土層と思われる。10層は暗褐色土層で大小の礫を多量に含み上部に砂質を持つ。この土層をE-F線の土層と対比すると、8層が1層に、9層が2・3層に、10層が4~6層に対応できると思われる。したがって、土器の集中分布は安定した時期に形成されたものと思われる。

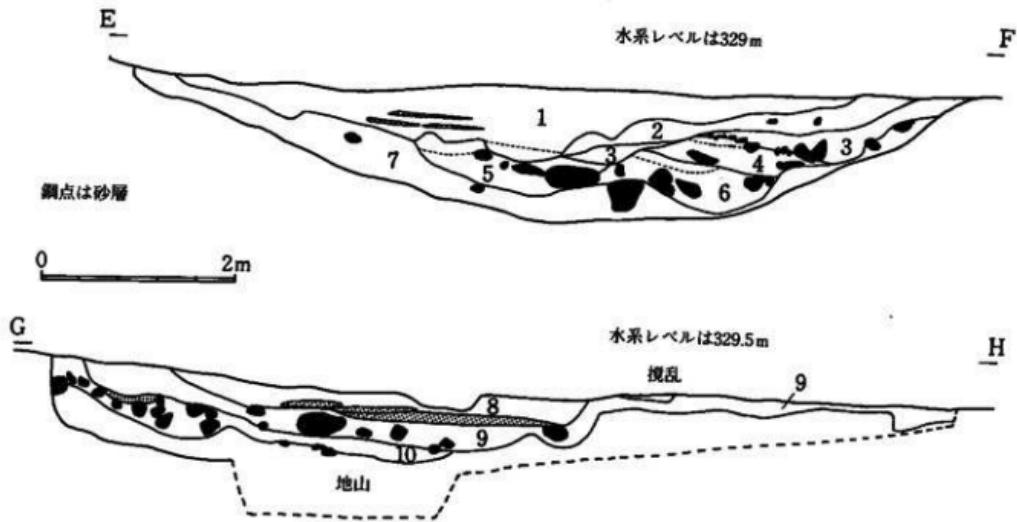
土器出土状況（第78図） 北側埋没渓谷では、特に西半分の深い部分では土器片がバラバラと少量分布していて、特に集中したり、多量に出たり、完形土器や大型土器片があるという状況ではなかった。

一方、東半部では土器が集中分布する地点が確認された。第76図でG-H線の断面がかかる

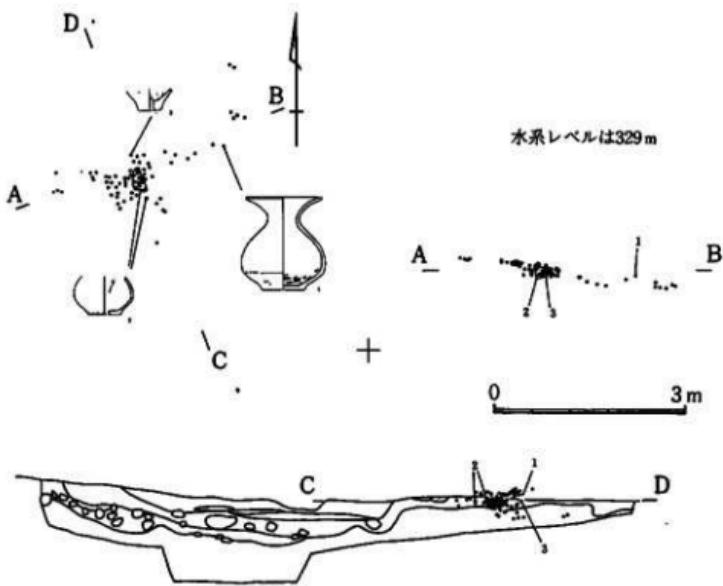


第76図 埋没渓谷と土器出土地域 (1/2000)

四角で囲んだ地域内である。第76図の四角の範囲は、第78図の十印で囲まれた範囲と一致する。谷の底部からはずれた、北側のゆるやかな傾斜面上にあり、長軸約3m、幅約1mの範囲で、特にその南西部の直径1mほどの範囲に多く集中していた。出土層位は、G-H線の断面の9層中で、疊の流出や砂層の形成がなく、土壤がゆったりと形成された安定した時期である。土器片は小破片が多いが、接合するものやかなり大きな破片もみられる。注目すべき点は、これ



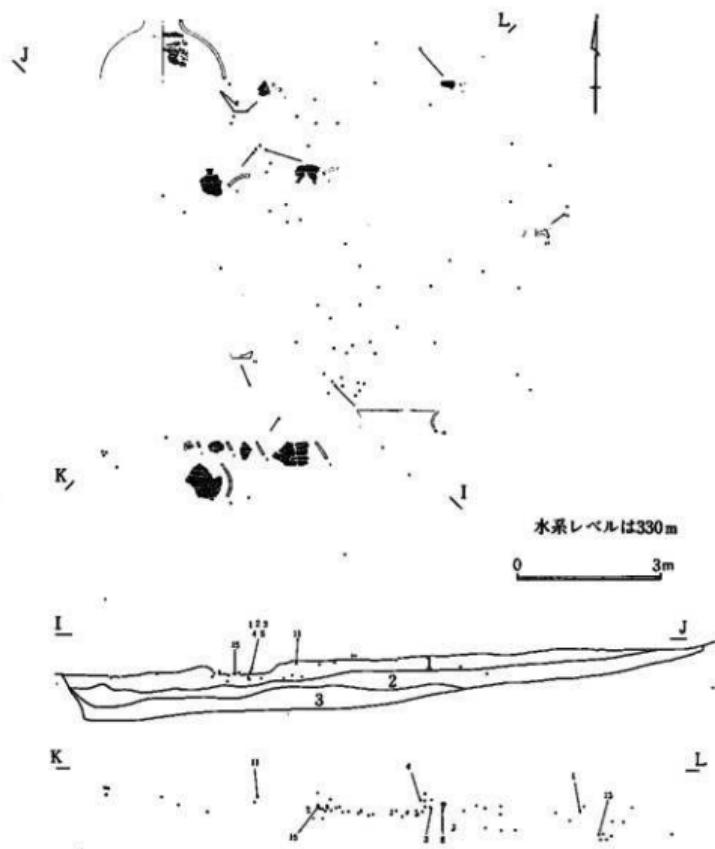
第77図 北側埋没渓谷セクション図



第78図 北側埋没浅谷土器出土状況 (1/90)

らの土器で時期のわかるものは、住居址や土坑内から出土した土器よりも1段階古いものであると思われる点である。今回発掘された集落形成以前に何らかの目的で形成されたものである可能性がある。

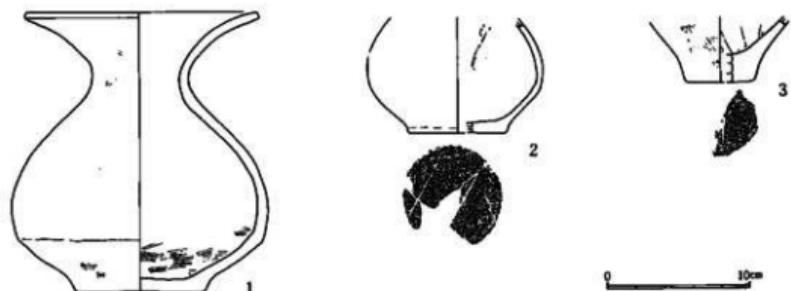
出土土器（第80図） 土器集中出土地点の土器を示した。1は小型の壺である。頸部の立ち上がりが不明瞭で、頸部が強く内湾し、口縁部が内湾しながら強く外傾する。口縁部は単純口縁で角に仕上げられている。肩部は下半部に屈曲がある下ぶくれの形態である。底部は突出する。胎土が特異で、粒のそろった細かな黒色粒子が多く入り、白色鉱物や岩片はほとんどみられない。器高が19cm、推定口径16.5cm、胴部最大径17.5cm、底部径9cmである。2は小型の壺の肩部から底部にかけてある。胴部下半に屈曲がある下ぶくれの形態である。底部は突出し、外面に木葉痕がみられる。胎土に黒色粒子が入るが1ほど多くなく、石英、長石、雲母、輝石といった鉱物の微粒子が含まれる。3は壺の底部破片である。底径が非常に小さいうえに厚く高く作り出されている。内面にヘラ状工具による横方向の調整痕がみられる。胎土に黒色粒子の他、白色岩片、石英、長石、雲母、輝石といった鉱物粒子が含まれる。



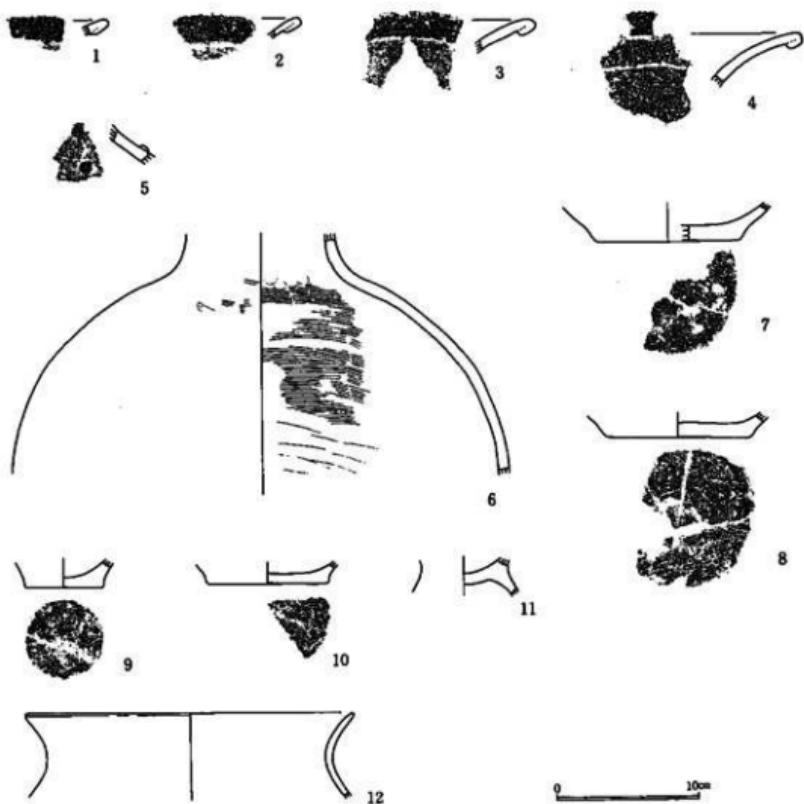
第79図 南側埋没浅谷土器出土状況 (1/120)

南側埋没浅谷（第79図） 調査地域の南辺部にある。谷頭部が弧状で広い。谷の北辺は比高2mほどの崖線を成すが、南辺は不明瞭である。また、東側は傾斜面に開いて谷そのものが不明瞭となっている。谷底部は非常に平坦であり、北側浅谷とは形成過程など性格が異なるものと思われる。特に水の流れたような様子のない特異な地形である。

谷のほぼ中央を南北に横断したI-J線の断面で土層断面をみてみると、1層が暗赤褐色土層で拳大の礫を多量に含む。この土層に土器片が含まれる。2層は黄褐色土層で谷下底部に堆積した土層である。3層は黄色土層の地山で、粘土質で礫を含まない。砂層などはない。



第80圖 北側埋沒淺谷出土土器 (1/4)



第81圖 南側埋沒淺谷出土土器 (1/4)

土器出土状況（第79図） 第75図のI-J線がかかる四角の範囲で土器片が多く出土した。第78図の十印で囲まれた範囲がこれと一致する。土器片は、北側浅谷のように極度に集中することはなく、バラバラと分散して分布している。小破片がほとんどであるが、大型破片も少量みられた。土器片の時期は、北側のものと違い、弥生時代中期のものと、今回発掘した住居址や土坑の時期とほぼ同じものが出土している。弥生時代中期のものは一ヵ所にまとまっており、一個体分と思われる。出土層位は他の土器とほぼ同一である。

出土土器（第81図） 弥生時代中用の土器についてはP10の第2節で記載した。第81図1は折り返し口縁の壺の小破片である。胎土に白色や黒色岩片、泥岩岩片、石英、長石、雲母といった鉱物粒子が多く含まれる。2は折り返し口縁の壺の小破片である。胎土は1と同様である。3は折り返し口縁の壺の小破片である。胎土は1と同様である。4は折り返し口縁の壺の破片で、口縁部が内湾しながら強く外傾する。胎土は1と同様のものと、片岩と思われる変成岩岩片がみられる。

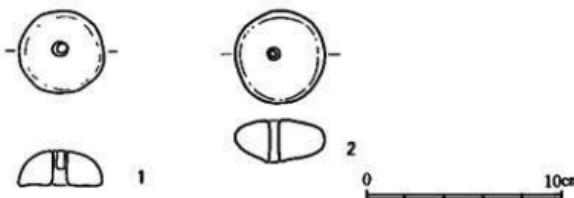
5は壺の肩部小破片でボタン状貼付文が1個みられる。胎土は1と同様である。6は中型の壺の頸部から肩部にかけての大型破片である。肩部からゆるやかな曲線を描きながら頸部が立ち上がる。胴部は球胴と思われる。外面肩部にはハケメないしは縄文と思われる痕跡がみられ肩部文様帶の存在が推定される。外面の他の部分はヘラ磨きされている。内面は全体に横方向の細かなハケメがみられ、下部に横ナデの調整がみられる。胎土は1と同様である。

7は壺の底部の破片である。底部は若干突出する。胎土は1と同様である。8は壺の底部である。底部は若干突出し、外面に木葉痕がみられる。胎土は1と同様である。9は小型の壺の底部である。底部は強く突出する。内面は平坦面がなく、丸底状である。胎土は1と同様である。10は底部小破片で、底部が若干突出する。胎土は1と同様である。

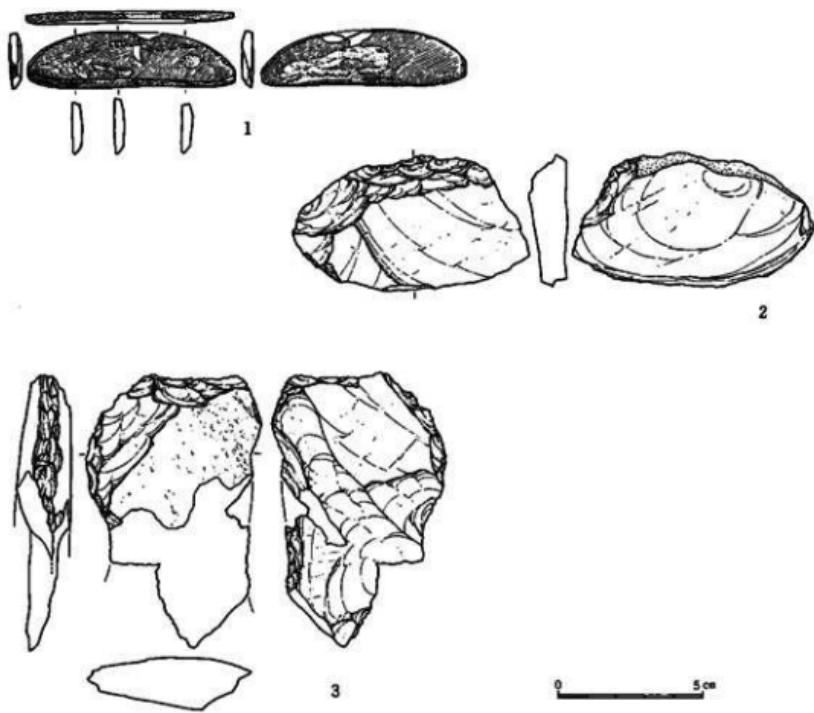
11は台付甕の台部破片である。底部内面は丸底である。胎土は1と同様である。12は甕の口縁部破片である。単純口縁で頸部が内湾する。胎土は1と同じである。

その他の土製品

土器以外の土製品としては、土製紡錘車2点がある（第82図）。1は5号住居址覆土中から出土した。片面が平坦な半球形である。中央に穴が貫通するが、軸が炭化して穴の中に残存している。胎土は白色岩片や石英、長石、雲母、輝石といった鉱物粒子を多く含む。穴の径が0.8cm、器高1.8cm、最大径4.2cmである。2は12号住居址の覆土中で遺構確認段階の高いレベル



第82図 弥生時代後期の紡錘車（1/3）



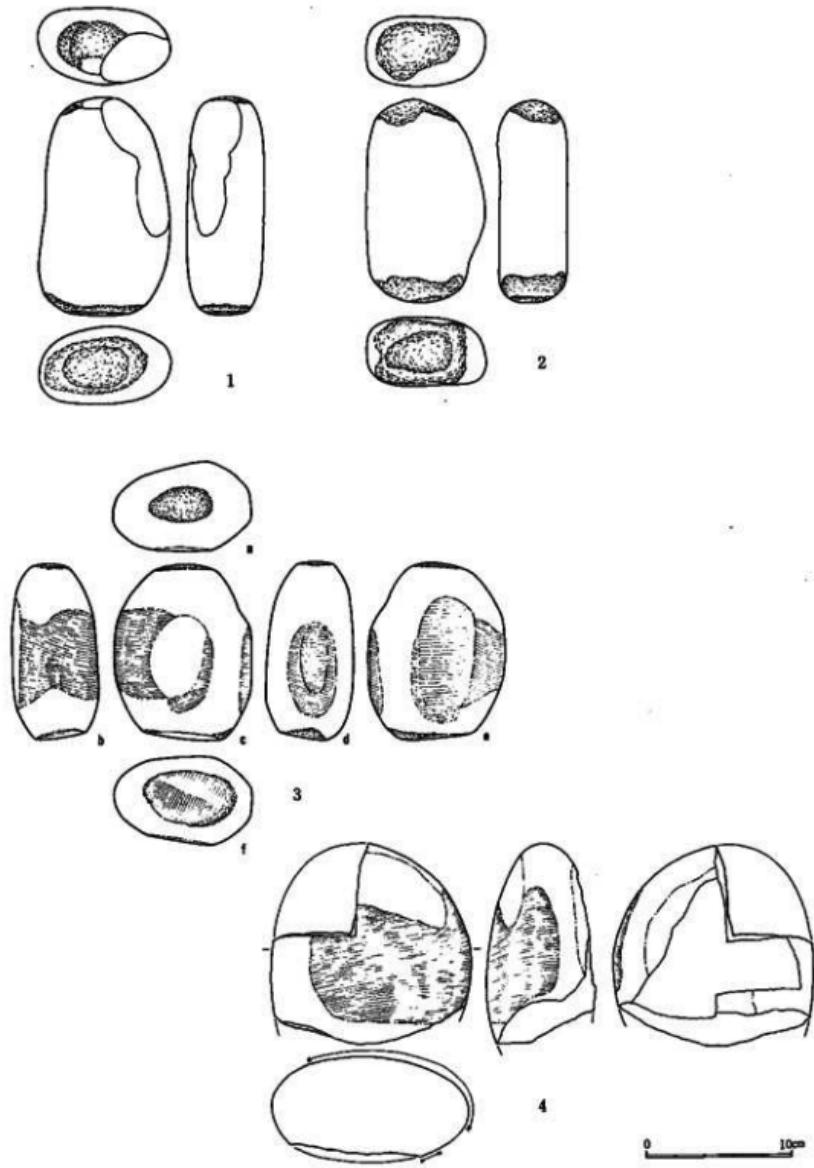
第83図 弥生時代後期の石器(1) (1/2)

から出土した。中央からやや片寄った位置に穴が貫通しているが、焼成前の穿孔らしく、一方の粘土が盛り上がっている。断面観はほぼ隋円形である。胎土は1と同様である。穴の径が0.7 cm、器高1.2 cm、最大径4.7 cmである。

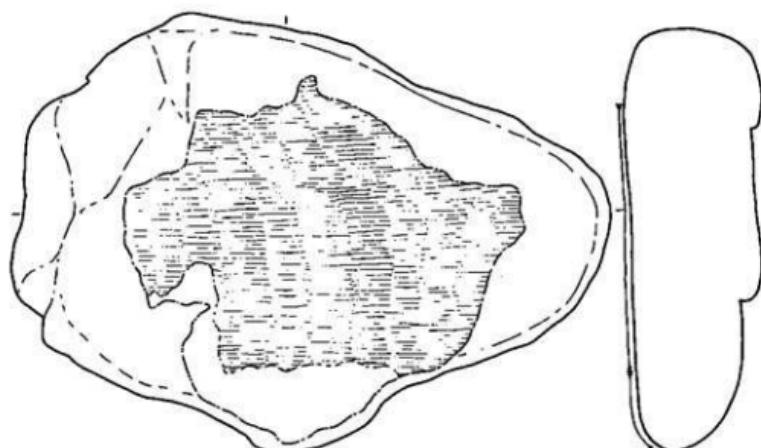
石器

石器としては、磨製石庖丁1点、打製石斧1点、剥片4点、敲石2点、敲石・磨石1点、磨石1点、磨面のある大型蝶2点、砥石1点、石錘29点が出土した。

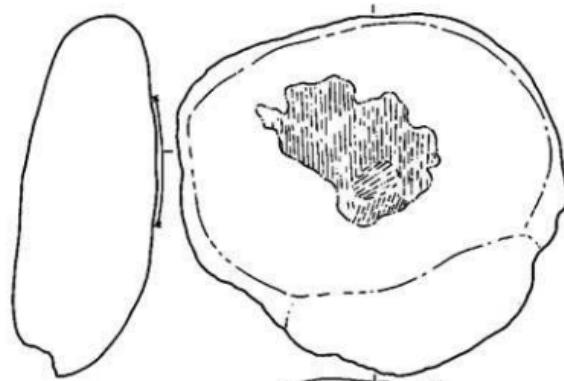
磨製石庖丁(第83図1)は、無孔で黒灰色の粘板岩製である。刃部は波状に微妙にカーブするがほぼ直刃である。団正面側に幅3.5 mmから2 mmほどの磨面を刃部に平行させて片刃に仕上げている。刃部は団裏面側に丸みを持ち、器体を裏面側にかたむけて対象に作用させた可能性がある。一部に刃こぼれ状の微細剥離が刃部にみられる。背部は弧状に仕上げられており、正裏面に直行する幅2 mmから3 mmの面をなしている。正面右縁側には正裏面とともに、両面からの微細剥離が連続し、先端部が潰れているが、旧来は尖っていたと思われる。反対側の正面左縁側は背面の磨面とは別に、刃部に直行する磨面が作られている。裏面は平坦であるが、正面



第84図 弥生時代後期の石器(2) (1/4)



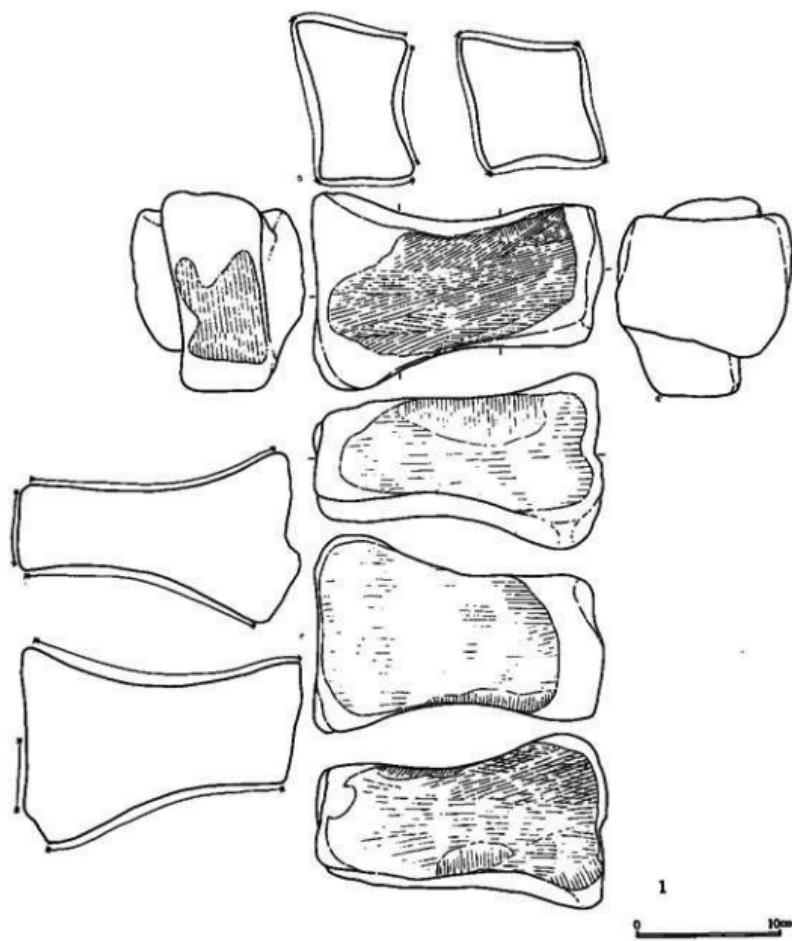
1



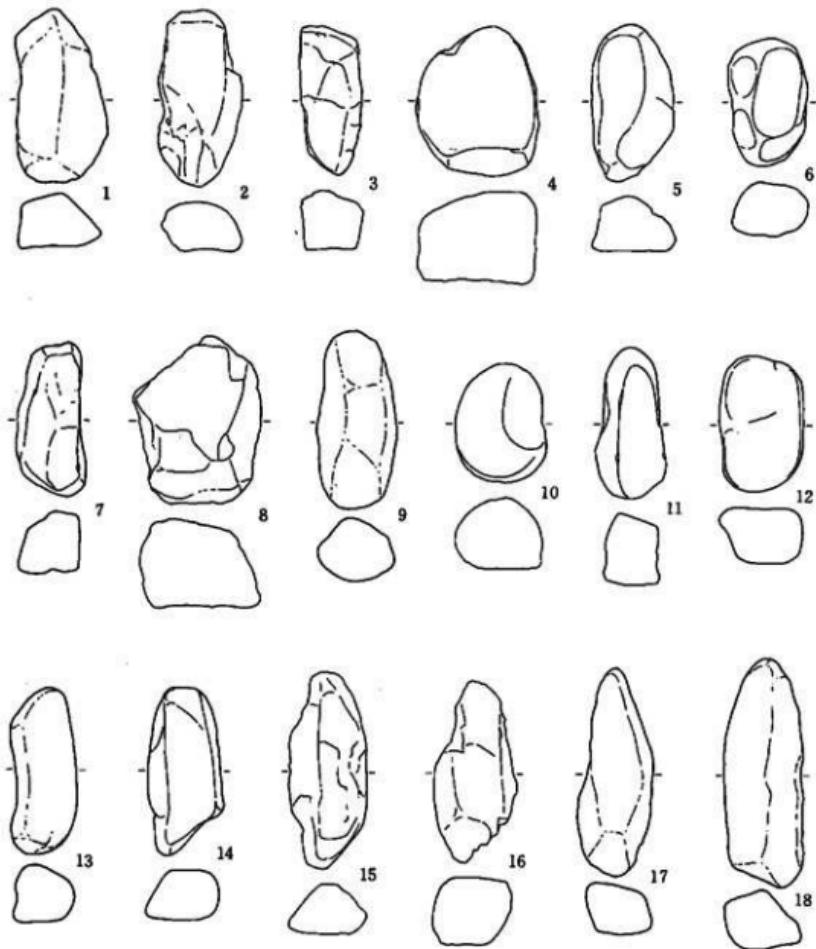
2



第85図 弥生時代後期の石器(3) (1/4)

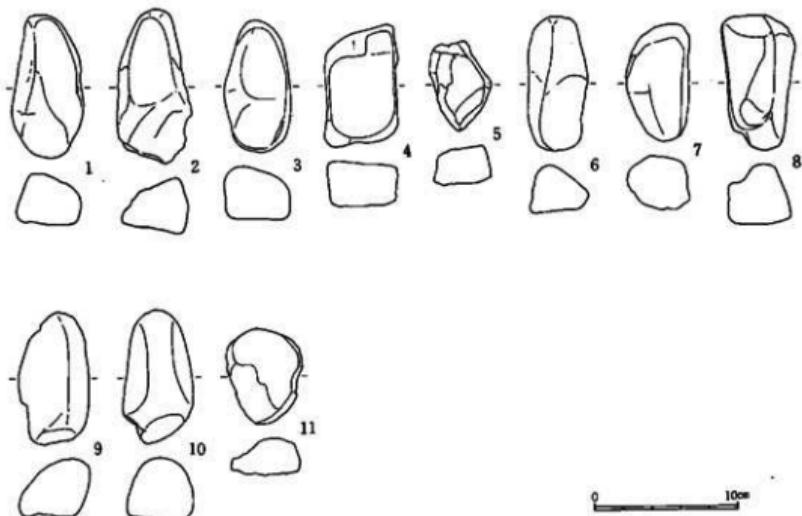


第86図 弁生時代後期の石器(4) (1/4)



0 10cm

第87図 新石器時代後期の石器 (5) (1/4)



第88図 弥生時代後期の石器(6) (1/4)

第1表 22号住居址出土石錐計測表

| | 番号 | 重さ | 長さ | 幅 | 厚さ | 石質 |
|---|----|------|--------|-------|-------|------|
| | 1 | 393g | 12.0cm | 6.4cm | 4.2cm | 砂岩 |
| | 2 | 340g | 12.0cm | 5.8cm | 3.0cm | 角礫風化 |
| | 3 | 257g | 10.4cm | 4.5cm | 4.0cm | 安山岩 |
| | 4 | 763g | 10.4cm | 8.3cm | 6.2cm | 安山岩 |
| | 5 | 318g | 10.8cm | 6.8cm | 3.7cm | 砂岩 |
| | 6 | 267g | 8.7cm | 5.5cm | 3.7cm | 安山岩 |
| | 7 | 288g | 10.4cm | 4.8cm | 3.2cm | 角礫風化 |
| 南 | 8 | 742g | 12.2cm | 9.1cm | 5.8cm | 角礫風化 |
| | 9 | 337g | 12.3cm | 6.6cm | 4.1cm | 玄武岩 |
| | 10 | 354g | 8.0cm | 6.3cm | 4.6cm | 片麻岩 |
| | 11 | 392g | 10.1cm | 4.6cm | 4.4cm | 角礫風化 |
| 北 | 12 | 338g | 9.2cm | 5.8cm | 3.9cm | 砂岩 |
| | 13 | 298g | 11.4cm | 4.5cm | 4.0cm | 砂岩 |
| | 14 | 344g | 11.6cm | 5.1cm | 3.1cm | 砂岩 |
| | 15 | 244g | 13.5cm | 5.7cm | 3.1cm | 角礫風化 |
| | 16 | 364g | 12.6cm | 6.5cm | 4.8cm | 角礫風化 |
| | 17 | 328g | 14.3cm | 4.8cm | 3.1cm | 安山岩 |
| | 18 | 502g | 15.7cm | 5.7cm | 4.1cm | 角礫風化 |

| | 番号 | 重さ | 長さ | 幅 | 厚さ | 石質 |
|--|----|------|--------|-------|-------|------|
| | 1 | 290g | 10.5cm | 4.8cm | 2.6cm | 砂岩 |
| | 2 | 280g | 10.5cm | 5.3cm | 3.7cm | 砂岩 |
| | 3 | 234g | 9.0cm | 4.7cm | 3.7cm | 砂岩 |
| | 4 | 274g | 7.8cm | 5.1cm | 3.5cm | 砂岩 |
| | 5 | 81g | 6.2cm | 4.0cm | 2.4cm | 砂岩 |
| | 6 | 189g | 8.4cm | 4.2cm | 3.5cm | 砂岩 |
| | 7 | 203g | 8.1cm | 4.3cm | 3.2cm | 安山岩 |
| | 8 | 281g | 8.4cm | 5.0cm | 3.1cm | 角礫風化 |
| | 9 | 282g | 8.2cm | 4.8cm | 3.0cm | 角礫風化 |
| | 10 | 257g | 8.2cm | 4.8cm | 4.4cm | 砂岩 |
| | 11 | 111g | 8.2cm | 5.2cm | 2.3cm | 角礫風化 |

は背面側に、背面にむかって傾斜する磨面が背面に沿ったかたちで作られている。なお、正裏面には素材の剥離面と思われる面が一部に残存しており、厚さがほぼ一定した薄い剥片が素材と考えられる。発掘時に背部を若干欠損したが、ほぼ完形品である。長さ7.2cm、幅1.9cm、厚さ0.4cmである。11号住居址の遺構確認段階の覆土上層部から出土した。

剥片は粘板岩2点、泥岩2点であるがこのうち1点を第83図2に示した。白色の泥岩で、自然面を打面とした横長剥片である。端部は段階状剥離となつたらしく、ヒンジクラクチャー状になっている。背面には打面縁に小剥離が連続するが、剥片剥離に先立つ打面縁調整と思われる。打面側にも若干の剥離があるが主剥離面に切られており、打面調整の可能性がある。正面左端に若干の微小剥離がみられ使用に伴うものかもしれない。11号住居址覆土中出土である。

他の剥片は、黒灰色泥岩の横長剥片が12号住居址覆土中から、破碎した粘板岩剥片が11号住居址覆土中から、やはり破碎した粘板岩剥片が8号住居址覆土中から出土した。

打製石斧（第83図3）は、黒灰色粘板岩製で分鋼形の基部と思われる。図上端部に連続する小剥離は刃潰しするような急角度の剥離で、打製石斧基部側に特徴的にみられる剥離である。裏面右下方からの加撃で破損したと思われる。正面には広く自然面が残存する。12号住居址覆土中から出土した。

敲石（第84図1・2）は2点ある。1は片麻岩円礫を用いたもので、5号住居址内の小ピット覆土中より出土した。横断面が長階円で縦断面が細長い円礫の両端に敲打面を持つ。上端の敲打面は3面より成り、中央の広い面がゆるやかな曲面、その左側縁部に曲面の敲打面が続く。中央の面の正面側に粗い磨面がみられる。中央の面右側には器体中央に至る破碎痕があるが、中央面に接する部分の稜が丸く潰れており、破碎後も敲打が続いたものと思われる。下端の敲打面は平坦で広い。その周縁部には曲面の敲打面が続く。2は砂岩亜円礫を用いたもので、13号住居址覆土中から出土した。横断面がやや角張った階円で縦断面が細長く、1とほぼ同様な形態である。上端は曲面、下端は平坦で周縁部に曲面の敲打面が続く。

敲石・磨石（第84図3）は、一つの礫に敲打面と磨面が共存するもので、1点ある。9号住居址の床面直上から出土した。砂岩円礫を用いている。横断面が階円形で縦断面が細長い形態の礫である。敲打面は長軸の両端のa面とf面にある。a面は曲面となる粗い敲打面である。f面は平坦な磨面の周囲に敲打面がみられ、敲打の伴う磨りか敲打後の磨りが考えられる。磨面はa面以外の全ての面にみられ、擦痕を伴う曲面、擦痕を伴う平坦面、光沢のある平坦面の3種類がある。b面は右下方向の擦痕の伴う円礫面に沿った磨面で、中央下部に横方向の擦痕の狭い平坦面がみられる。c面はb面から続く右下方向の擦痕の曲面磨面と、中央の光沢のある平坦面、その右下方部にみられる横方向と右上方向に擦痕がみられる狭い磨面がみられる。d面では、中央に横方向の擦痕のみられる平坦な磨面とその周囲の右下方向の擦痕の曲面の磨面とからなる。e面は、中央に横方向の擦痕の伴う広い平坦な磨面、その左下方のやや荒い擦痕の曲面磨面、右下方向の擦痕でb面に続く曲面磨面とからなる。f面では、やや光沢を持つ平坦な上半部と右上方向の擦痕を伴う平坦な下半部とが共存する広い磨面である。以上の状況から、敲打、敲打を伴う磨り、曲面を広く利用し礫を回転させながらの磨り、

おそらくそれと同時に行われただろう礫の広い面を利用した平坦な磨りといった一連の作業が行われたと思われる。なお、礫は焼けていない。

磨石（第84図4）はかなり大型の砂岩円礫を用いている。10号住居址の周溝内から割れた状態で出土した。6片の破片に割れていたが、全て一ヵ所にまとまって出土した。割れ方をみると火熱での割れ特有の破断面を有しており、一部ススの付着もみられ、焼けによって割れたものと思われる。しかし、全体の3分の1ほどの量で2個以上の部分が欠落している。礫の形態は平面観が円形、断面が隋円形である。平面の片面から右縁部にかけて一定方向の擦痕を伴う曲面の磨面が広くみられる。その反対面の平面は広く欠落部があるが、光沢を持つ曲面の磨面が広く占めていたと思われる。このように、上下両面を使い分けている状況から、この磨石は置かれて使用したものではなく、手に持たれて対象に作用されたと考えられる。重量は1.6kgである。

磨面のある大型礫（第85図）は2点ある。1は21号住居址の床面から5cmほど浮いた状態で出土した。長軸41.8cm、短軸29.3cm、厚さ9.4cm、重さ15.6kgの扁平な大型礫である。石質は角礫凝灰岩である。上面に広く粗い磨面と左下方に半光沢の磨面とがみられる。磨面は片面のみである。2は19号住居址の周溝上から出土した。長軸27cm、短軸24.6cm、厚さ9.5cm、重さ9.2kgである。片面の曲面に擦痕を伴う磨面がみられ、擦痕の方向が違う部分がある。石質は角礫凝灰岩である。

砥石（第86図）は1点ある。13号住居址の床面より10cmほど浮いた位置から出土した。最大長20.3cm、最大幅13.7cm、最大幅の位置での厚さ8cm、重さ3,300gである。石質は凝灰岩である。磨面は図右端の小口以外の面にみられ、図左端の小口の平坦な磨面以外は全て曲面である。縦断面では、どちらか一方に厚みを持つような、しの字に似た曲面である。横断面は中央が強く窪むものと弱い曲面のものとがある。擦痕が観察でき、長軸方向のものが多いが、長軸に直交するものも中央部の縁部にみられる。刃部が湾曲する対象物を磨いたらしいが、磨き方の違いか、湾曲の強度の違う対象を磨り分けている可能性が考えられる。また、かなり大型の対象、たとえば斧なども含まれていたことが考えられる。

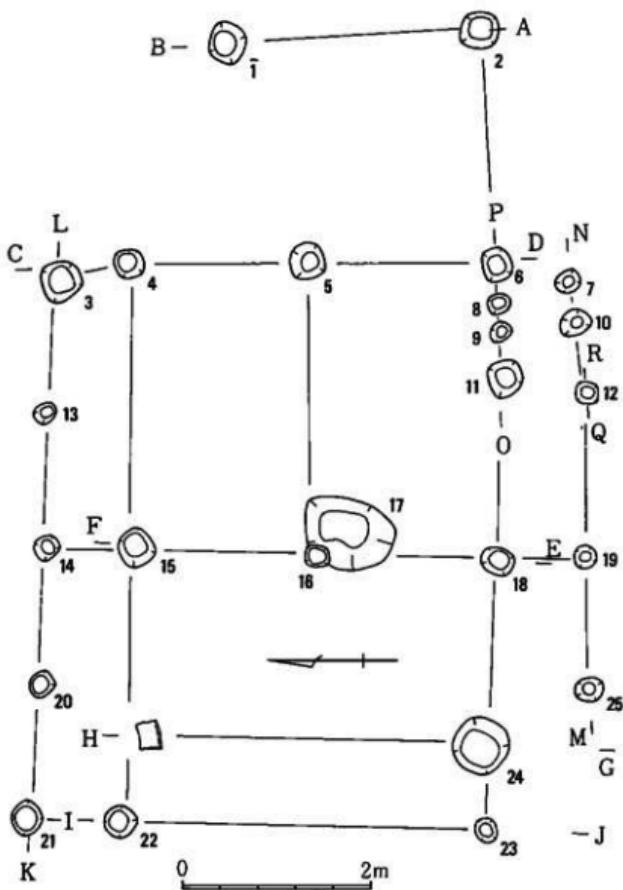
石錐（第87・88図）は29点あり、全て22号住居址の周溝底部から出土した。南群18個（第87図）、北群11個（第88図）の2ヵ所にまとまって出土した。第1表に観察表を示した。南群は300g台の細長い亜角錐、北群は200g台の細長い亜角錐が多く、両群でやや大きさ（長さ）が異っている点が注目される。繊維の太さや編み物の長さや幅などが違うものを編み分けていることが考えられる。

第4節 中世の遺構と遺物

中世の遺構については、掘立柱建物址1棟、溝1条、土坑1基が北地区から検出された。

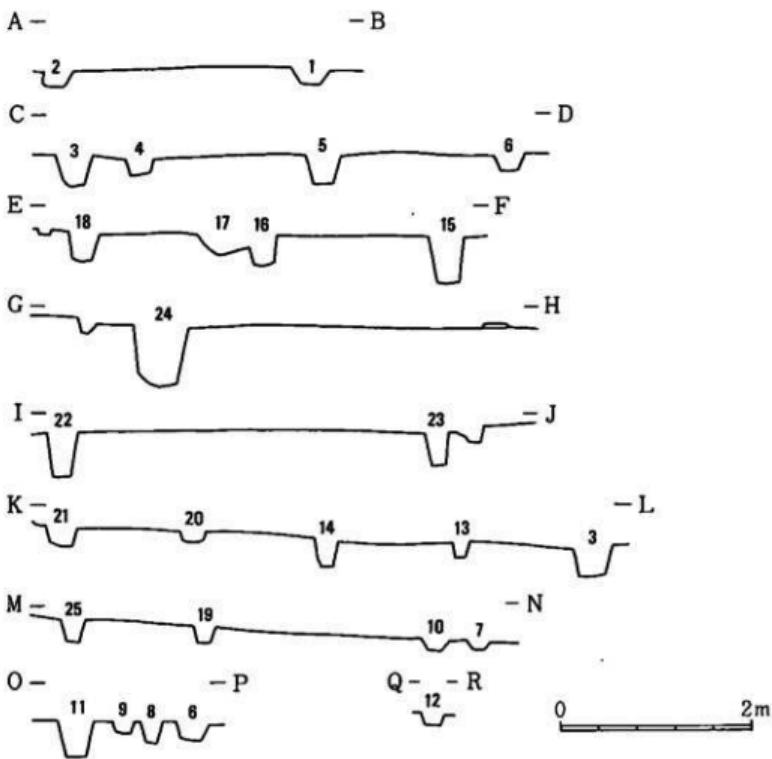
1号掘立柱建物址

遺構（第89・90図） 北地区的東部、20号住居址に重って確認された。25個の小穴と1個の平石からなる。これらの小穴は、覆土が黒色で木炭片が多く含み、確認が非常に容易であつ



第89図 1号掘立て柱建物址 (1/60)

た。小穴の配置をみるとかなり複雑な構造が推定される。建物の主たる柱穴と思われるものは、小穴に付した番号で 4 ~ 6、15、16、18、22、23 の 8 個である。長方形に配列しており、重心の距離が 4 と 5 で 192cm、5 と 6 で 196cm、15 と 16 で 188cm、16 と 18 で 192cm、22 と 23 で 384cm で短辺が 1 間が 190cm 前後、2 間で 380cm 強である。長辺は、4 と 15 が 292cm、15 と 22 が 288cm、6 と 18 が 304cm、18 と 23 が 280cm で、280~300cm が 2 間であり、短辺の株間の 1 間より短い。この母屋というべき部分の北側に庇と思われる部分が作り出されている。母屋部分の主たる柱穴から 72~96cm 北側に 140cm 前後の間隔で小穴が配列する。母屋部分の南側には 5 個の小穴が配列するが、間隔が不規則である。19 と 18 が南北線上に配列するが、他は明瞭な配列性もない。



第90図 1号掘立柱建物址断面図 (1/60)

ただし、東部の3個は間隔が狭く、母屋部分の南東部で間隔が狭く配列する小穴と何らかの関係を持っているかもしれない。母屋部分の東側に2個の小穴が配列する。2と6の間が244cm、1と2が268cmである。母屋部分の西部に、直径60cm、深さ64cmの比較的大きな穴がある(24)。その反対側(北側)に四角い平石が位置している。いずれも心部がやや内側に入る位置にあり、18と24の間が200cm、15と平石の間が196cmと短軸の1間となっているなどから、母屋部分の何らかの構造を示すもの可能性がある。

小穴の大きさをみると、40cmから24cmである。30cm以上の太い穴は母屋部分の4、5、6、15、18、22の主たる柱穴と11、庇の両脇の3と21、南側造り出しの10、東側造り出しの1、2である。深さでは、48cmから8cmである。やはり30cm以上の深い穴は、母屋の5、15、16、18、22、23の主たる柱穴と11、庇の東端の3と中央の14で、南側と東側の造り出しには深いものがない。母屋部分では、太いか深いかの両者がいずれかの柱穴で占められ、庇部分は両脇と中央



第91図 1号掘立柱建物址出土土器 (1/3)

が太いか深い柱穴である。南側の造り出しが浅い小穴のみであり、東側の造り出しが浅いか太い小穴である。こうした小穴の太さ深さの規則性は、上屋構造の状況を反映したものと思われる。なお、短軸がほぼ南北方向に設定されており、方位が強く意識されている建物らしい。

出土土器（第91図） 1号掘立柱建物址内からは12点のかわらけ小片と5点の石英小礫が出土した。そのうち第91図に図示したのは柱穴内から出土した土器である。1はかわらけの口縁部で口縁部がやや肥大する丸口縁である。やや赤みのある白褐色を呈し、胎土に石英、長石、雲母、輝石などの鉱物微小片を含む。小穴番号22から出土。2は丸口縁のかわらけ口縁部小片である。白褐色を呈し、胎土は1と同様である。1と同様に小穴番号22から出土。3はかわらけの底部小片である。赤褐色で、胎土に小岩片の他、1と同様な鉱物微小片を多く含む。小穴番号21から出土した。いずれも、中世末から近世初頭の所産であろう。

石英礫は、小穴番号22から10g～30gの小礫が4点、小穴番号21から190gの礫が1点出土した。いずれも礫の後に敲打痕を持つ。火打ち石の可能性がある。小礫は3点が亜角礫で1点が角礫、小穴番号21の1点は亜角礫である。

1号溝

遺構（第92図） 1号掘立柱建物址の南方約7mの所にあり、長軸方向が1号掘立柱建物址と平行して東西方向である。1号掘立柱建物址に関わる土地を区画した溝の可能性がある。西端部が路に切られ確認できなかったが、西側長さ3mと東側長さ7mに2分しており、両者はほぼ直線的に連っている。幅は両者とも約1.5mほどである。深さは10～20cmと非常に浅い。覆土は黒色土層で、遺物をほとんど含んでいないが、2点のかわらけ片が出土した。小片で図示できなかったが、1点は第91図2と同様な口縁形態である。もう1点は底部小片である。

4号土坑

遺構（第93図） 18号住居址の東壁中央付近に位置する。隅丸長方形で、長さ1m、幅0.7mである。遺構確認段階で深さ10cmで、底面は平坦である。中央に長さ30cm、幅15cm、厚さ10cmほどの礫が、底面から20cmほど浮いて出土した。また、北部から古銭1枚が、底面から5cmほど浮いた状態で出土している。墓に伴う六道錢と思われる。

土層は、1層が赤褐色土層で軟質である。礫や古銭はこの土層内にある。2層は黄褐色土層で木炭片を含み比較的硬質である。

出土遺物（第94図1） 出土遺物としては、第94図1の古銭1枚のみである。至道元宝と読める。至道元宝は、北宋銭で、至道元年（995年）が初鑄とされる。

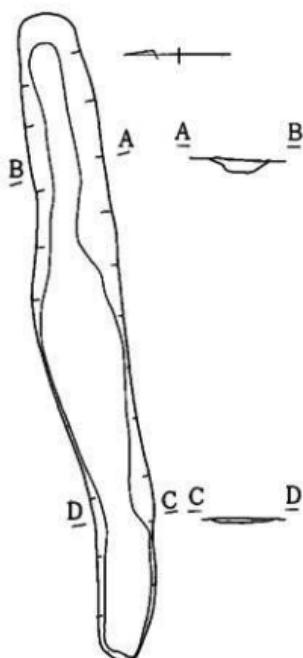
遺構外出土の遺物

中世関係の遺物として、古銭3枚がある。第94図2～4である。2は天聖元宝と読める。や

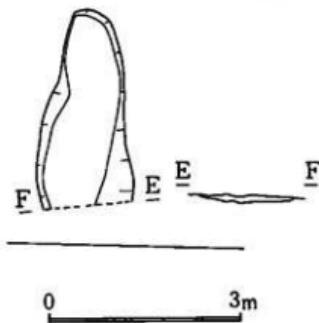
はり北宋錢で、天聖元年（1023年）初鋤である。3は元豊通宝と読める。北宋錢で、元豊元年（1078年）初鋤である。4は腐食のため明確に読めないが、最初の字が元に見え、元豊通寶の可能性がある。

これら3枚は相互に張り付いた状態で、19号住居址の覆土中から出土した。この付近に4号土坑同様な墓址があった可能性がある。

第95図1はかわらけである。口縁は尖形ぎみで、体部中央が屈曲する。白褐色で、胎土は緻密である。24号住居址覆土中より出土した。2は陶器で、瓶の底部と思われる。黒褐色の鉄軸が施釉されている。近世の所産と思われる。23号住居址覆土中より出土した。



水系レベルは
334.5m



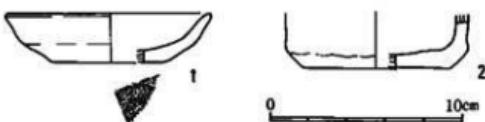
第92図 1号溝



第93図 4号土坑



第94図 出土古銭 (2/3)



第95図 その他の中・近世遺物 (1/3)

第5節 13号住居址床面下土壤の炭化種子水洗選別

1 目的と方法

発掘調査では、通常住居址、土坑等の遺構や土器、石器等の記載、調査、研究が主体となり自然遺物への関心は必ずしも十分ではない。動植物遺体などの自然遺物は、発掘対象となった遺跡の自然環境やそこで生活した人間の食物の内容などを知る手がかりとなる。しかし、低湿地などの特殊な遺跡以外では自然遺物は多量に残存することはない。通常の遺跡では自然遺物の残存は望み薄と思われたが、最近県内でも遺構内や完形土器内の土壤水洗が行われ、炭化した植物種子や焼骨片などが確認されるようになった（宮沢1986、長沢1988など）。また、プロジェクトシーズのように、炭化種子の水洗選別を組織的に行おうという動きもある（プロジェクトシーズ1989）。炭化種子は以外に検出できるもので、各時代、各地域の住居址内や炉址、カマド内などの炭化種子を意識的に検出し集めることで、食物内容の変化などの把握がある程度可能となろう。

今回の調査は、こうした研究状況をふまえ、弥生時代後期末の住居址床面下土壤を対象に水洗選別を行った。まずは、この時代の炭化種子にはどのようなものがどの程度残存しているものかを把握するのが第1の目的であるが、水洗選別には相当の労力が必要であり、住居址のどの部分を対象とすれば効率的に炭化種子が検出できるかの見通しを付ける目的もある。通地域、通時代的に比較するためには、省力化が必要であり、省力化は少ない量の土壤で多くの炭化種子の得られる場所を把握することが必要である。たとえば、北海道恵庭市柏木川11遺跡の擦文時代の2軒の住居址では、カマド内よりも北東コーナー部分に集中的に炭化種子が検出されている（吉崎1990）。その由来を十分検討する必要があるが、これがもし一般的なあり方ならば、擦文時代の住居址では北東コーナーを含む住居址の4分の1ほどの面積を水洗選別すれば炭化種子が効率的に検出できることになる。

今回水洗選別を行ったのは13号住居址1軒のみである。13号住居址を選んだのは、完形土器が出土したり遺物の量も豊富で、しかも床面直上に集中的に遺物が出土しており、生活してい

た状態で住居址が放棄された可能性が考えられたこと、床面上に木炭片が多量に分布し火災住居の可能性があり、生活していた状態での食糧とされた種子の散乱状態がそのまま把握できる可能性があったからである。土壤のサンプリングは、床面直上の遺物群を取り上げ、床面精査し柱穴を検出した後、実測や写真撮影を終えた後に行った。ただし、13号住居址の上記調査を終えた後、約1ヵ月間の放置期間があったことを明記しなければならない。この期間に周辺からの流れ込みも心配されるが、周溝がある部分については周辺からの流れ込みが断たれており周溝のない部分についても、調査結果をみるとその部分に多く炭化種子が集中する傾向が見られないで、外部からの混入はほとんどなかったと考えている。なお、住居址周辺部では方格にかかった床面部分だけ土壤を採種したので、土壤量は少くなっている。

採集法は、土器片を取り上げ、木炭片層を除去した後の面から厚さ2cmの床を構成すると思われる土壤を、50cmの方格ごとに採集したもので、方格は98ヶ所設定した。土壤量は、1方格で土ノウ袋満杯で1袋程度であった。各方格は南北方向にアラビア数字で南から1、2、3と付け、東西方向にアルファベットで西からA、B、Cと命名した。

床を構成する土壤を対象としたのは、床が一時に形成されたものではなく、使用期間中の人の出入りである程度の厚さが形成され、その中に生活中に散乱した食糧となった種子等が封じられている可能性があると考えたからである。今回対象とした13号住居址は、床面が特別な土壤で形成されているような状況ではなく、本遺跡の他の住居址同様、明確にその面が把握できたものではない。土器分布面の下の木炭片層を除去した後の面を床面とした。また、木炭片層は床面全体に分布せず、分布しない所は木炭片層下の面に連続した一平面を床面として認識した。したがって、木炭片層のない所は床面をかなり掘り込んだ部分を床面と認識している可能性がある。住居址西部や北部に炭化種子が少いのはこうした点が原因である可能性も否定できない。ただし、住居址中央部では木炭片層があるにもかかわらず炭化種子が少い部分あり、これはその本来の分布状況を示すものと考えられる。

水洗選別の手順については、まず土壤サンプルを露天で1日から2日間天日乾燥し、完全に水分を取ってから水洗した。土壤は粘土質で湿った状態では炭化物と土壤の分離が非常に手間がかかる。ところが、これをいったん乾燥させて水没けすると、土壤がボロボロに崩壊し、炭化物と土壤の分離が容易となる。乾燥させた土壤は、直径50cm、深さ40cmのプラスチック製のオケに、目の大きさの違う3種類のフルイが中に入れられるようにした水洗器で洗浄した。最も小さい目が1mmである。このフルイに残った物をすべて回収し、これを再び乾燥した。フルイに残った物の中には炭化物ばかりではなく、礫や土器片などが含まれる。炭化物の中の炭化種子、特に米はかなり重く、普通の水では小礫との分離が困難であった。そこで、飽和状態の食塩水を作り炭化物を浮かせて分離することとした。それでも炭化米は沈むものが多かったが、小礫などとは沈む速度が違い遅いので、食塩水に入れ、茶コシですみやかにすくい取る方法で選別していく。選別した炭化物は、保坂が木炭片と炭化種子とに分類し、炭化種子のみをバリノ・サーヴェイ株式会社に送り、同定を依頼した。以下その報告である。

2 平野遺跡出土種子同定

1. はじめに

平野遺跡は、山梨県南巨摩郡増穂町最勝寺字平野に所在する。標高約330mで、山地の末端に発達した崖錐堆積物からなる東向きの緩斜面に立地する。崖錐性堆積物の上には直接表土が覆い、付近の平坦地にみられるPm-I（御岳第1軽石）以上のローム層が堆積していないことから考えると、この地形は完新世以降の比較的新しい堆積物であるとみなすことができる。調査区内には、小河川や小規模な埋没谷がみられる。発掘調査の結果、弥生時代後期の集落跡（住居址25軒）が検出され、これらの住居址は大半が焼失住居であった。この集落は、中央にある埋没浅谷を挟み、南北2つのブロックに分かれる。

これらの住居址のうち、北側ブロックにある13号住居址は、床面直上に木炭が多量に分布し、また床面には完形土器なども多く出土した。今回山梨県埋蔵文化財センター保坂氏より、この住居址から出土した炭化種子等の種実同定を依頼された。そこで、保坂氏と協議の上、次のような目的を設定し、上記分析を行った。

① 平野遺跡の立地について

平野遺跡は、弥生時代末の極めて限られた時期の集落しか検出されない。このような遺跡は、平野遺跡以外にも甲府盆地南縁部に幾つか知られている。この原因について、特に周辺環境や生業に関する要因があるのかどうかを、13号住居址より出土した種実遺体の産状から可能な限り検討する。

② 弥生時代の植物利用について

本遺跡から検出された種実遺体とともに、当時の植物の利用状況について、立地環境とも関連させて推定する。

③ 種実遺体の平面分布の傾向と意味について

住居址全体について、定量的な検討が可能なように試料採取が行われていたので、住居址内の平面分布を意識し、特定種類の偏在傾向などを把握する。さらに、可能であればその意味について解析を行う。

2. 試料

試料は、保坂氏らにより土壤ごと採種した後、水洗選別されたものである。種実遺体の分離作業について、添付資料にもとづいてまとめるところとなる。

床面について50cmメッシュの方格を全体に設定し（第96図）、約2cm厚で土壤を採取した。土壤を乾燥後、1mm以上の篩で水洗選別を行い残渣を乾燥させた。これを、食塩の飽和水溶液に入れて浮いたものを回収し、鉱物質と有機質とを分離させた。回収された有機質から、炭化種実遺体を選別した。

このような行程で採取された種実遺体を、当社にて同定・解析を行った。

3. 結果

結果を第2表に示す。今回同定された種類は、イネとサンショウの2種類であった。イネに粒径が類似する炭化物片が多く見られたが、形態的な特徴をとどめていないものについては

同定不能として扱った。またオニグルミの核の破片と思われるものも数点みられたが、微細で形態的特徴がはっきりしないため、同定不能として扱った。以下に、今回同定された2種類の形態的特徴を記す。

・イネ *Oryza sativa L.* イネ科 (図版14)

胚乳が検出された。胚乳は炭化し、大きさは縦軸5mm、横軸3mm程度。胚が位置する部分は欠如している。表面には縦軸に平行な隆起構造が認められる。

・サンショウ *Zanthoxylum piperitum DC.* ミカン科 (図版14)

種子が検出された。黒褐色。大きさは3mm程度。楕円形。表面には浅い不規則な網目模様が見られる。

4. 考察

① 平野遺跡の立地について

今回の種実遺体の結果から、弥生時代後期末頃本遺跡周辺で稲作が行われていることが間接的に示唆されたが、遺跡が短期間のうちに廃絶された理由を示唆する事実は見あたらなかった。遺跡が短期間のうちに廃絶された理由としては、むしろ地形的な要因によるのではなかろうか。先にも述べたようにこの地形面は完新世（おそらく縄文時代）に形成された新しいものである。このように不安定な斜面であったため、継続して土地を利用しにくかったことも可能性の一つとしてあげられる。しかし、これはまだ想像の域をでないことであり、遺跡の立地する地形や地質についての調査を今後とも継続して行う必要があろう。

② 当時の植物利用について

多量に炭化米が検出されたことから、当時稲作が行われ、それらを食料としていたことがうかがわれる。また、サンショウについても食用として利用されていた可能性がある。

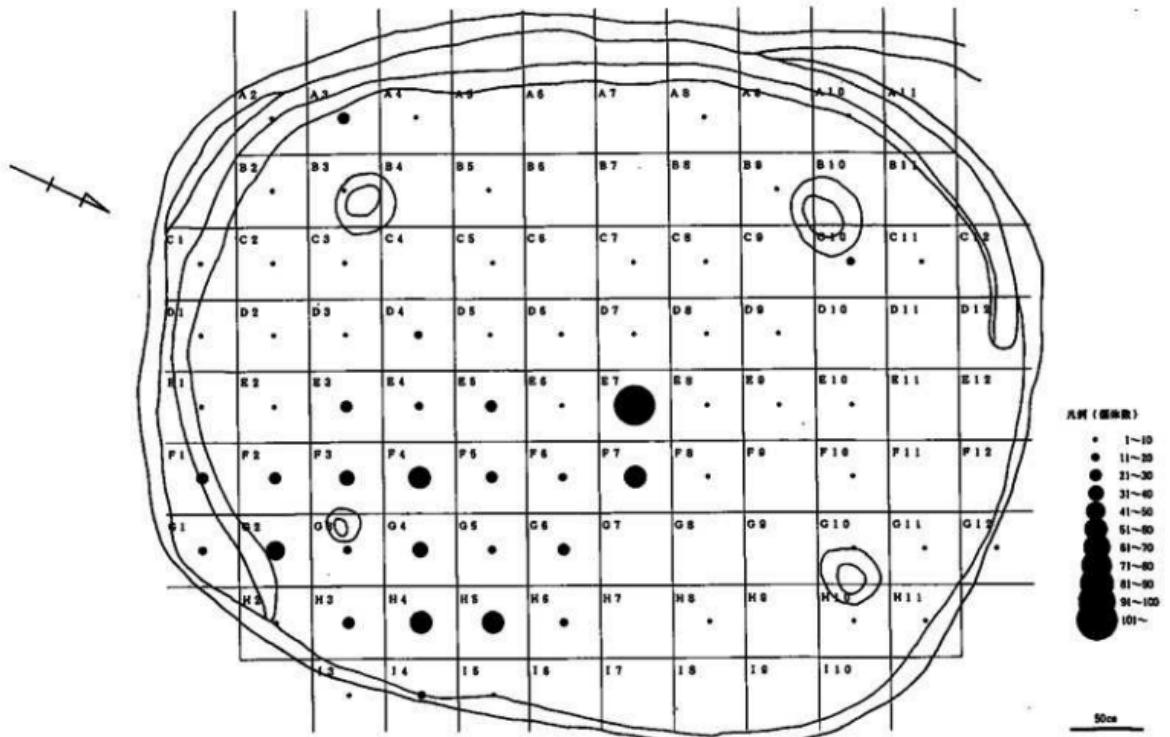
③ 種実遺体の平面分布の傾向と意味について

今回得られた種実遺体は、定量的な検討が可能なよう試料採取が行われている。そこで、住居址内での炭化米の平面分布について第96図に示す。傾向的には中心部であるE7で最も多く、住居址の南東側の隅でも多い傾向がみとめられる。同定不能の破片の傾向もほぼ一致していることから、これらの破片の中には炭化米に由来するものが少なからず含まれているものと思われる。

これらのことから、住居址の中心部や南東隅における調理や貯蔵などが考えられるが、情報が少なく想像の域を脱し得ない。特に中央部では、炉にともなう調理などが考えられるが、焼土や土器・配石の分布状況などとからめて改めて検討していく必要があろう。

第2表 種実遺体同定結果

| 試料番号 | 同定結果 | | | 試料番号 | 同定結果 | | |
|-------|------|------|---------|------|-------|-----------|---------|
| | イネ | 他の種類 | 不能 | | イネ | 他の種類 | 不能 |
| A - 2 | 7 | | 1 5 | 6 | 5 | | 2 0 |
| 3 | 2 3 | | 約 5 0 | 7 | 107 | | 約 1 0 0 |
| 4 | 1 | | 1 2 | 8 | 2 | | 8 |
| 5 | | | 4 | 9 | 1 | | 2 1 |
| 6 | | | 7 | 1 0 | 1 | | 8 |
| 7 | | | 8 | 1 1 | | | 7 |
| 8 | 2 | | 1 1 | 1 2 | | | 1 0 |
| 9 | | | 7 | F - | 1 2 3 | | 約 3 0 0 |
| 1 0 | 1 | | 1 | | 2 2 9 | | 約 1 0 0 |
| 1 1 | | | 1 0 | | 3 3 9 | | 約 1 0 0 |
| B - 2 | 2 | | 4 | | 4 5 8 | | 約 5 0 |
| 3 | 3 | | 1 9 | | 5 2 4 | | 3 0 |
| 4 | | | 2 2 | | 6 1 9 | | 2 0 |
| 5 | 2 | | 9 | | 7 5 6 | サンショウ : 1 | 約 5 0 |
| 6 | | | 1 5 | | 8 3 | | 1 8 |
| 7 | | | 3 | | 9 | | 7 |
| 8 | | | 1 0 | | 1 0 2 | | 1 0 |
| 9 | 1 | | 8 | | 1 1 | | 1 2 |
| 1 0 | | | 1 0 | | 1 2 | | 8 |
| 1 1 | | | | G - | 1 1 2 | | 1 0 |
| C - 1 | 5 | | 9 | | 2 4 7 | | 約 5 0 |
| 2 | 7 | | 9 | | 3 2 0 | | 2 0 |
| 3 | 3 | | 1 0 | | 4 3 1 | | 約 5 0 |
| 4 | 1 | | 1 3 | | 5 1 7 | | 3 0 |
| 5 | | | 5 | | 6 2 1 | | 2 0 |
| 6 | | | 6 | | 7 | | 7 |
| 7 | 1 | | 9 | | 8 | | 1 3 |
| 8 | 2 | | 8 | | 9 | | 9 |
| 9 | | | 8 | | 1 0 1 | | 1 3 |
| 1 0 | 1 1 | | 1 5 | | 1 1 1 | | 7 |
| 1 1 | 2 | | 3 | | 1 2 2 | | 4 |
| 1 2 | | | 9 | H - | 2 4 | | 4 |
| D - 1 | 4 | | 約 5 0 | | 3 2 4 | | 約 3 0 |
| 2 | 4 | | 2 5 | | 4 5 1 | | 約 5 0 |
| 3 | 1 0 | | 約 5 0 | | 5 5 4 | | 約 4 0 |
| 4 | 1 1 | | 約 1 0 0 | | 6 1 4 | | 3 0 |
| 5 | 1 | | 7 | | 7 | | 1 0 |
| 6 | 4 | | 1 2 | | 8 | | 2 1 |
| 7 | 8 | | 2 1 | | 9 | | 5 |
| 8 | 1 | | 1 0 | | 1 0 2 | | 2 0 |
| 9 | 1 | | 1 1 | | 1 1 2 | | 約 3 0 |
| 1 0 | | | 1 1 | I - | 3 5 | | 1 5 |
| 1 1 | | | 6 | | 4 1 9 | | 2 0 |
| 1 2 | | | 2 | | 5 5 | | 1 0 |
| E - 1 | 6 | | 約 1 0 0 | | 6 | | 1 3 |
| 2 | 9 | | 約 1 0 0 | | 7 | | 1 0 |
| 3 | 2 6 | | 約 5 0 | | 8 | | 1 0 |
| 4 | 2 0 | | 約 3 0 | | 9 | | 6 |
| 5 | 2 5 | | 約 2 5 | 1 0 | | | 5 |



第96図 13号住居の炭化水素分布状況

3 分析の成果

同定の結果は、炭化米が多量に存在するということであった。その他、サンショウが1点のみであったが、同定不能とされたものも多量にある。水洗の段階で割れてしまい形状がわからなくなつたものもかなりあると思われる。米以外の種子もこうした同定不能とされたものの中に含まれている可能性があるが、炭化種子のほとんどが炭化米であったというのは一つの成果と考えられる。

炭化米の分布は、住居址中央、おそらく炉址と思われる部分に極度に集中した分布を示すのと、住居址南東部のおおむね 2×2 mほどの範囲に多く分布するとの、大きく2つの部分での分布が目を引く。また、A3の方格では同定不能も含めると、周辺の方格より格段に多い量がみられる。この3つの部分について遺物の出土状況などを加味して意義付けしてみたい。

住居址中央の集中部では特に遺物等を伴っていないが、その位置のみから伴離して炉址周辺での調理作業時にこぼれたものであったと考えられる。住居址南東部の比較的広い分布は床面直上の遺物群の下にある。第39図(P50)に示した遺物分布状況からすると、住居址南半部に遺物が分布し、壺や甕などが潰れた状態で炭化米分布域の上に分布する。しかし、大きな土器片集中ブロックや完形土器は西側に主に分布しており、土器に入れられていたものが、土器が割れることによって分散したというような状況は想定できない。住居址南東部は入口の東側部分に当ると思われ、この部分に常時米の貯蔵空間があって、収納容器などから米を取り出したし、収納したりする作業の折に広く散布したものであったと想定したい。

ところで、南西部のA3の方格での集中分布は、上記の分布と違い非常に狭い範囲に孤立的にある。土器の分布はこの直上にはないが、これを取り囲むように大きな土器片集中ブロックが3ヶ所見られ、小型広口壺や中型甕の完形土器が周溝内より出土している。また、柱穴内の床面とほぼ同じレベルから小型甕の底部が出土している。柱材を取り除き、柱穴を床面レベルまで埋めてから置いたように見受けられる。土器片ブロックや完形土器、柱穴内土器の分布を一連のものと考えると、住居廻りに伴う儀礼的な行為が推定される。これらの土器群に囲まれたA3方格の炭化米は、その儀礼に伴い置かれたものであった可能性が考えられる。したがって、日常の生活の中で散布していく前二者の分布域とは違った意味あいを持っている可能性を考える必要がある。

さて、炭化種子を効率的に得る場所については、炉址か住居址南東部が考えられる。どちらとも断じがたいが、構造が明確であるならば炉址の方がより効率的かもしれない。ただし、炉内ばかりではなく、周辺を含めて1m四方程度の範囲を採取するとよいだろう。

引用文献

- 宮沢公雄・金子浩昌 1986 『清水端遺跡』明野村教育委員会
長沢宏昌他 1988 『花鳥山・水呑場北』山梨県教育委員会
プロジェクトシーズ 1989 『PROJECT SEEDS NEWS』NO.1
吉崎昌一 1990 『北海道恵庭市柏木川11遺跡の植物遺体』『柏木川11遺跡』恵庭市教育委員会

第4章 結語

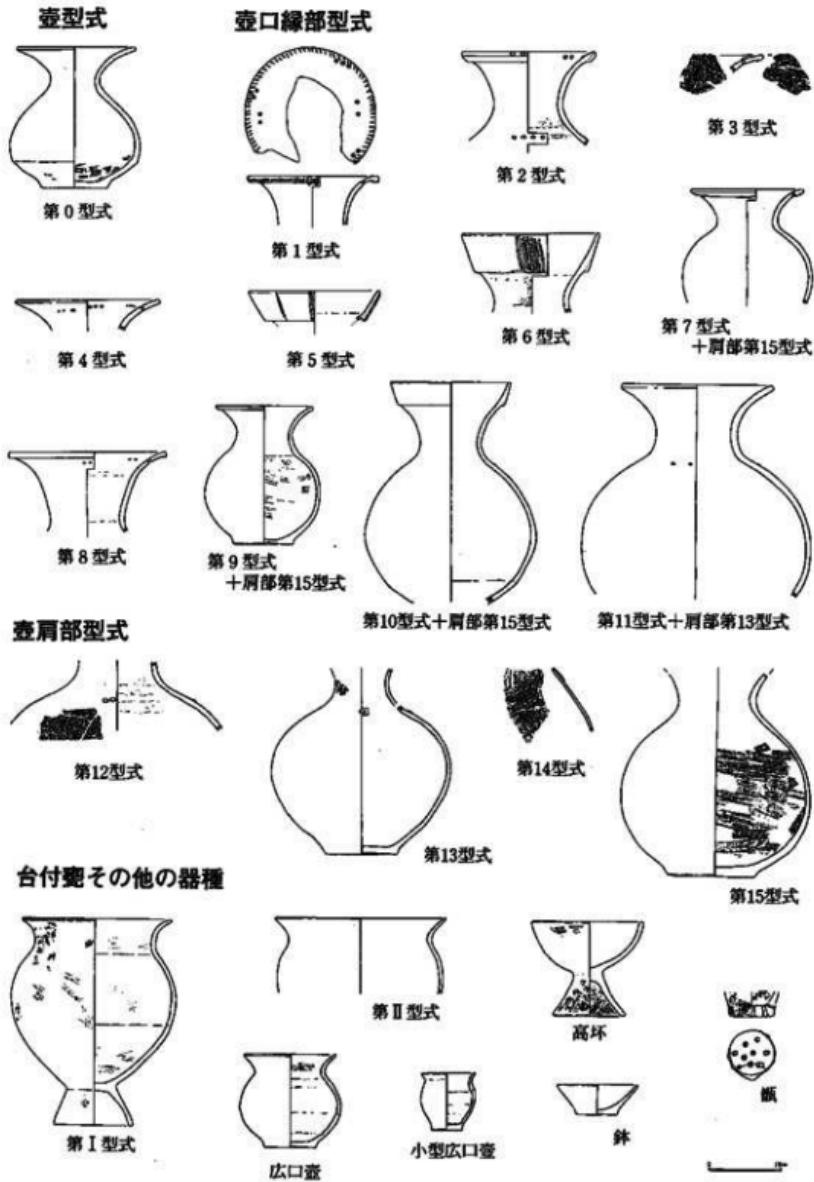
本遺跡では、縄文時代晩期の土器片、弥生時代中期の土器片が若干、中世末の掘立柱建物址1棟と同時期の溝1本が確認できたものの、主体となる時期は住居址25軒を検出した弥生時代後期後半である。ここでは、弥生時代後期後半の土器群の時期区分や編年的位置付けを検討し、各時期の集落構造の推定や遺跡立地の問題等を考察したい。

第1節 弥生時代後期後半の土器群について

この時期の土器群について検討した論文では、白居氏（1985）、中山氏（1986、1993）、山下氏（1987）、浜田氏（1988）などがあげられる。白居氏は櫛形町六科丘遺跡の報告の中で第Ⅰ期から第Ⅳ期までの3つの土器群と区分し、時期差を持つものとして位置付けている。壺形土器の口縁部の形態変化に着目し、第Ⅰ期が折り返し口縁をなし装飾がなされるもの、第Ⅱ期が折り返し口縁をなすが文様を施さないもの、第Ⅲ期が単純口縁となるものとし、これを含む住居址出土の土器を一括して各時期の土器群に帰属させている。六科丘遺跡は平野遺跡の北方約5kmの台地上にあり、時期や立地が本遺跡と近似しており、分析成果は大いに参考となる。山下氏は、韭崎市の藤井平地域の弥生時代後期の土器推移をⅠ期からⅣ期までの4段階に整理している。壺形土器の櫛描波状文・簾状文の消長を軸に組まれたものであるが、こうした中部高地系の土器群を主体とした状況が把握されており、東海地域系の土器群を主体とする平野遺跡や六科丘遺跡とは大きく異なることが確認される。

浜田氏は、中部高地系と東海系の2つの系統の弥生時代後期の土器群について、敷島町金の尾遺跡と櫛形町六科丘遺跡の分析を軸にして、甲府盆地内での展開状況を考察している。土器の分析方法として文様に着目し、施文具とその動かし方によって単位文様を抽出し、それを壺と甕の器種別に構成状況を検討して型式を設定している。そして、住居址出土などの一括遺物内での形式の構成状況により土器群を認識している。こうした方法により、「金の尾Ⅰ群」、「金の尾Ⅱ群」、「六科丘Ⅰ群」、「六科丘Ⅱ群」が区分され、周辺地域での研究状況を参考にこの順で新しくなる編年を提示した。特に東海系の六科丘遺跡の土器群の区分は、結果的に文様のある「六科丘Ⅰ群」から文様の消失した「六科丘Ⅱ群」への推移であるとの認識が提示された。

中山氏は、甲府盆地における古墳出現期の土器群を分析（中山1986）する中で、弥生時代後期後半についても検討している。口縁部形態や文様構成、器形といった要素に着目して器種分類を行い、それらの消長、構成状況を検討して、弥生時代後期後半をⅠ・Ⅱ期、古墳時代初頭をⅢ・Ⅳ期の4期に区分するとともに、それぞれを様式として様式名を付している。その後の資料の増加を受けて、この検討結果は1993年の甲斐弥生土器編年に結実した（中山1993）。この中で、弥生時代の土器編年を0期から6期までの7段階に分けて提示している。特に弥生時代後期の5・6期については、A、B相に分け、2つの系統の対峙する状況を示している。5



第97図 平野遺跡の壺、台付壺の型式とその他の器種

第3表 各造構の土器型式組成

| | 0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | |
|-----|-----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|
| 北谷 | ● | | | | | | | | | | | ● | | | ● | | | | | | | | | | | | |
| 3土 | ● | | | ● | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | |
| 21住 | | ● | | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | |
| 平 | 14住 | | ● | | | | ● | | | | | | | ● | ● | | | | | | | | | | | | 北 |
| I | 15住 | | | ● | | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | | | | | | | | | | 北 | |
| Ⅱ | 16住 | | | | ● | | | ● | | | | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | 北 | |
| Ⅲ | 3住 | | | | | ● | | ● | | | | | | ● | ● | | | | | | | | | | | 南 | |
| Ⅳ | 19住 | | | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | 北 | |
| Ⅴ | 13住 | | | | | ● | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | 北 | |
| Ⅵ | 8住 | | | | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | | | | | | | | | | 南 | |
| Ⅶ | 23住 | | | | | | | | ● | | | | | | | | | | | | | | | | | 南 | |
| Ⅷ | 1住 | | | | | | | | | | | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | 南 | |
| Ⅸ | 4住 | | | | | | | | | ● | | | | ● | | | | | | | | | | | | 南 | |
| Ⅹ | 5住 | | | | | | | | | ● | ● | | | ● | | | | | | | | | | | ● | 南 | |
| Ⅺ | 7住 | | | | | | | | | ● | ● | | | ● | | | | | | | | | | | | 南 | |
| Ⅻ | 9住 | | | | | | | | | | | | | | | ● | ● | | | | | | | | | | 南 |
| Ⅼ | 10住 | | | | | | | | | | ● | | | | ● | ● | ● | | | | | | | | | 南 | |
| Ⅽ | 11住 | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | ● | ● | | | | | | 南 | |
| Ⅾ | 17住 | | | | | | | | | | | ● | | | | ● | | | | | | | | | | 北 | |
| Ⅿ | 20住 | | | | | | | | | | | ● | | | | ● | ● | | | | | | | | | 北 | |
| ⅰ | 24住 | | | | | | | | | | | | ● | ● | | | | ● | | | | | | | ● | 南 | |
| ⅱ | 2住 | | | | | | | | | | | | | | | | | ● | ● | | | | | | ● | 南 | |

凡例 0～15は壺の型式、1・2は台付壺の型式。他はその他の型式。●は有

期では金の尾遺跡に代表される中部高地系土器群を主体とするものをA相、甲西町住吉遺跡に代表される東海系土器群を主体とするものをB相としている。6期では六科丘遺跡や平野遺跡を代表する「東部東海地方から西相模地域にひろがる結節縄文系の土器様式圏に含まれる」ものをA相、柳形町村前東A遺跡などの東海地方西部の尾張地域や北陸系などのいわゆる外来系の土器群をB相とした。

こうした研究状況をふまえて、土器の型式区分、様式の認定、編年上の位置について検討してみたい。まず型式の区分であるが、浜田氏が提示した単位文様に着目した方法で検討してみたい。ただし、平野遺跡では器体全体が把握できるような土器が非常に少ないので、まずは壺の口縁付近の状況を軸とし

た。また、単位文様としては棒状浮文、継列沈線文、ボタン状貼付文、網文、口縁部キザミ目、円孔、無文がある。これに有段口縁と折り返し口縁、単純口縁の器形要素も加えて型式を設定してみた。第1型式は折り返し口縁に口縁部キザミ目、内面の網文とボタン状貼付文、円孔がみられるものである。第2型式は折り返し口縁で口縁端部と内面にボタン状貼付文がみられる。第3型式は折り返し口縁で、内面にボタン状貼付文と円孔がみられるもの。第4型式は単純口縁で、内面にボタン状貼付文と円孔がみられるものとした。第5型式是有段口縁で、外面上に棒状浮文がみられるもの。第6型式是有段口縁で継列沈線文がみられるものである。第7型式は折り返し口縁で円孔のあるもの。第8型式は単純口縁で円孔のあるもの。第9型式は折り返し口縁で無文。第10型式が有段口縁で無文。第11型式が単純口縁で無文とした。また、これに肩部の文様のありかたを加えると、第12型式を肩部にボタン状貼付文と網文、第13型式をボタン状貼付文のみ、第14型式を棒状浮文のみ、第15型式を無文とする。なお、口縁部から肩部まで連続して型式の設定できるものは、第2型式と肩部の第12型式、第9、10、11型式と肩部無文の第15型式の組合せの4種類のみである。これらの型式に加えて、肩部最大径が

胴部下半部にある器形のものを第0型式としたい。これは北部埋没浅谷内から出土したもので、他の土器群は全て球形であるので、別型式として認識しておく必要がある（第97図）。

次に台付壺であるが、第Ⅰ型式の口縁部キザミ目と、第Ⅱ型式の単純口縁の2種類のみである。調整はおそらく外面が斜方向のハケメ、内面が横方向のハケメであったろうが、覆土の関係で器壁の磨耗が顕著で観察できないものが大半である。

これらの型式の各遺構内でのあり方を示したのが第3表である。壺の第0から4型式や第14型式の6つの型式は1つの遺構にしか存在しないし、個体数も1個体程度と非常に希少である。口縁部に文様を持つ第1から8型式までの個体を持つ遺構では、肩部に文様を持つ第12・13型式を持つことが多いようである。逆に口縁部に文様を持つ型式を持たない遺構は、肩部に文様を持つ型式を持たないとともに、有段口縁で無文の第10型式をも持っていない。一方、甕は2つの型式とも壺のあり方にかかわらず供伴関係がみられる。また第3表には、壺、甕の他の器種である高杯、広口壺、鉢、瓶の供伴の有無も示したが、大きな違いを示す要素にはならない。

このように、平野遺跡の土器群は、壺の文様の有無に着目して大きく2つの群に分けることが可能である。壺にボタン状貼付文、棒状浮文、縦列沈線文、口縁部キザミ目、繩文、円孔といった文様が付けられたものを含む一群を平野Ⅰ群とする。文様が付けられない壺のみによって構成される一群を平野Ⅱ群とする。いずれの土器群にも無文の壺や口縁部キザミ目や単純口縁の台付甕、その他の器種が伴っている。

ところで、第3表には各遺構の位置する地区的別を示したが、平野Ⅰ群は北地区に多く、平野Ⅱ群は南地区に多い状況が分かる。実は発掘調査時の所見で、南地区的住居址に覆土がかなり失われ、出土土器の量がかなり少ないものが多い状況であった。土器の出土量が少なければ有文の壺が含まれる確率が少くなるし、1つの個体でも土器片にした場合の有文土器片の量はかなり限定されるので、増え出土する確率が少なくなるだろう。出土量が少なければ、本来有文の土器を持っていても、確率論的に把握されない可能性が高くなる。そこで、そのへんの検証のために、各住居址の出土土器量を計測してみた。第4表には、文様（この場合、ボタン状貼付文、棒状浮文、縦列沈線、繩文）を持つ土器片の重量（有文土器量）と、無文土器量、全土器重量を示した。その配列は第3表と同じにしてある。平野Ⅰ群では全土器重量が3kgを越えるものがほとんどであるが、平野Ⅱ群では3軒のみであり、明らかに土器出土量に違いがみられる（なお、3住と10住は、重複する2住と12住の土器量を合わせて示した）。

そこで、土器出土量が3kgを越えるものみで状況を見てみると、平野Ⅰ群が8軒で北地区5軒、南地区3軒の内訳である。平野Ⅱ群は3軒で南地区のみである。平野Ⅰ群が南北両地区にあるが、平野Ⅱ群が南地区のみにある状況が把握できる。懸念された土器出土量の問題で、信頼性が高いと考えうるもののみに限定しても、平野Ⅰ群と平野Ⅱ群は区分可能であり、両者の住居址の分布上の特徴も認識できる状況である。

次に、平野Ⅰ群と平野Ⅱ群の編年的位置についてであるが、平野Ⅰ群は白居氏の六科丘第Ⅰ期、浜田氏の六科丘Ⅰ群に対比可能である。また、平野Ⅱ群は白居氏の六科丘第Ⅱ期、浜田氏の六科丘Ⅱ群に対比可能である。中山氏の編年では両群とも弥生6期A相に含まれる。

第4表 各住居址の有文土器と無文土器の重量

| | 有文土器量 | 無文土器量 | 全土器重量 | 地区 | 備考 |
|-------------------|------------|---------|---------|----|--------|
| 平 野 I 群 | 21住 6.80g | 5.780g | 8.460g | 北 | |
| | 14住 3.0g | 7.70g | 8.00g | 北 | |
| | 15住 1.080g | 2.870g | 3.450g | 北 | |
| | 18住 3.0g | 3.280g | 3.510g | 北 | |
| | 3住 0.0g | 4.780g | 4.870g | 南 | 2住を含む |
| | 19住 1.60g | 7.690g | 7.850g | 北 | |
| | 13住 2.220g | 1.5240g | 1.7480g | 北 | |
| | 8住 6.00g | 7.780g | 8.380g | 南 | |
| | 23住 1.60g | 1.80g | 3.50g | 南 | |
| | 1住 4.0g | 3.290g | 3.330g | 南 | |
| 平 野 II 群 | 4住 0g | 7.70g | 7.70g | 南 | |
| | 5住 0g | 3.140g | 3.140g | 南 | |
| | 6住 0g | 3.50g | 3.50g | 南 | |
| | 7住 0g | 1.580g | 1.580g | 南 | |
| | 8住 0g | 2.110g | 2.110g | 南 | |
| | 10住 0g | 8.980g | 8.980g | 南 | 12住を含む |
| | 11住 0g | 3.380g | 3.780g | 南 | |
| | 17住 0g | 6.10g | 6.10g | 北 | |
| | 20住 0g | 1.380g | 1.380g | 北 | |
| | 22住 0g | 6.50g | 6.50g | 南 | |
| | 24住 0g | 1.360g | 1.360g | 南 | |
| | 16住 0g | 8.0g | 8.0g | 北 | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |

第5表 住居焼失に関する属性表

| | 焼付陶 | 焼付瓦 | 有文器 | 有鉢陶 | 木製器 | 石器 | 玉類 | 土器群 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|-----|
| 5住 | ● | × | ● | ● | ● | B・E | 中央B | I |
| 10住 | - | ● | ● | × | ● | A・B | 中央B | I |
| 11住 | × | ● | × | × | ● | E | 中央B | I |
| 23住 | ● | ● | ● | ● | ● | × | 南 | I |
| 9住 | × | × | ● | ● | ● | A | 中央B | I |
| 22住 | × | × | ● | ● | ● | B | 南 | I |
| 13住 | × | × | ● | ● | ● | A・B・C | 北 | I |
| 18住 | × | × | ● | ● | ● | A・B | 北 | I |
| 7住 | × | × | ● | ● | ● | A・D | 南 | I |
| 12住 | × | × | ● | ● | ● | E | 中央B | I |
| 21住 | × | × | ● | ● | ● | A・B・E | 北 | I |
| 4住 | - | - | - | - | ● | B | 中央B | I |
| 15住 | - | - | - | - | ● | B | 北 | I |
| 17住 | - | - | - | - | ● | D | 北 | I |
| 1住 | × | × | ● | ● | ● | B | 中央A | I |
| 3住 | × | × | ● | ● | ● | × | 中央A | I |
| 8住 | × | × | ● | ● | ● | ● | 中央A | I |
| 2住 | × | × | ● | ● | ● | ● | 中央A | I |
| 19住 | × | × | ● | ● | ● | E | 北 | I |
| 24住 | × | × | ● | ● | ● | E | 中央B | I |
| 6住 | - | - | - | - | ● | - | 中央B | I |
| 14住 | - | - | - | - | ● | - | 北 | I |
| 16住 | - | - | - | - | ● | - | 北 | I |
| 20住 | - | - | - | - | ● | - | 北 | I |
| 25住 | - | - | - | - | ● | - | 北 | - |

凡例 ● 燃焼有、× 燃焼無、- 住居土器消失などで算出不能

ところで、第0型式の壺の位置付けであるが、近隣では甲西町住吉遺跡の土器群にいわゆる「無花果形」の器形の壺が見られる。浜田氏は住吉遺跡の土器群を静岡県西部の菊川式に対比し、古一中一新の3段階のうち中から新段階に入るとしている。そして、「六科丘I群と同時期か、やや古い段階に位置づけられるかもしれない」としているが、その位置付けについては消極的である。中山氏はこれを菊川式新相と認め、弥生5期B相の(2)期に位置付けて、六科丘遺跡の土器群より古く位置付けている。本遺跡では出土量が少なく土器群として認識するには至らないし、出土状況も平野I・II群土器群が集落を形成するのに対し、谷部での一括出土であり、位置付けを論ずるには資料不足である。ここでは、平野遺跡の弥生時代後期の土器群の中に、主体となる平野I・II群とは別の土器群がありそうだといった程度の認識に止めたい。

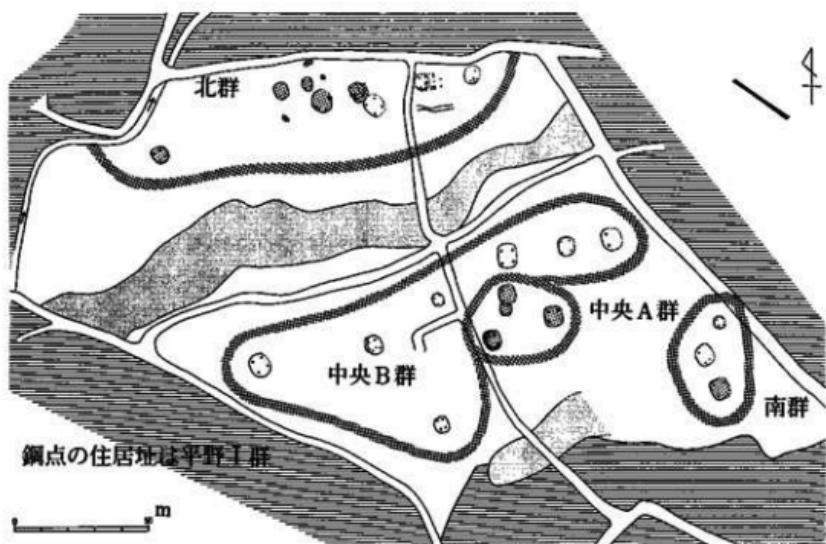
第2節 弥生時代後期後半の住居址群の区分

土器群を2つの群に分けたうえ、古い様相の平野I群の住居址が南北両地区に、新しい様相の平野II群の住居址が南地区に限定的にある状況を認めた。この点をふまえ、まず、平野I群の住居址全体の分布状況を見てみよう(第98図)。北地区では10軒ある住居址のうち6軒が平野I群である。南地区では南北の浅谷に継まれた尾根の中央南斜面に3軒が集中している。そして、これらからやや離れて南端部に1軒みられる。なお、切り合い関係から、15号住居址より古い16号住居址、3号住居址より古い2号住居址を平野I群に加えたい。

平野II群については、確実な5・10・11号住居址が南地区の尾根上に位置している。土器出土量が少いが有文土器片のない4・6・24号住居址が同様に尾根上に東西方向に配列しており、あるいは、これらを含めてこの尾根上に東西方向に配列するような分布を示していたのかもしれない。しかしこれを加えても、新段階の住居址は古段階に比べて住居址間の距離が離れている点が注目される。

単に住居址の分布だけで群を区分すると、北地区的北群、南地区的中央尾根上の中央群、南端部の南群に三分できる。これに土器群の様相を加味すると、中央群が平野I群によって構成される中央A群と、平野II群で構成される中央B群に二分できる(第98図)。北群が10軒で平野I群が7軒、土器量が少いがとりあえず残り3軒を平野II群とする。中央A群が平野I群のみ4軒、中央B群が平野II群のみ8軒、南群が平野I群1軒、平野II群2軒とする。

住居址群の特徴としては、古段階の住居址群が団塊状を示すのに対し、新段階では分散的、配列的な分布を示す点があげられる。もう一つ、特徴として示しうるのは、古段階の住居址群に切り合い関係を持つものが多い点である。14・15・16号住居址、2・3号住居址と8号住居址である。古段階のものは長期間居住しており、同一ヶ所での建て替え等を行っているのであろうか。土器群の認定には土器片を主体に行っており、住居址周辺に廃棄された古い土器片が新段階での住居址廃絶後に流れ込んでいる可能性も考えうる。そうすると、新段階の住居址群は、古段階の住居址群のある部分が居住を続けている中へ新たに参入した集団の住居址である可能性もある。そこでさらに、焼失住居の様相を検討し、集落像にせまりたい。



第98図 平野遺跡の弥生時代後期住居址群区分図

第3節 弥生時代後期後半の焼失住居と集落像

平野遺跡の弥生時代後期後半の住居址の特徴として、いわゆる焼失住居と思われるものが多い点がある。こうした傾向については、この時期の特徴としてかねてから注目されていた（石野1983）。ここでは、焼失住居の認定について検討した後、一括出土遺物との関連を考えながら焼失住居の意味について検討してみたい。

平野遺跡の住居址で住居焼失に関わる要素として、いくつかの属性があげられる。まず、床面や壁面そのものが赤く硬化し、焼けていると判断されるものである（焼け床、焼け壁）。次に厚さ数cmの焼土層が床面直上の一定範囲に分布するものである。住居址の壁に接する部分に帶状に分布するものと、住居址中央に分散分布するものとがある（焼土層）。また、棒状や板状の建築材としての形態がある程度わかる木炭が、床面上や周溝内に配列するものがある。これら炭化材は覆土中に浮いている場合もある（材配列）。さらに、覆土中にある程度の厚さを持つ木炭層を形成しているものがある。周溝や床面直上を覆い広い範囲に分布するものと、覆土中に浮いた状態で一定範囲に見られるものがある（木炭層）。

これらの構成状況を見てみたのが第5表である。床面や壁が焼けたものは4軒ある。これらは焼土層や木炭層を伴う場合が多いが、材配列の見られるものが少い。焼けた床面や壁は見られないが焼土層や材配列が見られるものが7軒ある。焼土層は木炭層の上に乗っていたり壁直下に帶状に分布しているものがあり、住居上屋構造が覆い土で覆われていて、それが焼けて崩壊した上屋構造を覆うように壁直下に分布するに至ったのかもしれない。いずれにしてもこれ

ら11軒については住居の上屋構造が一挙に焼けたものとの判断が可能である。

これに対し木炭層のみのものが6軒ある。このうち、4・15・17号住居址は周溝の一部が確認できるが床面や壁はほとんど搅乱を受けて失われている住居址である。木炭層は周溝内は確認されるが、3例ともほぼ木炭片のみの木炭層がブロック状に確認されている。一方、1・3・8号住居址では、いずれも覆土中に浮いたかたちでブロック状の木炭層がみられる例である。

これに対し、住居焼失に関わる要素が見られない住居址が8軒ある。いずれも、覆土中に木炭片が見られるが、木炭層を形成するほど多量には入らないものである。このうち、6・14・16・20・25号住居址の5軒は周溝のみが残存し、周溝覆土のみでの判断で不確定要素を持つ。これに対し、2・18・24号住居址は床面や壁がかなり残存しているもので、住居焼失とは無縁な住居址の確実な例と言える。

さて、これらの中、住居址が焼失したと思われるものは、焼失要素を2種類以上持つものとしたい。焼失要素が1種類のものは、覆土中に木炭層ブロックを持つもので、木炭片に一括発見の可能性もあるので、必ずしも家屋の焼失の証拠とはしがたい。周溝のみの住居址は判断を保留するとして、平野遺跡ではいわゆる焼失住居が11軒、非焼失住居が6軒となる。そして、非焼失住居の内24号住居址以外は全て平野Ⅰ群の古段階の住居址群であり、しかも中央A群がほとんどである点が注目される。全体の焼失住居の占有率が65%であるが、平野Ⅰ群では焼失住居が4軒、非焼失住居が5軒で、焼失住居占有率为44%であるのに対し、平野Ⅱ群では焼失住居が7軒、非焼失住居が1軒で、焼失住居占有率が88%と2倍に増加しているのである。

次に、一括出土遺物との関連を考え合わせて、焼失住居の意味を考えてみたい。一括出土遺物には、床面上に完形土器や大型土器片、石器などが分布するもの（A類）と、周溝内に完形土器や大型土器片、石器などが分布するもの（B類）とがある。第5表には、各住居址内でのあり方を示したが、焼失住居11軒中6軒にA類が、6軒にB類が見られ、8軒72%に一括出土遺物が見られる。一方、非焼失住居では6軒中1軒にB類が見られるのみである。しかも、この1号住居址の場合、一個体分の割れた壺の集中出土であり、複数個体の見られる焼失住居の例からするとやや小規模である。

ところで、一括出土遺物の出土位置を見てみると、A類では、住居址南半部に見られることが多く、13・21号住居址のようにあたかも南西と南東の柱を取り囲むように分布するものがある。住居址北半部に分布するものは7・19号住居址で、いずれも北東側にかたよる。つまり、北西部の柱穴周辺の床面上には大型遺物は見られない。B類ではやはりほとんどが住居址南半部の周溝内であり、特に南壁直下の周溝内で、中央というよりは東西いずれかのコーナー側にかたよって分布する傾向がある。これ以外では、22号住居址の石錐の一部が北西コーナーに、13号住居址で壺がやはり北西コーナーに位置していた。このように、一括出土遺物の出土位置に住居址南半部に集まる傾向が見られる。

この一括出土遺物の中で、壺の肩部から上の部分をきれいに割り取り床の上に置いたような出土状況を示したものが2例見られた。7・21号住居址である。また、一括出土遺物は柱穴をふさがないように分布しているが、わざわざ柱穴上に置いたように分布する土器がある。一

括出土遺物ではないが、柱穴上のものを遺物出土状態の一類型として把えC類として区分する。7・13号住居址に見られ、7住では壺上半部の出土状況と共に伴する。C類の出土位置はいずれも南西部の柱穴上で小型壺である。おもしろいことに、南西部の柱穴内に小型壺を横位にして埋納した例が17号住居址で把握されている（D類）。C・D類はおそらく柱材を抜き取り、それを埋める過程や埋めた後に置かれたものと判断され、住居址廃絶に伴う儀礼行為の存在を推定させる。柱穴内には木炭片すら見られない状況で、その位置を確認するにも苦労するようなものばかりである。各住居址で柱材の抜き取りと、その後すぐに柱穴を埋めるような行為の存在が広く見られる可能性も考えうる。したがって、柱材抜き取り、柱穴埋め、儀礼行為、住居焼失という順序での人間行動が復原できる。

この点に關注して、10・12号住居址の切り合いでは、焼失住居同士での切り合いである。まわりに広く土地があるにもかかわらず、微妙にずれるような切り合いのあり方をみると、10号住居址は住居建て替えに伴い故意に焼かれた可能性もある。一概に住居焼失といつても、この中には住居廃絶に伴い、故意に上屋を焼いた例も存在していると考えられる。

ところで、遺物出土状況の中で、完形やそれに近い土器、石器が覆土中に数十cm浮いた状態で出土するものがある（E類）。5号住居址では小口広口壺と土製紡錘車、11号住居址では磨製石庵丁、12号住居址では土製紡錘車、21号住居址では小型壺と磨面のある大型砾、18号住居では中型壺、24号住居址では小型壺である。こうした遺物の出土位置は北半部に多い傾向があり、一括出土遺物と出土位置を異にする。住居址覆土中には多量の土器片が入り、11・12号住居址の所で検討したとおり、居住中に住居周辺に廃棄したものが細片となり流れ込んでいると思われる。こうした遺物と同様に流れ込みである可能性は十分あるが、完形土器や希少な石器、土製品などであり、出土位置の特異性を考えると、住居址北半側のいずれかの位置に置かれていた可能性がある。この類型は、非焼失住居にもみられる。住居廃絶に伴い、儀礼行為を含む人間活動にいくつかの類型があるものと考えられる。それは、柱材抜き取り、柱穴埋めもどし、完形土器の南西部柱穴への埋納、完形土器やそれに近い土器の南西部柱穴埋めもどし後の安置、壺の上半部の床面上への安置、上屋の焼きはらい、完形土器などの住居址北半側外部への安置、などの人間行動の組み合わせによるものである。さらに、13号住居址では炭化米の出土状況から、住居南西コーナー部での儀礼的な行為も推定した。また、この人間行動と一括出土遺物が共存する場合があり（7・13号住居址）、遺物の床面や周溝への一括廃棄あるいは廃棄も、住居廃絶に伴う人間活動の一部である可能性も考えられる。

弥生時代後期を中心とする住居焼失例を、戦乱に伴うものとの考え方もあるが、平野遺跡では一概に全てをそうだとするには不確定要素が多いように思われる。住居廃絶に伴う儀礼的人間活動と思われるものが見られない焼失住居は、9・12・19・22・23号住居址の5軒で、焼失住居中46%、約半数である。平野Ⅰ群が2軒、平野Ⅱ群が3軒である。南群に2軒、中央B群に2軒、北群に1軒と分散しているが、中央A群にはみられない点が注目される。また、22・23号住居址、9・12号住居址が隣接して位置する点も注目される。さらに、住居廃絶に伴う儀礼的人間活動の要素がみられず、焼失住居でもないものは、中央A群に集中分布すること

とも注目される。また、北群の住居址は住居廃絶に伴う儀礼的人間活動の要素を持つものが多く、中央B群の住居址はE類がみられるものの他の儀礼的要素がない点で共通する。こうした点を総合すると、こうした人間行動があるまとまりをもった単位性を持って出現しており、この住居址群区分が行動体系を異にする人間集団の違いを示す可能性がある。これらの住居址群が、それぞれ時期の違う集落と考えるよりも、時間差をもって到来した出自の異なる複数の集団が同居する集落像を示している可能性を結論として提示しておきたい。

引用文献

- 白居直之 1985 「第V章弥生時代の成果と課題」『六科丘遺跡』 横形町教育委員会他
中山誠二 1986 「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」『山梨考古学論集』 I 山梨県考古学協会
山下孝司 1987 「中本田・堂の前遺跡」 莢崎市教育委員会
浜田晋介 1988 「弥生時代後期の甲府盆地—異系統土器の相互交流とその様相ー」『山梨県考古学協会誌』 第2号 山梨県考古学協会
石野博信 1990 「日本原始・古代住居の研究」 吉川弘文館
中山誠二 1993 「甲斐弥生土器編年の現状と課題ー時間軸の設定ー」『研究紀要』 9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

写
真
図
版

図版 1



平野遺跡遠景（東から）



南地区南部（北から）



南地区西部（東から）



南地区から北地区西部を望む



北地区から北側埋没浅谷と南地区を望む



北地区西半部（東から）



発掘調査風景



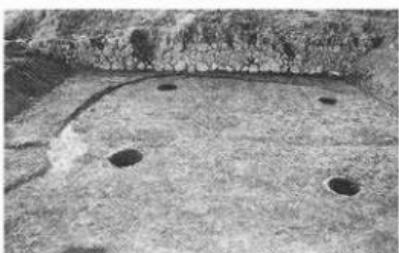
1号住居址（東から）



2号住居址（東から）



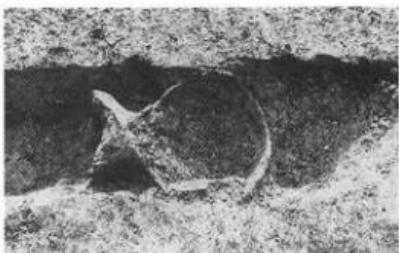
3号住居址（東から）



4号住居址（東から）



4号住居址周溝内木炭片出土状況



4号住居址周溝内壺出土状況



5号住居址（東から）



5号住居址木炭片焼土等出土状況

図版 3



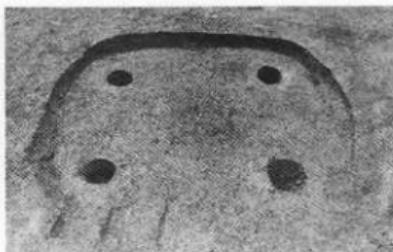
5号住居址台付甕出土状況



5号住居址壺出土状況



6号住居址（東から）



7号住居址（東から）



7号住居址遺物等出土状況



7号住居址壺口縁部出土状況



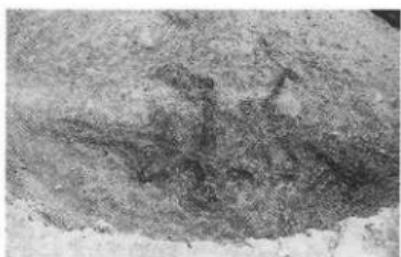
8号住居址（東から）



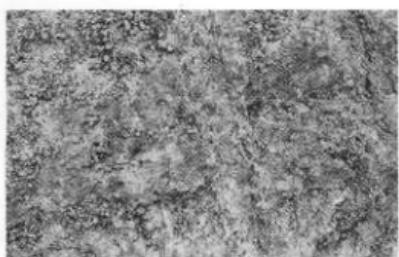
9号住居址（東から）



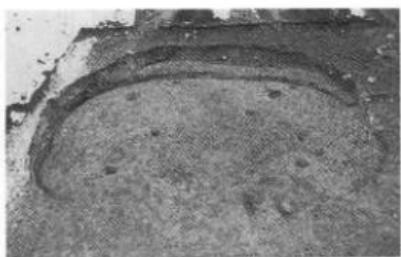
9号住居址木炭片等出土状況



9号住居址炭化材出土状況



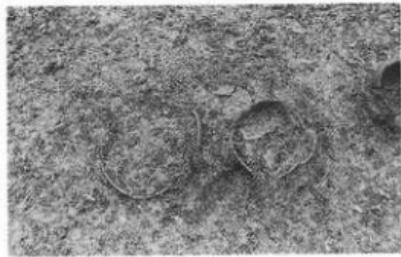
9号住居址炭化材出土状況（拡大）



10・12号住居址（東から）



10・12号住居址焼土・木炭出土状況



10号住居址土器出土状況

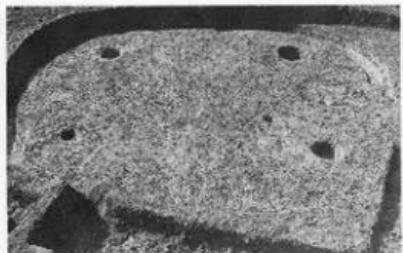


10号住居址磨石出土状況



11号住居址（東から）

図版 5



13号住居址（東から）



13号住居址遺物出土状況



13号住居址土器出土状況



13号住居址高坏出土状況



13号住居址土器出土状況



13号住居址壺出土状況



13号住居址周溝内土器出土状況



13号住居址遺物出土状況



13号住居址土壤サンプリング風景



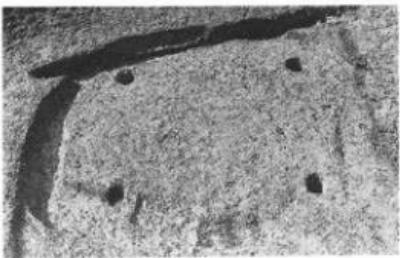
14・15・16号住居址（東から）



17号住居址（南から）



17号住居址柱穴内壺出土状況



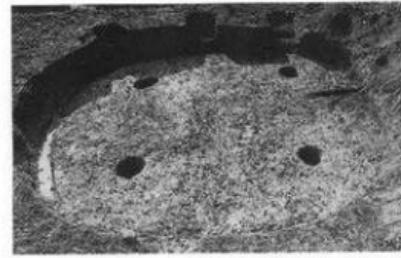
19号住居址（東から）



19号住居址台付壺出土状況



18号住居址（西から）



21号住居址（東から）



21号住居址遺物出土状況

图版 7



21号住居址土器出土状況



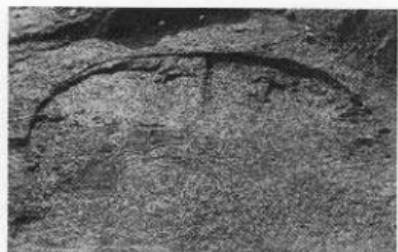
21号住居址土器出土状況



21号住居址壺出土状況



22号住居址（東から）



22号住居址木炭片出土状況



22号住居址炭化材出土状況



22号住居址石錘（北群）出土状況



22号住居址石錘（南群）出土状況



23号住居址（東から）



23号住居址焼土出土状況



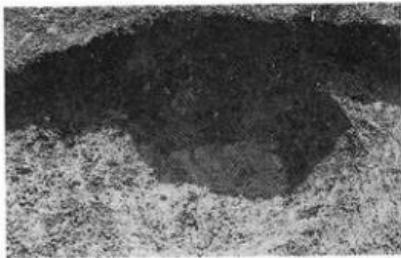
24号住居址（東から）



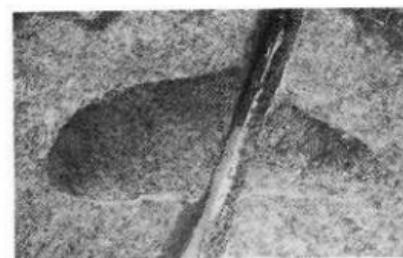
25号住居址（東から）



1号土坑（北から）



2号土坑（北から）



3号土坑（北から）



3号土坑上面遺物出土状況（北から）

図版 9



3号土坑土器出土状況（南から）



3号土坑土器出土状況



北側埋没浅谷E-F線土層断面（東から）



北側埋没浅谷G-H線土層断面（東から）



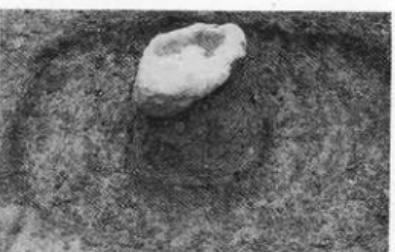
南側埋没浅谷（東から）



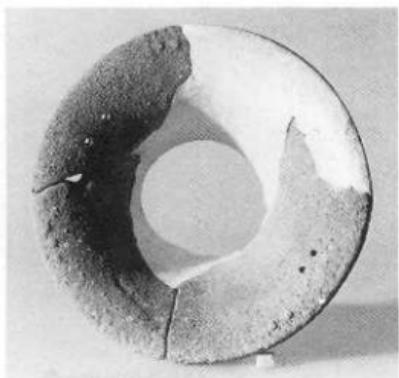
1号掘立柱建物址と20号住居址（東から）



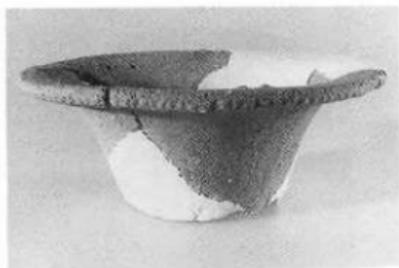
1号溝（北から）



4号土坑（東から）



13号住居址出土壺



3号土坑出土壺



21号住居址出土壺

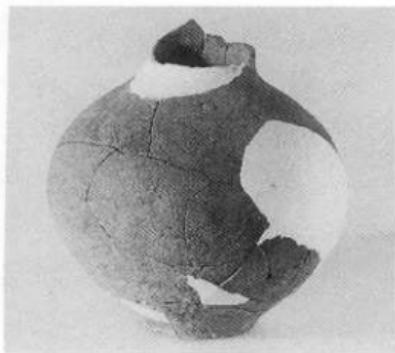


4号住居址出土壺



21号住居址出土壺

图版11



13号住居址出土壺



13号住居址出土壺



北侧埋没浅谷出土壺



7号住居址出土壺



17号住居址柱穴内出土壺



5号住居址出土壺



21号住居址出土壺



21号住居址出土壺



21号住居址出土壺



13号住居址出土高坏



19号住居址出土広口壺



21号住居址出土広口壺

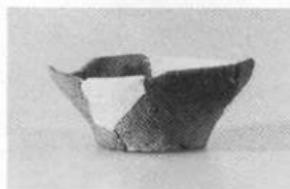
图版13



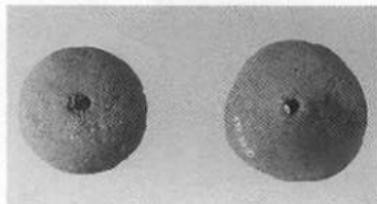
13号住居址出土
広口壺



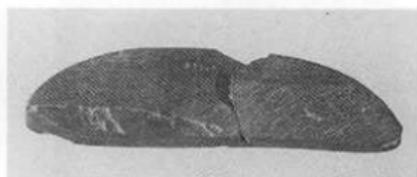
19号住居址出土台付甕



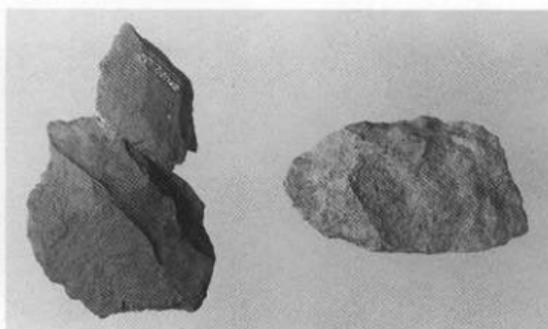
18号住居址出土鉢



土製紡錘車
(左・5号住居址、右・12号住居址)



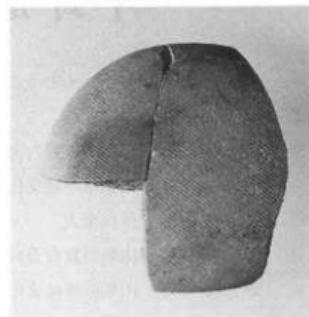
磨製石包丁 (11号住居址)



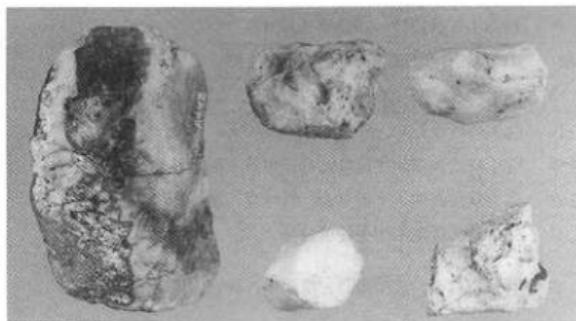
打製石斧 (左・12号住居址) 剥片 (右・11号住居址)



砥石（13号住居址）



磨石（10号住居址）



石英礫（1号掘立柱建物址・左小穴21出土、右4点小穴22出土）



1イネ（試料番号F-7）

2サンショウ
(試料番号F-7)

13号住居址土壤水洗還別種実遺体

平野遺跡報告書概要

| | |
|--------------|--|
| フリガナ | ヒラノイセキ |
| 書名 | 平野遺跡 |
| 副題 | 発掘調査報告書 |
| シリーズ | 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第78集 |
| 編著者名 | 保坂康夫 |
| 発行者 | 山梨県教育委員会 |
| 編集機関 | 山梨県埋蔵文化財センター |
| 住所・電話番号 | 山梨県東八代郡中道町下曾根923・☎ 0552-66-3881、66-3016 |
| 印刷所 | 株式会社ヨネヤ |
| 印刷日・発行所 | 1993年3月19日・1993年3月31日 |
| 遺跡所在地 | 山梨県南巨摩郡増穂町最勝寺字平野 |
| 1/25000地図・位置 | 鍋沢・北緯35°33'27" 東経138°33'4" 標高 315~350m |
| 主要な時代 | 弥生時代後期末、中世末 |
| 遺跡 | 弥生時代後期末住居址25軒、中世末掘立柱建物址1棟 |
| 概要 | 弥生時代後期末土器（壺、台付甕、高坏） |
| 特殊遺構 | 弥生時代後期末焼失住居11軒 |
| 特殊遺物 | 磨製石砲丁、大型砥石、炭化米、柱穴内出土壺 |
| 調査期間 | 試掘調査 1991年3月5日～3月26日 本発掘調査 1991年9月2日～1992年1月23日 |

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第78集

平野遺跡 発掘調査報告書

印刷日 1993年3月19日

発行日 1993年3月31日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行 山梨県教育委員会

印刷 株式会社 ヨネヤ

